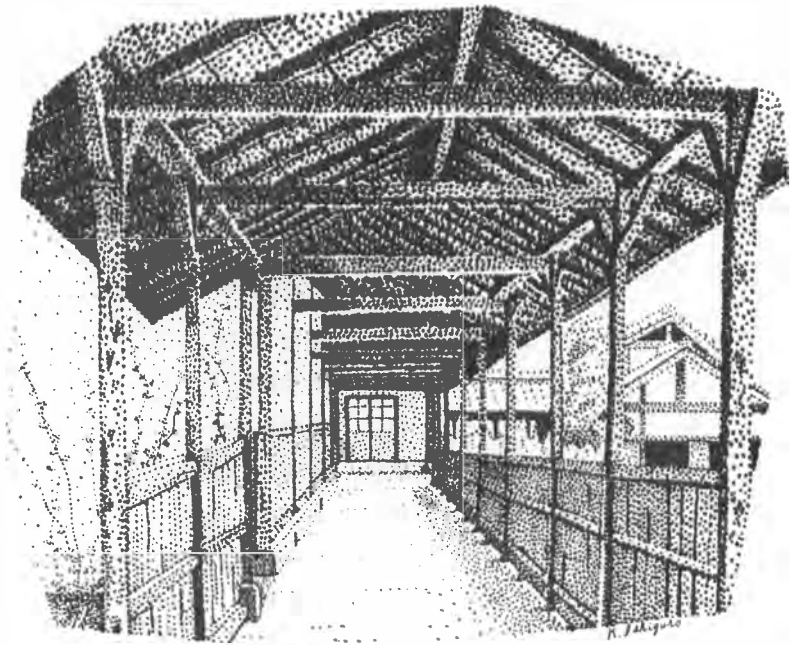


## 教室および附属施設史

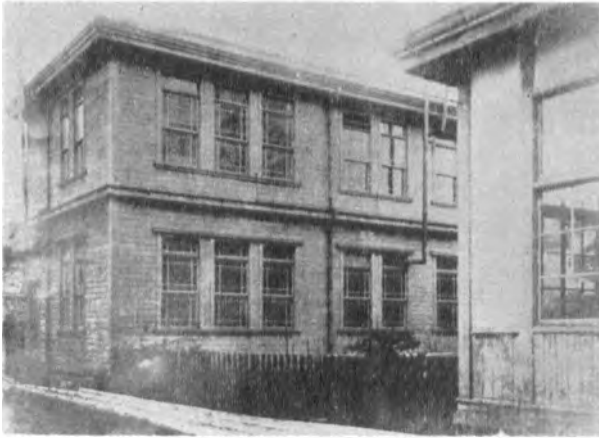


旧花園進学課程学舎廊下

解剖学教室	435	耳鼻咽喉科学教室	518
生理学教室	441	神经精神医学教室	524
生化学教室	446	放射线医学教室	528
病理学教室	451	麻醉学教室(附・中央手术部)	530
医动物学教室	457	齿科学教室	534
微生物学教室	461	临床检查部	537
药理学教室	465	中央研究室	540
卫生学公衆卫生学教室	468	物理学教室	542
法医学教室	471	化学教室	543
第1内科学教室	475	生物学教室	545
第2内科学教室	479	数学教室	546
第3内科学教室	482	英语教室	548
第1外科学教室	485	ドイツ語教室	549
第2外科学教室	489	人文科学教室	551
整形外科学教室	494	社会科学教室	553
产妇人科学教室	498	看護学院	554
小兒科学教室	502	図書館	556
眼科学教室	507	事務局	558
皮膚科学教室	511	薬剤部	564
泌尿器科学教室	514	看護部	568

## 解剖学教室

本学の前身である京都療病院の仮療病院(木屋町療病院)が上京区木屋町通二条下ル上樵木町で開設されたのは1872年(旧暦明5)9月15日であった。ドイツから迎えた36歳の婦人科医 Junker von Langegg を外人教師として診療が開始された。10月24日には愛宕郡第2組栗田口村の青蓮院内の旧栗田宮跡に仮療病院ができあがったので、木屋町療病院はここに移転し、11月1日には京都療病院の仮療病院としての栗田口療病院がここで開設された。開設とともに療病院生徒が募集され、毎日午前中1時間 Junker によって解剖学の講義が行なわれた。その講義録をまとめた「解剖捷覧」が1875年(明8)2月に京都療病院日講録付録として刊行されている。療病院開設の翌年の1873年(明6)2月には、栗田口解剖所で新宮涼閣ら数名によって、9日間にわたって4体の刑屍の解剖が行なわれた。維新後京都での初めての解剖であったので、近府県の医師ら数百名が参観した。この解剖所が栗田山中に建てられたのは1872年(旧暦明治5年)2月で、初め舎密局が管理していたが、1873年(明6)2月に療病院の管理に移されている。療病院から京都府に申請していた篤志解剖が許可されたのは1873年(明6)6月であった。そこで、その年の10月には仮療病院内に篤志解剖を行なうための仮解剖所がつくられた。仮療病院内で篤志解剖が初めて行なわれたのは1874年(明7)1月で、脳脊髄膜炎で死亡した22歳の女性が解剖されている。当時の篤志解剖数は1874~75年(明7~8)には年平均3体、1876~78年(明9~11)には年平均7体、1879~80年(明12~13)には年平均14体であった。これとは別に栗田口解剖所では刑屍の解剖が行なわれていた。療病院生徒の時代の前期には、解剖学の講義は Junker によって行なわれていたが、後期になると萩原三圭や田村克己によって行なわれるようになった。Junker は1876年(明9)3月にやめているが、その前年の1875年(明8)の6月には高知県人で長崎の精得館出身の前東京医学校教授萩原三圭が京都療病院の解剖科教授になっており、またその2ヵ月後の8月には東京医学校出身の田村克己が解剖科教授副になっている。なお萩原は田村が来た翌月の9月には療病院の管学事に任命されている。療病院生徒の時代が過ぎてはっきりと医学校の形をとるようになったのは、1879年(明12)4月に京都療病院医学校が設立されてからである。この年の9月には上京区第12組梶井町の現在地に医学校の新校舎が竣工し、療病院より一足先に医学校が栗田口からここへ移転した。京都療病院医学校がつくられて2年後の1881年(明14)7月に



古い解剖学教室（1920年大9頃）

1906年(明39)に新築され、1951年(昭26)まで45年間にわたって使用された。この跡には総合講堂がたてられた。

は、医学校が療病院から独立して京都府医学校となった。萩原は療病院医学校の設置とともにその初代の校長になったが、1881年(明14)9月には退職した。

京都府医学校になってからの解剖学専門の初代の教諭は田村克己で、1882年(明15)9月に解剖科教授副から教諭に昇進している。田村は解剖標本の作製にすぐれた技量をもっていたが、1890年(明23)12月に死去した。その後を継いだ加門桂太郎は、岡山県人で帝国大

学医科大学を1890年(明23)に卒業した医学士で、1891年(明24)2月に京都府医学校の教諭となり、1893年(明26)7月に東京で開催された第1回解剖学会に参加した12名の中にも加わっている。研究の分野は中枢神経系で、1898年(明31)5月には「神経系統中枢器図譜」(非売品)を著している。加門は1899年(明32)7月には校長事務取扱となり、9月に校長に任命されたが、翌1900年(明33)5月には京都帝国大学医科大学助教授に転出した。その後を継いだのが赤座寿恵吉である。赤座は1888年(明21)3月に雇として岡山の第3高等中学校医学部の解剖学教室に入り、数年後には助教授となったが、1899年(明32)12月には京都帝国大学医科大学の助手に移り、すぐその翌年の1900年(明33)の5月には京都府医学校の講師を嘱託され、1901年(明34)1月に教諭に任ぜられている。赤座は間もなく改築された解剖学教室の充実整備に大いに力をつくし、教室建設の大きな功労者となった。また赤座は組織標本の作製に卓越した技量をもっていた。1903年(明36)6月に京都府立医学校は京都府立医学専門学校となり、解剖学にも2名の教諭がおかれることになり、1904年(明37)7月に助教諭田村克己が教諭に昇進した。田村克己は初任教諭田村克己の令息で、京都府医学校の1895年(明28)の卒業で、初めての母校出の教諭であった。しかし田村克己は3年半で1908年(明41)2月に退職した。1905年(明38)4月から校舎の改築工事が始まったが、1906年(明39)3月には解剖学教室の2階建1棟と組織実習室・標本室・供覧室などの2棟が竣工した。2階建の方の階上は教諭室と図書室にあてられ、階下は助手室と研究室にあてられた。またその翌月には解剖学教室の南側に病理解剖室と棟続きで死体貯蔵室および解剖実習室が竣工した。これらの建物は1951年(昭26)末まで約45年間にわたって使用された思い出深い建物であった。田村の退職の



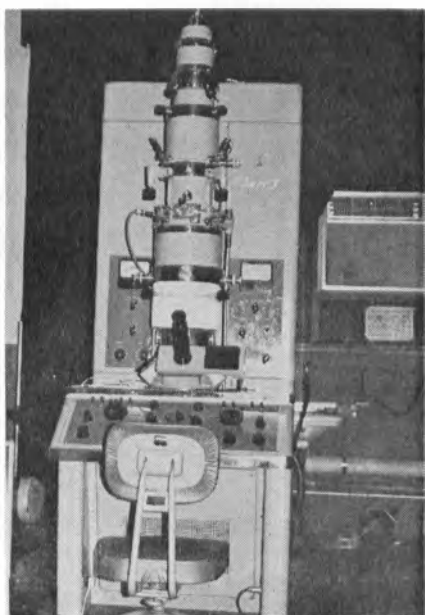
後をうけて、1908年(明41)4月には愛知県立医学専門学校出身で、京都帝国大学福岡医科大学助手の前島長裕が教諭として赴任してきた。しかし、6年後の1914年(大3)7月には教諭陣容刷新の渦に巻き込まれて休職になり、翌1915年(大4)7月には退職し、それから間もない1918年(大7)6月には死去したが、その遺骨は全身骨格標本に組み立てられて総合標本室に保存されている。前島の休職とともに1914年(大3)8月には、京都帝国大学医科大学助手の医学博士岡嶋敬治が教諭に任ぜられた。岡嶋は富山人で、金沢医学専門学校を1901年(明34)に卒業し、1906年(明39)10月には長崎医科専門学校教授となったが、その翌年の1907年(明40)10月には京都帝国大学京都医科大学解剖学教室の助手に移っていた。この岡嶋も在職4年あまりで、1918年(大7)11月には慶応義塾大学部医学科教授に転出していった。なお本校で教諭が教授と改称されたのは1917年(大6)2月からであった。1918年(大7)12月には新潟医学専門学校教授の医学博士島田吉三郎が岡嶋の後任教授として赴任してきた。島田は富山人で、金沢の第4高等学校医学部を1896年(明29)に卒業した後、内科医として長い間過ごしていたが、臨床医の生活になじめず、32歳になったとき、ついに基礎医学への転向に踏み切り、1908年(明41)5月に学生時代の恩師である鈴木文太郎教授のいる京都帝国大学医科大学解剖学教室に助手として入り、1910年(明43)9月には新潟医学専門学校の教諭になっていた。島田が来た翌年の1919年(大8)の7月には本校で第27回日本解剖学総会が開催されている。

京都府立医学専門学校が京都府立医科大学に昇格したのは1921年(大10)10月であるが、これに伴って1923年(大12)3月には島田は、そのまま医科大学教授になったが、前任の赤座は学歴が問題にされて医科大学教授にはなれず、1924年(大13)9月に京都府立医学専門学校が廃止されるまで医学専門学校の教授をつとめた後、医科大学講師として留まり、1936年(昭11)5月に退職した。なお医科大学の講師には1923年(大12)3月になっている。このような訳で医科大学の発足当時には解剖学の教授は島田ひとりであった。教授が2名になったのは、1928年(昭3)4月に助教授勝義孝が教授に昇進してからである。島田の研究は人脳の形態の計測的研究で、1939年(昭14)には長年の研究をまとめた「日本人の脳髓」を人類学先史学講座(雄山閣、東京)に載せている。その前篇および中篇は同講座の第7巻(1939年2月)に、後篇は第11巻(1939年8月)に掲載されている。そのほか著書には「解剖学実習手引」(1931年、研究社、東京、非売品)と「対照解剖学名彙」(1937年、叢文社、京都)がある。「解剖学実習手引」はドイツ語で書かれたすぐれた解剖実習書で、現在は教室で日本語に直したものを用いている。島田の大きな功績は解剖標本の整備で、現在の総合標本室の解剖標本はすべて島田の手になるものである。なおこれに大きく協力したのは技師の宮下新一郎であった。島田は研究を他人にまかせられない性格であったため、研究生もあまりとらず、数人にとどまった。

63歳の教授定年内規が作られたのは1936年(昭11)2月であるが、これの最初の適用者として、島田は1939年(昭14)5月に定年退職した。その後8年間は勝義孝ひとりだけの教授の時代が続いた。勝は京都府の出身で、1919年(大8)の京都府立医学専門学校の卒業で、2人目の母校出の教授である。卒業後、学生時代の恩師の岡嶋敬治のいる慶応義塾大学部医学科解剖学教室に助手として入ったが、その翌年の1920年(大9)には京都帝国大学医学部生理学教室に助手として移り、正路倫之助教授のもとで生物物理化学の研究に従事し、1926年(大15)8月には解剖学の助教授として京都府立医科大学へもどってきて、1928年(昭3)4月には30歳の若さで教授になっている。勝の研究は生物物理化学で、生物膜の超顕微鏡的研究に主力が注がれていた。この研究で1939年(昭14)には日本学術協会賞を受けている。勝が教授になって3年後の1931年(昭6)6月には講師児玉邦男が助教授となったが、1936年(昭11)3月には退職している。児玉は予科1年のとき、予科の新しい「橘」の校章を創作している。児玉がやめて2月後の6月には講師小島不二雄が助教授になったが、すぐその翌年の1937年(昭12)4月には退職している。その後しばらく助教授のいないときが続いて1941年(昭16)2月になって講師山田博が助教授になったが、すぐその年の7月には応召してゆき、その年の12月には講師建田恭一が助教授になったが、間もなく応召していった。このような手不足の中で戦争もたけなわの1943年(昭18)8月に第50回日本解剖学会総会が本学で開催され、勝はその会頭になっている。また1944年(昭19)1月には兵庫県立医学専門学校の創設とともに武田創と岡田徳一をそれぞれ解剖学および生理学の講師として送りこんでいるが、2人は間もなく解剖学の教授に昇進している。しかし岡田は数年後にはやめている。終戦の翌年の1946年(昭21)2月には勝は学長になり、戦後の学制改革の多難な時期を乗り切って、1953年(昭28)9月に辞任するまで7年半学長をつとめている。勝が学長になった当時、山田、建田の2名の助教授はまだ外地から帰っておらず、教室は非常に手薄な状態にあった。このようなときに、三重県立医学専門学校教授をやめた直後の野田秀俊が講師として教室にもどってきた。それは、1946年(昭21)4月のことで、そのすぐ翌年の1947年(昭22)4月には教授に昇進した。このようにして8年振りでは島田のあとの空席が埋められた。野田秀俊は本学の元神経精神科学教授野田浦弼の令息で、京都府の出身で、本学を1933年(昭8)に卒業した後、半年ほどして生理学教室に入ったが、1年でやめて、京都帝国大学の生理学教室へ移り、石川日出鶴丸教授のもとで神経生理学を専攻した後、同大学の解剖学教室の方へ移り、小川陸之輔教授のもとで実験発生学の研究に従事し、1944年(昭19)4月に三重県立医学専門学校教授になったが、2年ほどで1946年(昭21)2月にはやめて、4月には本学の解剖学教室に講師としてもどってきたのであった。1947年(昭22)の初めに助教授建田は復員してきたが、4月には退職している。すぐその翌月の5月には助教授山田が復員して教室に帰ってきた。その翌年の1948年(昭23)

1月には勝義孝が生物物理化学教室を創設して生物物理化学の教授に変わったので、その後をうけて助教授山田博が教授に昇進した。山田は滋賀県の出身で、本学の1936年(昭11)の卒業である。勝の生物物理化学教室は創設されたものの、入る建物がなくて、解剖学教室の中に同居していたため、解剖学の研究室は非常に窮屈なものであった。これが解消されたのは、1951年(昭26)12月に鴨川べりに基礎医学東学舎(後の基礎1号館)が竣工してからであった。この鴨川べりの景勝の場所に建てられた4階建の建物の4階には野田解剖学教室が入り、3階には山田解剖学教室が入った。解剖学教室が制度の上で正式に2つに分かれたのは1956年(昭31)2月で、野田解剖学教室は第1解剖学教室となり、山田解剖学教室は第2解剖学教室となった。

第1解剖学教室では、1956年(昭31)4月に講師佐野豊が助教授となり、研究は大いに進められた。野田の研究は視床下部下垂体系の比較組織学で、研究も最高潮に達してきた1960年(昭35)5月に突然病にたおれ、その年の11月16日に52歳で他界した。野田秀俊の後をうけて1961年(昭36)6月に助教授佐野豊が教授に昇進した。佐野は兵庫県人で、本学の1950年(昭25)の卒業である。その後1964年(昭39)3月に講師大塚長康が助教授になったが、1970年(昭45)4月には岡山大学教授に転出している。また同じ月に講師越智淳三が助教授になったが、1972年(昭47)4月に東京都神経科学総合研究所の解剖発生学部門へ転出した。またその後をうけて4月には講師井端泰彦が助教授になった。現在、教授佐野、助教授井端のほかに



第1解剖学教室、電子顕微鏡(1972)



第2解剖学教室、硬組織試験室の試験機(1972)

講師(学内)亀谷謙と助手3名がいる。佐野の研究は初めは神経分泌で、1957年(昭32)に「神経分泌(1)形態学」(協同医書出版社、東京)の本を出版したが、近年は神経伝達機構の形態学的ならびに組織化学的解明への展開を見せている。また1965年(昭40)には「組織学研究法—理論と術式—」(南山堂、東京)の本を出版している。いま、第1解剖学教室では電子顕微鏡をはじめ組織学研究設備が完備されていて、佐野豊の強力な指導体制のもとに神経学の新しい分野で大きく発展しようとしている。一方、第2解剖学教室では、第1解剖学教室の野田秀俊が病にたおれた前年の1959年(昭34)の3月には山田博も気管支喘息で危篤に陥ったが、全く奇蹟的に助かっている。1962年(昭37)7月には講師藤田尚男が助教授になったが、1965年(昭40年)4月には広島大学教授に転出している。その後、1967年(昭42)12月に講師町野満夫が助教授になったが、1970年(昭45)12月に退職している。現在、第2解剖学教室では教授山田のほかに講師安田峯生と助手3名がいる。山田の研究は終始一貫して生物強弱学で、これは医学のユニークな分野で、器官組織の強度を研究する学問である。山田は1939年(昭14)以来4分の1世紀にわたる莫大な研究の成果をまとめて、1970年5月にアメリカの Williams & Wilkins Co. (Baltimore) から“Strength of Biological Materials”(生物強弱学)という世界で初めての本を出版している。いま、第2解剖学教室では各種の材料試験機や工作機械が揃えられていて、山田の停年を2年後に控えて、生物強弱学の完成への最後の努力が行なわれている。

講義は第1解剖が組織学、内臓学(泌尿生殖器と内分泌器の一部)、感覚器学、神経学を担当し、第2解剖が骨学、筋学、脈管学、内臓学(呼吸消化器と内分泌の一部)、発生学を担当している。実習は第1解剖が組織学実習と感覚器・脳実習を担当し、第2解剖が骨学実習と人体解剖実習を担当している。解剖実習に供せられる遺体は、戦後1959年(昭34)頃までは年間平均47体であったが、その後次第に減少しはじめて1968年(昭43)頃までは年間平均32体となり、さらに1969年(昭44)以後になると年間20体以下となり、ことにここ1~2年は激減してきて前途が危ぶまれている。なお、本学には白菊会は結成されていないが、数十名の篤志家から死後の遺体の寄贈の申し出がある。

解剖体法会(解剖体祭)が初めて行なわれたのは、京都府医学校時代の1884年(明17)7月で、京極の浄土宗誓願寺で行なわれた。第2回は1888年(明21)3月に、第3回は1889年(明22)9月に行なわれたが、その後しばらくとぎれてしまった。それが復活されたのは1903年(明36)10月で、このときから本派本願寺(西本願寺)にかわり、その後は毎年10月1日に西本願寺で秋季大法会(秋季解剖体祭)が行なわれている。本学に附属墓地ができたのは、京都府立医学専門学校になってからの1907年(明40)3月で、蹴上の大日山京都市共葬墓地の中の260坪を借り入れてつくられた。毎年5月14日にはこの墓地のふもとの浄土宗安養寺で春季追悼法要

(春季解剖体祭)が催された後、墓地で墓前祭が行なわれている。

大学になってからの教授のうち、赤座寿恵吉(医専時代の教授で大学になってからは講師であったが)は1938年(昭13)6月5日に71歳3カ月で東京で死去したが、その追悼文は勝によって解剖学雑誌(14巻5号, 昭和14年)に掲載されている。また野田は1960年(昭35)11月16日52歳4カ月で京都で死去したが、その追悼記は佐野によって解剖学雑誌(36巻2号, 昭36)に掲載された。また島田は1963年(昭38)4月22日, 86歳11カ月で東京で死去したが、その追悼記も佐野によって医学のあゆみ(45巻8号, 昭38)と解剖学雑誌(38巻4・5号, 昭38)とに掲載されている。

第1解剖学教室の同門会は加茂川会と呼ばれているが、これは野田によって、1960年(昭35)に命名されたもので、会員は80名で、このうち33名が野田の指導によって、20名が佐野の指導によって学位を得ている。なお80名の会員のうち、島田や野田も含めて4名が死亡している。また第2解剖学教室の山田の門下生の会は博友会と呼ばれているが、これは1954年(昭29)7月に門下生によって名付けられたもので、会員は85名で、このうち65名が山田の指導によって学位を得ている。なお85名の会員中、現在までに3名が死亡している。

(文責 山田 博)

## 生理学教室

療病院時代の生理学教育についてはさだかではない。しかしオランダ人 C. G. Mansvelt (1876~7年), およびドイツ人 Heinrich Botho Scheube (1877~81年) は生理学を講述したと考えられる。

甲種医学校時代に入り1882年(明15)には生理学の日本人教師として栗生光謙が選ばれ、物理学をも兼ねて講義した。この人は1891年(明24)まで在職した。そのあとへ宮入慶之助(1891~1894年)が生理学、衛生学の教師として着任した。宮入は後に福岡医科大学教授に転じ、その後に富永兼棠(1894~97年)が生理学衛生学を講じた。1901~1911年(明34~44)には永井徳寿が仙台医学校より生理学の専任教師として迎えられた。永井は東大を1890年(明23)に卒業し、1895年(明28)仙台医学校の病理学講師、1896年(明29)天谷干松(京大教授)が仙台を去ったあとをついで仙台の生理学教諭となり、1901年(明34)に本校へ赴任した。しかし永井は病气勝ちであったようである。そのため1911年(明44)に本校を去り、1912年(大1)に病歿した。

佐武安太郎は教諭永井のあとをうけて1910年(明43)9月、医学専門学校1903年(明36より)

の教諭に任じられるとともに、研究のためにドイツへ留学を命ぜられた。その間の講義は京大教授天谷干松および石川日出鶴丸が受け持った。1914年(大3)3月に教諭佐武はドイツ留学より帰朝し、翌年11月東北帝国大学教授として転出するまでの間教鞭をとった。佐武は非常に教育熱心な人物であって、彼の手になった生理学の教科書は“藤田・佐武生理学講義”として改訂を重ねられ、現在もなお広く利用されている。また本校に在任当時、“カバンの安さん”というあだ名で通っていた。これは常に実験道具を大きなカバンに入れて持ち歩き、また常に自分で動物の手術をして実験教示をしたためとのことである。佐武の本校への着任から留学、さらには仙台への転出にいたる経過は本学の80周年の際に彼が直々に書いた文章があり、他に収録されている。

佐武が去った後、本学は越智真逸教授1915～1947年(大4～昭22)を迎えた。越智は1884年(明17)愛媛県に生まれ、郷里松山の中学を出て1911年(明44)東京大学医学部を卒業した後は京都大学教授石川日出鶴丸の下で生理学を研究し、医学博士を授与せられ、石川の高弟の1人である。1915年(大4)に、京都府立医学専門学校教諭として着任し、1923年(大12)本学が大学に昇格すると共に引き続き本学教授となった。そして1947年(昭22)に至るまで30年の長きにわたって研究に、講義に精進し、生理学教室の充実と発展に尽した。

越智の初期の研究は主として生殖生理学であって、特に精虫の生活持続期間の研究は現在の畜産界に多大の貢献をなしている。また多年にわたる広範な研究の中心は内分泌生理学であって、殊に消化ホルモンについては独自の見解に到達し、その業績は高く評価されている。またそのほか、灸治や和漢薬などの研究、疲労判定法であるドナジオ反応の改良など研究は多方面にわたっている。この間、越智あるいは門下生の名において発表せられた論文は200篇以上にのぼっている。また生理学の著書も数多く、その主要なものとしては、最新生理学(南江堂)、ホルモン(南江堂)、生理学実験法の実習(金原書店)、実用解剖生理衛生(星野書店)などがある。越智は定年退職後には本学名誉教授に任ぜられ、京都学芸大学教授として教育研究を続け、保健体育の教育と研究に従事、晩年に至るまで後進の指導と研究に力を注いだ。

越智定年退職後1947年(昭22)9月本学生理学教室は兵庫県立医科大学教授吉村寿人をその主任教授に迎えることになった。

生理学教室の建物は1944年(昭19)に焼失し、一時結核病棟をその代用として用いていたが、1950年(昭25)に至って西構(現在の文化芸術会館)に木造の新しい建物を建て、1967年(昭42)8月、基礎2号館が出来るまで、第1生理学教室がこれを用いた。また第2生理学教室は1967年(昭42)まで元病理学教室(現在の基礎2号館の敷地西端にあった木造2階建ての建物)のあとを引継いで使用していた。

さてこの第1および第2生理学教室の呼称であるが、これは1952年(昭27)より学制改革に

よって新制大学となり、1955年(昭30)より大学院を併置することになったことに関係する。そのためには生理学教室は2講座とする必要が生じ、勝義孝教授の生物物理学教室を廃止し、新たに第2生理化学教室を設置しなければならなくなり、生物物理化学教室は発展的解消なる名のもとに第2生理学教室と改称し、従来の生理学教室が第1生理学教室と呼ばれることになった。



生理学教室実習室 (1911)

吉村寿人教授は1930年(昭5)京都大学を卒業、直ちに生理学教室の正路倫之助教授の門に入った。吉村の当初の研究テーマは酸塩基平衡論とその実験法で、その内でも特にガラス電極によるpH測定法の確立とガラス膜の電位差発生原理の究明であった。しかし1938年(昭13)当時の国策のため、京都大学より満洲へ出張させられることになった。そこで吉村はそれまでの仕事をまとめた訳であるが、これがその後1940年(昭15)丸善から“pHの理論と測定法”として発行され、昭和30年代まで版を重ねた、約900ページの書物である。満洲時代の吉村の仕事は、寒冷刺激時の指趾皮膚血管の開張収縮の変動(hunting reaction)、および凍傷の治療法であって、これを満洲へ来る兵隊の寒冷地への適不適の判定、および局所耐寒性の人種差の研究に用いた。この研究は戦後欧文誌に発表され、非常に大きな反響を国際学会に与えた。終戦後、帰国した吉村は、当時、食糧は配給制であり、その配給量のみでは、1,200 Calに満たず、多くの人が栄養失調症で倒れてゆくのを見て、配給食糧の不足を科学的に証明すべく、自分自身、被験者となって実験を行なった。本学へ赴任後もこの実験は続き、さらに日本人の蛋白所要量の研究へと進んだ。この分野の研究は、井上五郎(現徳大教授)、山本正道(現愛知県心身障害者コロニー)、小石秀夫(現大阪市大教授)、宇佐美駿一(現Columbia大学)、新山喜昭(現徳大助教授)、白木啓三(現徳大助教授)などによって行なわれた。またこの研究によって京都新聞社賞、第1回食糧栄養学会賞を受けている。1954年(昭29)には、フルブライト研究生としてNew York大学のHomer Smith, Harvard大学のA. K. Solomonの下に留学、当時アメリカ生理学会のtopicsとなっていたactive transportの問題を研究し、日本へ能動輸送という言葉でこれを紹介するとともに、各種器官における物理輸送の研究を進めた。特に重点的に行なわれた研究は唾液腺の分泌機構であって、この研究によって1967年度(昭42)の毎日学術奨励金を受けている。なおこの分野の研

究は井上太郎(現愛知県心身障害者コロニー), 今井雄介(現第1生理助教授), 三好正人(現第一日赤)らによって行なわれた。また腎, 体液およびpHに関する研究が藤本守(現岐阜大学助教授), 平川千里(現岐阜大学助教授), 森本武利(現第1生理)らによって行なわれた。また涙腺の分泌機構が細川計明(現本学第3内科講師)および吉川太刀夫(本学眼科)によって行なわれた。

ちょうど教室の研究が膜透過性の問題を中心に進められているこの時期に, 国際生物学事業すなわちIBP (International Biological Program) が計画された。これは世界各国に住む各種民族の耐熱性耐寒性の調査や体力調査など, ヒトの適応能と生物生産との関係を生態学的に研究するものである。このIBPは1965年(昭40)~1972年(昭47)の間行なわれたが, 吉村はヒトの適応能 (Human Adaptability) の研究に関する日本の organizer となるよう London の本部より依頼を受け, 約80名の医学関係者を organize して IBP に参加し, 現在なおこの問題に忙殺されている。一方, 1967年(昭42)3月には学長になったが, 本学もまた1969年(昭44)の初めより学園紛争に巻き込まれた。本学の紛争もエスカレートの一途をたどったが, 3月には大学閉鎖を行なって善後策を講じ, 7月には学長職を退いた。その翌年, 1970年(昭45)3月停年退職して, 現在は兵庫医科大学で教鞭をとっている。吉村の在職中に第1生理学教室より発表された論文は和文約400編, 欧文約150編であって, 論文集“機能と代謝”1~9巻および英文の“Collected Papers”2

巻にまとめられている。

吉村の停年退職後, 1970年(昭45)6月, 大阪大学より亘弘が着任した。

亘弘教授は昭和28年大阪大学医学部卒業後, 大阪大学医学部生理学教室で, 分子下生理学の研究を意図して酵素反応機構の解析を行なってきた。また電子状態と生理活性とが大きく関連していることから, ヘム鉄や非ヘム鉄蛋白質の物性について研究を行なって来た。現在では, 上皮膜物質輸送機転の解明を分子生理学の立場から試みている。

第2生理学教室の歴史は, 勝義孝によって生物物理化学教室が発足した時にさかのぼることができよう。



第1生理学教室, HITAC 10 (1972) 1948年(昭23)4月に予算上, 独立して, 新たに生物物理化学教室が設けられ, 勝がその講座を担当することになったが, 教室の建物としては解剖学教室の一部を借りていた。それが1952年(昭27)2月に独立の建物に移り, 4月からは大学



の新制移行を機にその名を生物物理化学教室と改め、新制大学の一科目として発足することになったのである。今日でこそ、アメリカの大学には大部分、生物物理学教室すなわち Department of Biophysics があり、日本でも少しずつ生物物理学教室ができてきていることを考えると、如何に勝に先見の明があったかがうかがえる。しかし大学院設置とともに教室名が第2生理学教室となったことは前述の通りであるが、生物物理化学教室の解消と同時に勝は辞職の決意をかため、第2生理学教室発足後満2年、停年をまたず10月18日60歳に達するとともに退職した。

さて勝義孝は1919年(大8)本学を卒業後、京都大学の 正路倫之助教授に師事し、1926年(大15)8月本学の解剖学教室の助教授として帰学、1928年(昭3)4月教授となった。その後1948年(昭23)に生物物理化学教室を開設、1955年(昭30)に第2生理学教室教授となり、1957年(昭32)10月に退職したことは前述の通りである。その間、1946年(昭21)2月越智学長のあとをうけて1953年(昭28)9月まで学長職にあった。この時期は終戦直後の困難な時期に当り、過激な労働運動、学生の教授会乱入事件と、その訴訟問題などに対処し、その間基礎1号館の建設と記念講堂の建設、さらには創立80周年の行事などを行なった。

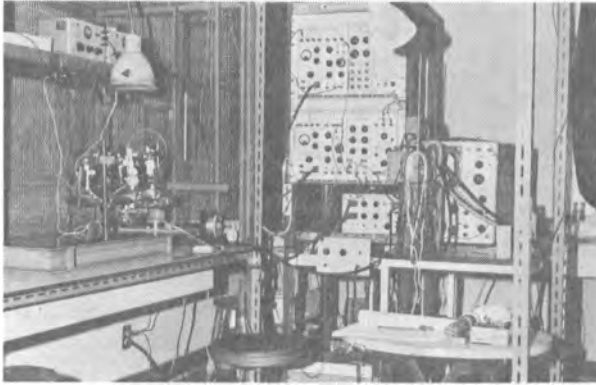
勝は長年にわたり、膜電位、界面現象、体液の物理化学に関する広範な研究を精力的に行ない、その業績は“生物物理化学論文集”Vol. 1~4 に収録されている。

また助教授舟木広は酵素および触媒の反応速度論および赤血球の膜透過性に関する研究で多数の教室員を指導し、その研究は“生理科学論文集、副題：形と機能と構造と”に収録されていて、その論文数は317編に及んでいる。辞職後の現在は、本学客員講師、他大学教授ならびに科研薬研究所長として、学生の教育ならびに研究に活躍している。

教授岩瀬善彦は1941年(昭16)北海道大学医学部を卒業し、生理学教室を経て応用電気研究所で電気生理学を専攻し、1952年(昭27)医学生理学部門の教授となった。

1958年(昭33)、岩瀬は北海道大学から本学に着任以来、第2生理学教室の設備の改善に重点を置き、あわせて30数名に及ぶ教室員の指導と新人の育成につとめた。

その間、乏しい研究設備のため、当面の研究目標を脳の電気生理学的研究に中心を置き、脳波および微小電極による誘発電位の分析を大脳および嗅球で試みた。すなわち大脳皮質の直接電気刺激による反応(デンドライト電位)の分析と応用に端を発し、各種の誘発電位および漸増電位が微小電極により、ユニットレベルで解析された。他方嗅覚刺激による嗅球の誘起脳波、単一ニューロンによる分析を行なって電気生理学的知見のほかに、感覚生理学の分野にも研究が及んでいる。1961年(昭36)、岩瀬は Washington 大学 (St. Louis) の客員教授として1年余り、大学院学生の研究指導に当たった。その間ミシシッピ川に産するカメを利用して嗅球の誘発電位について研究を行ってきた。1964年(昭39)度の機関研究として、



第2生理学教室研究室(1972)

“感觉情報の受容と統合”なる課題で医学用電子計算機 CAT 400 B が第2生理学教室に設備され、脳波および誘発反応に関する基礎的および臨床的研究が広く行なわれた。例えば、他覚的聴力検査の基礎と応用の試み、脳波の光駆動の機序、嗅覚の中樞機序、視覚野と上丘の連関機構などである。現在

CAT は中央研究室の電気生理部門に移管され、耳鼻科、内科、精神神経科学教室などの研究者にも利用され、すぐれた成果があげられている。

その後も教室の研究設備の充実が計られ、オシロスコープ、刺激装置、脳定位固定装置、脳波計、膜電流解析機器、各種記録装置、その他のエレクトロニクス機器が増備され、現在各種の電気生理学的研究が5組平行して行なわれるようになってきている。その間、研究は中枢神経系の面では制吐剤の中樞作用機序、嘔吐の中樞機序に発展する一方、興奮現象一般にも拡張され、藻の膜興奮の解析やザリガニの神経・筋伝達機構の研究にもおよび、これまでに発表された論文は70編余りに達した。

現在、専任教員としては、助教授内田孝、講師北里広、講師村山(学内)、助手藤井(留学中)が在籍し、その研究テーマは脳の誘発電位、嘔吐反射の神経機構、視床と大脳皮質の機能的相互関係、遊離脳切片の代謝と電気的活動、細胞膜透過性変化と膜構造との関係、化学的修飾による興奮性膜の機能と構造の関係などと広範囲にわたっている。

(文責 岩瀬善彦, 亘 弘, 舟木 広)

資料

1. 京府立医科大学生理学教室史 日本生理学雑誌 29 : 605~614, 1967
2. 吉村寿人教授定年退職記念業績目録 第一生理学教室編, 1970
3. 吉村寿人: 私の生理学研究遍歴の記録と将来への提言. 生体の科学 23 : 43~50, 1972
4. 勝義孝: 滋賀県医師会報 52.

## 生化学教室

1946年(昭和21年)までは医化学教室

本学八十年史によると生化学教室の前身医化学教室の設立は、1906年(明39)である。本学

が1903年(明36)医学専門学校と改称され、基礎教室が整備されたその一環として、現在の基礎1号館の玄関前附近に新築されたのであって、これは東京大学に医化学教室が建築された、1901年(明34)から数年をへたのみであった。しかし教室は1915年(大4)吉川順治(京大助教授)が医化学担当教諭として着任するまでは薬物学担当の教諭藤谷功彦(本学明33卒)がこれを管理し他大学からの講師が講義にあたった。吉川も1919年(大8)胃腸科教室を設立し、その専任教授となったため医化学は再び空白の状態となった。

1921年(大10)本学が大学に昇格後、1923年(大12)12月、後藤基幸(京大卒、東北大助教授、当時ドイツ留学中)が医化学担当教授として発令され、翌年秋着任した。

後藤教授着任の当時は教室員は中尾幸夫(大5卒)、久保徳弥(大10卒)の両助手のみであり、教室は木造2階1棟、階上3室(教授室、図書室、助手室)、階下4室(実習室、研究室、器械室、小使室)であった。のちに教室の北側に接続して学生実習室が増設された。その後教室員は次第にふえ教育、研究が行なわれ学生の講義は本科1回生全学期を通じ、実習は2回生の1学期で、このカリキュラムは能勢教授の初期まで続いた。その間“亀甲会”なる教室同門会が発会。その名簿には現学長中村恒男(昭10卒)、横山武夫(大8卒)、山田義雄(大9卒)らの名がみられる。当時、大阪歯医専出身の柳生嘉雄(現城西歯科大学長)、多和敏一(現大歯大生化学教授)らの名もみえ、教室には講師として赤野六郎(昭5卒)、金田泰男(昭6卒)、小川哲太郎(昭7卒)が在職した。後藤教授退職1946年(昭21)まで学位を授与されたものは河村長治博士ほか26名にのぼる。

後藤は学友会理事長(初代)、文部省学術研究会議員1939年(昭14から)を歴任し、1944年(昭19)附属女子専門部の設立と同時に、その教授を兼任したが、その頃教室員は戦争のためほとんどが召集され、教室は同年4月、他の基礎4教室とともに学生実習室を残して焼失した。後藤はその後、終戦直後の大学紛争により退職し、のち岐阜県立医大学長をつとめた。1961年(昭36)8月、東京都三鷹市の自宅で死去した。

1946年(昭21)4月藤田秋治(北研部長)が兼任の講師として着任、同年12月教授となり、この時教室は生化学教室と改められた。当時、教室員は小塚駿一、能勢善嗣(昭15卒)の両助手のみであった。火災と敗戦により壊滅に近かった教室も焼け残った実習室に接続して階上3室、階下3室が増設され教室員も次第に増えた。その間“藤光会”なる教室同門会が発足し、例年藤田の誕生日(3月3日)に会を持った。当時の教室員としては安田泰三(昭16卒)、岡本武士郎(昭19卒)、藤田大祐(昭20卒)、田代敏夫(昭20卒)、田宮佐各らがいた。また助教授は能勢善嗣、講師は長谷川栄一(昭24卒)でいずれも Rockefeller Fellow としてそれぞれ Harvard 大学 (MGH) 1956~57年(昭31~32)、Rockefeller 研究所 1959~61年(昭34~36)に留学した。藤田教授定年退職まで学位を授与されたものは上西薫(昭21卒)ほか20名である。

藤田は在職13年間北研生化学部長を兼ね毎月の上半を当時13号病舎の1隅を教授室として、ここに起居し、教育、研究の指導にあたった。その間日本学術会議員 1949~1951年(昭24~26)、日本生化学会会長1957年(昭32)をつとめたが、1952年(昭27)わが国の代表として第2回国際生化学会 (Paris) に出席、1957年(昭和32年)7月には第30回日本生化学会総会を本学において開催した。そのほか日本ビタミン学会の理事を永年にわたってつとめ、ことに学会の発行になる *The Journal of Vitaminology* (*J. Vitaminol.*) の Chief editor (昭29~45) であった。なお本学退職後、名誉教授となり、女子栄養大学教授(生化学)をつとめ、本年77歳を迎えて健在である。

1958年(昭33)10月助教授能勢善嗣が教授に昇進した。教室は Rockefeller 財団から2カ年にわたり研究費補助をうけ、また文部省機関研究の助成金によって近代研究設備を整え、超遠心器室、低温室の分室をもった。その間、新制大学が1952年(昭27)から発足し、大学院医学研究科が設置され、1959年(昭34)岩島昭夫(昭33卒)が第1回大学院学生として入室した。爾来、現在までに主科目分担を含めて入室した大学院学生は21名に及び研究は研究生との



生化学教室研究室 (1972)

2本だてとなつた。この間、学生のカリキュラムは専門課程の1学年の間に講義、実習を終了することになった。

1967年(昭42)7月、基礎医学機能系6教室を入れる2号館(工費2億4千万円、4階)が完成し生化学は古い木造建築を離れてこの2階に移転した。同時にこの建物に中央研究室が設置され、教室員

は低温室を含む生化学部門を管理することになった。その年の秋(10月10日)教室の新築を祝い、亀甲会、藤光会ならびに現教室同門生約45名が京都ホテルに集まり、藤田名誉教授を迎え医化学生生化学教室同門会を開催した。また、翌43年秋には能勢教授開講10周年の祝賀をした。1969年(昭44)には大学は全国的な大学紛争の嵐にまきこまれ、大学閉鎖を行ない、教育は中断したが研究は続けられた。

能勢は現在までに附属図書館長 1960~1963年(昭35~38)、研究科主任 1968~1969年(昭43~44)を兼ね、1960年(昭35)には日本生化学会近畿支部長をつとめた。同年11月には F. Lipmann 教授が来学し、講演会が行なわれた。1964年(昭39)には第6回国際生化学会 (New York) に出席し、現在 *J. Vitaminol.* の Chief editor、ビタミンの編集委員である。長谷川

栄一助教授は、1966年(昭41)薬理学教室に配置換えとなり、現在は本学を辞し、緑十字研究所部長である。上田潔現助教授(昭25卒)は、1960年(昭35)講師となりTexas 大学, Brandeis 大学に留学, 1967年(昭42)助教授となった。川崎尚講師(昭30卒)は Brandeis 大学に留学, 同42年講師となり1970年(昭45)4月広島大医学部教授(生化学)として赴任した。岩島昭夫現講師は Chicago 大学に留学, 中村美代子は Brandeis 大学に, 松浦尚雄助手は Southern California 大学にそれぞれ留学した。1972年(昭47)現在の教職員は能勢, 上田, 岩島, 松浦のほか助手山田良平, 松浦敦子, 大学院生西野輔翼(昭45卒), 研究生辻孝彦, 谷口秀紀, 江崎君子, 倉田裕充, 計11名である。なおこの間学位を授与されたものは森克己ほか31名にのぼる。

医化学教室が本学に創設されてのち、1925年(大14)日本生化学会が発足し、同年第1回総会が東京で開かれた。学会出席者は130名であったが、奇しくもその学会交見演説の1つとして、藤田秋治(愛知医大): 膜 potential と ion 透過性, があげられている。第2回総会は翌1926年京都で開かれたが、開催委員は後藤基幸教授, 小松茂教授(京大理)であった。当時は未だ生化学研究の黎明期であったが、その後の研究概史を各教授のプロジェクトにより3期にわけることができる。

後藤基幸教授のとき; 当時わが国の生化学の研究は、外国雑誌のほか J. Biochem. (The Journal of Biochemistry は、1922年-大11-創刊され、Vol. 36-1944-で戦争により中断、それと同時に雑誌生化学が生まれ、J. Biochem. は1950年から再刊された。後藤、藤田はいずれもこの初期の編集委員であった) ならびに各大学雑誌に掲載された。医化学教室のテーマは主として糖質および脂質の中間代謝ならびに生物のりん酸代謝の研究であった。生物の体液、臓器の代謝中間物質(乳酸, アセトン, アセト酢酸など)の消長をしらべ、また種々の生物のりん酸化合物およびりん酸酵素(phosphatase)活性がしらべられた。これらの成果は主として京府医大誌(第1~41巻, 昭2~25), 一部 J. Biochem. に掲載されている。

藤田秋治教授のとき; 1946年(昭21)藤田は当時の勝義孝学長の懇請をうけて着任した。時代の趨勢に従って教室を生化学教室と改称した。これは生化学とは“ひろく生物の生命現象を化学する”ということにある。藤田はすでに北研で輝かしい幾多の業績をあげ、グルタチオン, チトクロム C, ビタミンの研究では第1人者であった。1942年(昭17)淡水魚, 貝類にアノイリナーゼ(ビタミンB<sub>1</sub>分解酵素)を発見し(生化学, 18: 63, 1943), この戦時中, 中断されていた研究が新しい生化学教室のテーマとなった。教職員の多くは戦後の困難を克服しながらこの研究に力を注ぎ、その成果は生化学, ビタミンに報告され第34報にまでおよんだ。またその要訳は J. Biol. Chem., 196 (1952), Advances in Enzymology, 15 (1954) に発表された。研究はアノイリナーゼにとどまらず多くのビタミンの代謝, B<sub>1</sub> 分解耐熱因子

の研究も行なわれた。その頃わが国のビタミンの研究は盛んで戦後設立されたビタミンB研究委員会を背景に1949年(昭24)、日本ビタミン学会が生まれた。それと前後して雑誌ビタミンが創刊され、続いて1954年(昭29)、英文誌の J. Vitaminol. が発刊された。現在それぞれ、第45巻, Vol. 18 におよんでいる。

藤田の退職までの自著および指導論文は北研時代をも含めて496編、著書は“検圧法とその応用”(岩波書店)、“ビタミン定量法”(南江堂)ほか3がある。学会でうけた賞はビタミン関係ではビタミンB<sub>2</sub>長尾賞(昭23)ほか3がある。1959年(昭34)アノイリナーゼの研究を基礎とした“ビタミンB<sub>1</sub>の研究”に日本学士院賞が贈られた。

能勢善嗣教授のとき；ビタミンの研究の継続および発展の時期である。B<sub>1</sub>分解酵素の研究にひきつづき、能勢は酵母からB<sub>1</sub>の生合成酵素の抽出に成功した(Biochem. Biophys. Acta, 34:277, 1959)。そして教室員はこの機構の解明に力をそそぎ、生合成中間体としてりん酸エステルを経る数段階の酵素反応によることを明らかにした。研究は酵母から大腸菌に移り、プロジェクトの流れも生合成調節ならびに補酵素合成に進み、これらの業績は生化学, J. Biochem., J. Vitaminol. に発表された。同時にB<sub>1</sub>誘導体B<sub>2</sub>, B<sub>6</sub>, リポ酸などの代謝の研究が行なわれた。川崎、岩島らの留学からの帰国とともに研究は微生物のB<sub>1</sub>代謝に関する変異株の分離またその膜透過の研究に発展し、その業績は多くの国際雑誌にも報告された。なおこの間、長谷川はムコ多糖体の研究を、上田は細胞核の電子伝達系、核膜の構造と機能に関する研究をすすめた。

能勢の自著および指導論文は177編、著書は分担執筆を含めて新生化学(医学書院)など6がある。学会賞としてビタミン学会賞(昭36)をうけ、1967年(昭42)B<sub>1</sub>の生合成の研究で京都新聞文化賞をうけた。なお講師岩島はビタミン学会奨励賞(昭44)をうけた。

教室の歴史に関する資料：基礎教室の火災1944年(昭19)によりそれまでの医化学教室の記録、業績は灰燼に帰し、その頃の歴史は本学八十年史、京府医大雑誌(昭2~25)によるしかない。亀甲会誌の1部、医化学生化学教室同門会誌(昭43)も参考にした。そのほか藤田秋治教授論文題目集(生化学教室編、昭33)、ビタミン研究50年(ビタミン記念事業会編、昭36)、生体の科学、21:384(1970)および島藺順雄(東大教授)から贈られた遺暦の記録(昭42)が教室史の記述に役立った。

(文責 能勢善嗣)

## 病理学教室

病理学教室の歴史を回顧するとき、大きく3つの時代に分けうる。その最初の時代は病理学教室が設立されるに至った背景、言い換えれば教室誕生の必然性の流れとも言いうる時期であろう。次の時代の特徴としては設立された教室が発展し、教室としての形態と機能をそなえるに至る間であり、第3期は創り上げられた教室を教育・研究の面で高めて行く時期である。具体的に、本学病理学教室では、Junker に始まり病理学教室設立までの約30年間、角田隆教諭による病理学教室設立と角田隆・梅原信正両教諭による教室の充実への40年の歩み、次いで荒木正哉・田中秋三両教授およびそれぞれの後継者三宅清雄・藤田哲也両教授による時代の3時期に区分出来る。しかし第2期と第3期との間に発生した太平洋戦争は、人材の面で、また物質の面で大きな後退をよぎなくし、それをとりもどすための努力は第3期初期の最も大きな課題でもあった。このような観点から本学病理学教室の歴史をふりかえってみよう。

教室創立以前の背景として：本学に病理学教室が創立されたのは、京都府医学校時代の1901年(明34)である。これは本学の前々身医学校が現在の大学の敷地に設立されてから21年後、粟田口の仮療病院創立から数えて29年後のことであった。しかしそれ以前に病理解剖や病理の講義は行なわれており、それらは粟田口仮療病院発足の時期から少し遅れて始められた。すなわち仮療病院発足の1872年(明5)11月1日にはすでに療病院入学生徒条則にもとづき、生徒の募集が行なわれ課業表が決められており、病理学の講義も行なわれた。その授業は必ずしも系統立ったものではなく、入院患者について「病理養生法を医生に教授する」程度であった。この病理学の授業は仮療病院開設の頃から F.E. Junker von Langegg によって行なわれたが、1873年(明6)11月20日文部省へ提出された報告の教科目課には、週2回の病理学の講義が行なわれたことが記載されている。1876年(明9)3月 Junker の解雇に次いで、オランダ医師 C.G. Mansvelt を招聘した。Mansvelt は種々の改革を行ない、病理学の講義も整備されてきた。しかし彼も府当局との折合は必ずしもよくはなく、備期を終える前に大阪府立病院へ移り、後任として Heinrich Botho Scheube が1877年(明10)8月16日着任した。Scheube は Mansvelt の行なった病理学講義をさらに整備し、病理解剖や研究活動も活発に行なった。病理学の講義は Wagner の教科書を使用し、医学校4年間の課程を8期

に分け、その第3期に病理解剖学を、第4期に病理通論、第5期および第6期に病理各論の講義が行なわれた。また研究活動では特に脚気に関するものが多く、1884年 Virchow Arch. 95: 146. および1895年 Die Beriberi Krankheit. Fischer, Jena として報告されている。

この間、栗田口仮療病院から広小路現敷地への移転が終わり、本院内に医学予科および医学校が設置された(1879年・明12)。Scheube は当初の契約の3カ年が終了した1880年(明13)8月以降も、更に契約を継続して1881年(明14)12月まで在任していた。その後1886年(明19)10月星野元彦が病理解剖学を担当講義するまで病理学の専任教諭は設けられていない。星野は内科に籍をおき診断学の講義をも行ない、同時に病理学をも担当したわけである。この状態は1895年(明28)7月の同教諭退職まで続いた。以後専任教諭のないまま、病理学講義は内科教諭によって行なわれ、1898年(明31)5月角田隆が病理学を担当し、病理学教室が独立するに至るまで続いた。

1898年(明31)5月角田は助教諭として病理学講座を担当し、内科より独立して病理学教室を設立した。彼は1896年(明29)医学校を卒業後内科に籍をおいていたが、その頃ドイツ留学を終えて帰朝した笠原光興1896年(明29)4月によってもたらされた病理学や細菌学のクルズスにより病理学への興味をかきたてられた。そこで独り資材をそろえて血清反応を試みたり、それらに関係した書物を読むことの方が多かった。笠原はこの変わりものに目をつけ病理学を専攻するようにすすめ、派遣委託生として東京大学病理学教室へ派遣した。当時の東京大学は三浦守治教授、山極勝三郎助教授、金森助手を中心に各地から派遣された委託生や選科生などが数名いたとのことである。約2年間の内地留学を終え帰学した角田は助教諭となり病理学を担当し、病理学教室は内科学教室から分離独立することになった。しかし独立したといっても、教室内の設備は殆んどなく、生理教室内の2部屋ほどの借り住居であった。書籍や標本などもなく、栗田口寮病院時代より保管されているべきものは何一つ残されていなかった。書籍購入を申し出ても“本などいらぬので”として受け入れられず、自身の俸給の中から費用をさかねばならなかった。また病理標本も解剖の材料から一つ一つ集めねばならなかった。1901年(明34)4月、助教諭角田は教諭に任ぜられた。さらに1906年(明39)3月には病理学教室が新築され、またもとの生理学教室を改造して病理解剖室および材料室とし、ようやく将来への準備ができた〔この解剖室は1951年(昭26)の基礎教室が竣工するまで病理解剖に使用されることになる〕。

1908年(明41)7月角田は病理学研究のためドイツへ2年間留学を命ぜられ、1910年(明43)10月帰朝までベルリン大学病理学教室で病理学の研究に従事した。帰朝後間もなく主論文「日本住血吸虫卵子に因する結核様結節形成に就て」、および他7編の論文を提出して医学博士の学位を得た〔1911年(明44)12月9日〕。



1913年(大2)2月, 講師梅原信正(明36卒)が教諭に任ぜられ, 教室も次第に充実したスタッフをそろえるに至った。1917年(大6)公立学校職員制により両教諭は以後教授となり, 続いて1921年(大10)大学令による京都府立医科大学設立が認可され, 1923年(大12)3月両教授は医専教授から本学教授となった。この間教授梅原は1922年(大11)2月より翌年2月までの1年間, 欧米各国視察のため出張している。



病理学教室(1909)

大学昇格とともに教室の内容も充実し, 1926年(大15)5月には本田郁也が助教授となり, 教室研究生にも, 田口憲一, 宇野秀, 木村嘉一, 田村真男, 中本完二, 福山良三, 市川賢佑, 俣野一郎, 岡室徳之助, 細田忠四郎, 倉尚貞, 宇野鬼一郎, 中野操, 笠原功, 有本廉, 浜田稲積, 野村恒一, 三井修策, 水野忠, 土井彰一, 中野武, 鈴木真一, 山藤重, 佐藤亨, 三宅川廉平, 阿原道雄, 大井久夫, 千代延敬典, が相前後して入室, 研究に励んでいた。その研究活動も角田を中心とした末梢神経の病理, 梅原の実験腫瘍, 本田の胃潰瘍の研究と次ぎ次ぎと発表されている。

その間1926年(大15)8月, 梅原は, それまで各教室に分散していた大学図書を管理する中央図書館が出来るとともに, 初代の中央図書館長になった。1927年(昭2)5月より角田は約半年間欧米視察に出張した。1932年(昭7)1月には当時の浅山忠愛学長が外国出張の間, 角田は学長代理として学長の事務を取扱った。

1934年(昭9)3月, 梅原は欧米各国へ出張視察を命ぜられた。これに先立ち教室には, 速水保彦, 白井正一, 益本圭弼, 荒木正哉, 田中秋三, 小田豊, 長者尚徳, 大内一晃, 山本郵郎, 高橋章一, 守田舎, 土屋良泰, 真崎義男, 塚田一雄, 陶山吉喬, 竹山清, 中村文雄, 内田健三郎が入室している。

教室はこのように発展を続けたが, ここに不幸な出来事に遭遇した。それは本田の病死である。本田はそれより前, 慢性腎炎に罹患していたが, 1936年(昭11)3月22日病いよいよ篤く46歳の若さでこの世を去った。

同年6月講師荒木正哉(昭4卒)が助教授に任ぜられ, 同7月角田が学長兼教授に任ぜられた。その翌年1937年(昭12)5月には講師田中秋三が助教授に任ぜられた。これと前後して,

中野融，高岡謙次，田中亀三郎，武部元孝，関島喜好，門田貫次郎，深見秀藏，船越正夫，中村四十吉，代田四郎，三宅清雄，植田安兵衛，坪井澄也，服部清三，森尚文などの教員，研究生が入室している。

1939年(昭14)，角田学長は定年制に従い学長職および教授職より退官した。古く1898年(明31)病理学教室を設立してから41年の間，営々として病理学教室，大学の充実，発展をはかり，数多くの人材を養成して世に送り出した功績は高く評価されるものである。

1941年(昭16)11月，助教授荒木正哉が教授に任ぜられた。その翌々年1943年(昭18)4月，教授梅原が定年退職した。その豪気な性格は1901・2年(明34・35)の医学学校存続のあやぶまれた時期に，また医学専門学校から大学への昇格運動に多くの校友から推され，その推進の中心的役割を果たした。また教室にあっては角田を助けて病理学教室の発展に尽した。1943年(昭18)11月には前角田，梅原両教授が名誉教授に推薦されたのも当然のことであろう。

この頃太平洋戦争も熾烈を極め，全国的に医師の不足が目立って来た。かねてより本学に附属女子専門部設立の準備が進められていたが，1944年(昭19)4月より開校となり，助教授田中秋三は同講師を兼任することになり，同年7月より同専門部教授兼生徒主事に任ぜられた。翌1945年(昭20)2月，講師中村四十吉が助教授に昇進した。太平洋戦争は遂に本土爆撃が日夜続くようになり，敗戦の徴はますます明らかとなって来た。学童疎開，空襲による火災防止のため家屋取壊しが相次いで行なわれたが，同年3月の大阪空襲後病理学教室の疎開建物の取り壊しが行なわれた。教室の一部は現在の図書閲覧室へ，一部は京極国民学校へと分散し，多数の標本は京極校雨天体操場へと移転した。次ぎ次ぎと取り壊されて行く教室を図書閲覧室の仮住居から眺め断腸のおもいを禁じ得なかった。当時学生の講義は大学で，実習は京極校で行なうという不便さであった。やがて8月15日の終戦を迎えた。その年の終わり京極校を引き上げ，標本室は現在の地下学生食堂へ，研究室は職員食堂のあった病院調理室の建物の3階へ移った。1947年(昭22)夏，旧病理教室跡に木造の病理教室を新築し，図書館閲覧室，職員食堂の3階に分散していた研究室も1カ所に集められた。その間同年12月17日助教授田中秋三が教授に任ぜられた。

1951年(昭26)12月新基礎教室が竣工し，病理関係の標本室，研究室は新教室へ移転した。しかし度重なる移転によって生じた種々の貴重な資材，標本の破損紛失はおびただしい数にのぼり，将来これらの補充を要することになった。新教室への移転，スタッフの充実により教室への入室者も次第に増えて来た。

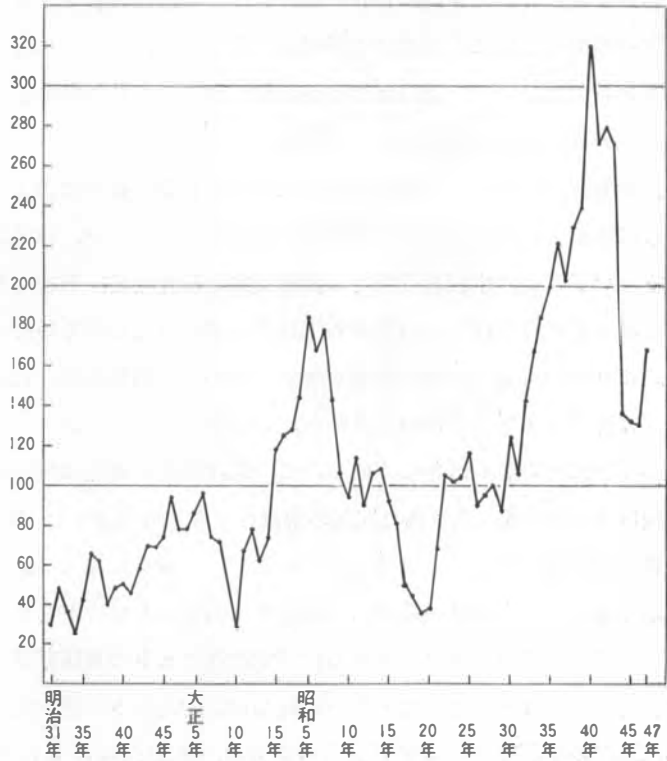
この頃教室で行なわれていた研究は教授荒木のもとでは種々のビタミンの組織化学的研究，および末梢神経の研究が行なわれ，教授田中のもとでは主として実験腫瘍の研究が行なわれていた。

このようにして教室内の研究も活発となり、荒木の数次にわたるビタミン学会賞のほか、1955年(昭30)には“末梢神経の形態学的研究”と題して病理学会の宿題報告がなされた。同年荒木は欧米視察を命ぜられ約6カ月間欧米視察を行なった。一方田中も1962年(昭37)欧米視察におもむいた。この頃教室員の海外研修を行なうものも多く、米沢猛、島田信男、竹岡成、藤田哲也などあいついで渡米した。1965年(昭40)3月31日荒木は停年制により退官し同年6月21日講師三宅清雄が教授に任ぜられた。これに2年遅れて1967年(昭42)3月1日田中も停年退職し、同年6月16日講師藤田哲也がその後任となった。

病理学にとって病屍の解剖検索の重要なことはいうまでもない。病理学は屍体の剖検から始まるといってもよいであろう。本学での病理解剖をふりかえてみるとその始まりはかなりふるい。人体解剖については1873年(明6)2月1日に、すでに新築されていた栗田口解剖所で最初の解剖が行なわれた。この解剖はいわゆる系統解剖に属するもので、無籍の刑屍について行なったものである。この解剖が行なわれた後数カ月内に入院患者で死亡したものの病理解剖の必要性から、その許可願が京都府に出された。この願書はさらに京都府から政府に提出され1873年(明6)4月20日、同年6月2日政府より許可されている。そして病理解剖用の仮解剖所を療病院内に設置したのは同年10月であった。当時のこととて篤志解剖も少なく、この仮解剖所での

最初の病理解剖は翌1874年(明7)1月8日、脳脊髄膜炎の女屍について行なわれた。これは当時の外国人医師によって行なわれたが、以後の年次別解剖数を見ると、次のごとくなっている。

年次	解剖体数
1873年	2
1874年	3
1875年	3
1876年	7
1877年	5
1878年	8
1879年	14
1880年	14
1881年	6



1881年(明14) Scheube の解雇以後病理学教室創立の1898年(明31)までの解剖体数の詳細については明らかでない。病理学教室設置後の解剖は1898年(明31)5月16日角田執刀によりその第1号が行なわれた。以後の解剖体数を年次別に図示する。

図に見られるように多少の増減はあるにしても解剖体数は順調に増加している。第1次および第2次世界大戦の時期に一致して解剖体数が減少していることは、その時の世相を反映するものであろう。また剖検により明らかになった疾患について見ると、それぞれの時代の医学の問題となっている疾患が多く、時の流れと共に疾患も変わって行くことを示している。たとえば1950年(昭25)より以前には肺癌は極めてまれな疾患であったが、それ以降では日常しばしば見られる疾患になっている。同様のことは白血病についてもいえる。このような病理解剖によって臨床的に疑問であった種々の問題点が解明されて行くわけであるが、将来ともこの病理解剖は病理学を中心となるべき性質のものである。

病理学教室で行なわれて来た医学の研究は、極めて多方面にわたっている。病理学教室創立当時の医学では栄養障害ことに脚気とか寄生虫による疾患が大きな研究対象になっていた。これは我が国の明治時代中期の病理学者に共通していいうることであるが、当時これらの疾患が多かったことを反映しているのであろう。その間にあって1920年(大9)、教諭角田は第9回病理学会で“実験的動物胆石症に就て”の宿題報告を行なっている。昭和に入り教室研究生の増加とともに末梢神経の研究が活発となった。とくに研究はその終末の研究が多くビタミンB欠乏、脚気の際の形態学的変化について内外の学術雑誌に報告している。この末梢神経の研究はさらに発展し、死後変化、炎症時の神経変性、中毒、腫瘍と神経との関係などの総論的研究のほか、各種臓器組織における各論的研究におよんでいる。神経組織の研究はさらに中枢神経系におよび、中枢神経系内グリオゲン、神経原線維、グリア、ゴルジ装置、ミトコンドリア、中枢神経系での組織反応の研究など、現在でも神経病理学での1つの中心的主題でもあるこれらの研究が40年前に活発に行なわれていたことは驚異と言わざるを得ない。これらの研究は研究生全員が多少に拘わらず関係していた。当時研究生の消費した薬品は1カ月で1カ年の予算を上まわり、会計をはずかっていた教授梅原はその支払いに頭を悩ましていたとの話が伝わっている。この神経組織の研究は角田教授退官後も荒木教授によって受けつがれ、取り残された問題の解決にとり組むとともに、新しく導入された方法(たとえば電子顕微鏡による微細構造とか、生きている神経組織での研究)を用いて発展させられた。荒木停年退職後も神経系統の病理は病理学教室の1つの主要な研究対象となっている。神経組織を組織培養の立場から研究した三宅は遂にヒトの神経芽細胞腫由来の株を樹立することに成功し、これを利用した研究が発展した。またヒトの髄上皮腫の1剖検例の検索に端を発した藤田の中枢神経系の組織発生の研究は、細胞発生のこれまでの概念を根本から改める

matrix cell theory の発表となり、現在では学会における定説となるにいたった。また助教授米沢が組織培養におけるミエリン形成の研究を発展させ、国際神経病理学会の常任副会長として内外の神経病理学会の主要な企画に参加していることなども上述のごとき教室の伝統によるものであろう。

一方、教授梅原に始まる実験腫瘍の研究は1932年(昭7)の人工肉腫の研究発表となり、その後、教授田中に受け継がれた。田中は環境因子の一つである局所栄養と発癌あるいは抗癌との関係のテーマに取り組み、過剰栄養が上皮組織の増生と、ときには腫瘍と見られる病的生長を発現させることを実験的に示し、過剰栄養と腫瘍発生との関連を主張したが、この説は当時の学会の趨勢に合わず無視されてしまったことは残念であった。しかし田中を継いだ藤田の腫瘍研究はオートラジオグラフィによる正常および癌細胞の細胞増殖の分析、大型コンピューター使用による細胞回転のさらに精細な分析、癌の発生と進展の研究などの方向に進み、腫瘍細胞の増殖と腫瘍の進展との関係が明確にされた。

このことは当然腫瘍のミクロ的营养・支持組織である間質の問題が局所栄養の面からとりあげられる趨勢をうながした。

以上本学の病理学教室の歴史を回顧し、その主要な動きを書きつづけたが、現在の研究のあらゆる流れが教室の長い伝統を不思議なくらい受けつぎ、その特色を反映していることに改めて驚き、先人の偉業に敬虔な感動をおぼえるものである。我々はその過去を見つめ将来の発展のためにそれを生かさねばならない。

(文責 米沢 猛・竹岡 成)

## 医動物学教室

医動物学という名称は耳なれない向きもあろうが、医学に供される実験動物などを研究する学問ではなく、内部寄生虫、外部寄生虫はもとより、疾病と関係あるすべての動物を研究対象とする極めて領域の広い学問であって、従来は寄生虫学と呼ばれてきたものである。この名称の講座が設置されたのはわが国では本学が最初である。本学に医動物学教室が創設されたのは1948年(昭23)のことであるが、それ以前にも本学において多くの立派な寄生虫学の研究が行なわれている。医動物学教室史を記述するに先立って、これら先人の業績の2、3に触れてみたい。

1877年(明10)本学に招聘されたH. B. Scheube は当時、東京帝国大学に赴任した E. Baelz



医動物学教室発祥の建物 (1948年)

とならび、わが国で創始的な寄生虫学の発見をつぎつぎと行なった。まず第1は Manson 孤虫 (*Sparganum mansoni*) の発見である。彼は1881年(明14) 28歳の1男子囚人の尿道より排出した長さ18.5cmの虫体を Leuckart に送り、Leuckart はこれを *Bothriocephalus liguloides* と命名して1884年に報告した。しかし惜しいことに1882年 Manson が中国廈門で1中国人の皮下からとり出した12個の虫体を Cobbold に送り、彼はこれを *Ligula mansoni* と命名して1882年に発表したため、Scheube が1年早く発見しながら、現在 Manson 孤虫の発見は Manson によるということになってしまった。つぎはズビニ鉤虫 (*Ancylostoma duodenale*) の発見であるが、従来この虫

体はわが国では Baelz が1888年(明16)にはじめて発見したということになっていた。ところが本学八十年史を編纂していた本学胃腸科講師横田稷は療病院雑誌中に新事実を発見し、従来の説を訂正した。すなわち本虫のわが国における発見は Scheube である。そしてそれは1878年(明11) 3月24日に行なわれた解屍によるとした。その他 Scheube は、外国人の患者ではあるがわが国初の旋毛虫症例を報告したり、糸状虫のミクロフィラリアの定期出現性やマラリアに関するユニークな研究を行なった。

次に日本住血吸虫発見に関する吉田龍蔵の功績がある。彼は1900年(明33)、本学(医学校)を卒業し、広島県深安郡中津原村に開業したが、この付近には有名な日本住血吸虫病(片山病)の流行地があり、日々多数の同病患者の診療にあたり、この病因解明のためにはどうしても解屍が必要と考え、真木等とともに1903年(明36)解屍を行ない、さらに翌年には京都医科大学(後の京都大学医学部)の藤浪鑑を呼んで解屍を行ない、世界ではじめて人体から日本住血吸虫の成虫を発見した。このように吉田龍蔵は片山病病原体の解明に献身的な協力をするとともに、1907年(明40)には地方病研究会を組織して本病の予防撲滅事業の基礎をつくった。

つぎに本学病理学教室の創設者である角田隆も寄生虫の研究に力をそそいだ。彼は1906年(明39)にウエステルマン肺吸虫のヒト脳内寄生例を見出し、精細な検討を加えた。これは大谷周庵(1887~88)につづいて世界で2番目の脳からの虫体の発見である。この貴重な虫体の標本は現在、医動物学教室に保存されている。また角田は1906年(明39)片山病における虫卵

の脳血管栓塞に関する論文をあらわした他数編の立派な寄生虫学の論文を発表した。本学で行なわれた寄生虫関係の業績はまだまだあるが、紙数の都合上省略する。

さて、つぎに医動物学教室の創設とその後24年にわたる歴史をかいつまんで述べてみたい。まず教室創設のいきさつを当時の教授会記録から拾ってみよう。

1948年(昭23)1月15日 教授会記録

勝学長 寄生虫病学の設置に関しては切なる申し出もありますので、今後適当な先生がございましたら荒木、鈴木両教授に連絡ねがいたいと存じます。

1948年(昭23)3月25日 教授会記録

勝学長 以前、鈴木、荒木両教授からも申し出がありまして、その後権威者を考えていました処、幸い阪大の森下理学博士より承りまして、現在津山に御在住の小林晴治郎先生にこの秋頃より、1年間70時間位講義をやって頂いては如何かと存じます。云々、教授会承認。

1948年(昭23)10月7日 教授会記録

勝学長 小林先生紹介。10月21日より寄生虫学の講義を始めて頂きます。

1949年(昭24)1月24日 教授会記録

勝学長 昨年12月31日、小林先生が講師として就任して頂く辞令が参りました。医学教育基準の新制大学の授業科目の中に医動物学も含んでおりますので、今後その主任として講義を願うことになりました。本日より教授会の構成員になって頂き度く存じますので御承認願います。教授会承認。

このようにして医動物学教室が発足した。教室はまず17号病舎横の旧写真部部室を改造してこれにあて、その後1950年(昭25)12月25日には旧解剖組織実習室の一部に移転し、1951年(昭26)12月21日には新築成った基礎教室(現在の1号館)の4階に移転し現在に至っている。

昭和20年代の人員と研究の方向をみると、まず創設期には三谷和合、飯田孝雄、兵行典、北小路博央らの学生が集って研究をはじめ、1949年(昭24)3月には島田松之助、1950年(昭25)6月には赤座瑛、同年8月には佐藤淳夫、同年10月には川本脩二、1951年(昭26)4月には渡辺清、1952年(昭27)6月には卜部昭、1953年(昭28)3月には吉田幸雄が助手となり、同年3月には川本脩二が講師となった。この頃の研究は回虫、鉤虫はじめ腸管寄生蠕虫の疫学的調査ならびに予防撲滅に関する研究が主で、教室員は学生と共に農山村へ出向いて検便や駆虫に汗を流していた。それと共に日本住血吸虫、赤痢アメーバ、ランブル鞭毛虫、蝇、南京虫、ミヤイリガイ、マメタニンなどの研究も行なわれた。

この間の主な出来事としては、1949年(昭24)4月、小林は会長となって第1回日本衛生昆虫学総会を京都大学で開催し、つづいて同年9月には小林は会長となって日本衛生動物学会第1回近畿支部例会を、さらに同年11月には日本寄生虫学会第2回近畿支部例会を本学で開催した。ついで1952年(昭27)4月には再び小林は会長となって第21回日本寄生虫学会総会と第4回日本衛生動物学会総会を本学で開催した。

1953年(昭28)9月15日、小林は長年の寄生虫学ならびに衛生動物学への貢献に対し第5回

保健文化賞が与えられた。

つぎに昭和30年代であるが、この時代に助手になった者は三谷和合(1955年4月)、青野宏(1956年4月)、中西靖郎(1957年7月)、島谷敏男(1958年4月)、松尾喜久男(1961年4月)、田辺一男(1961年5月)、近藤力王至(1961年6月)、松野喜六(1963年5月)、らである。講師川本楯二は1956年(昭31)6月退職し、佐藤淳夫が1958年(昭33)4月に講師となり、さらに1961年(昭36)6月には助教となり、まもなく信州大学助教授に転出した。吉田幸雄は1961年(昭36)10月講師となり、翌年7月助教となった。また松尾喜久男は同年8月講師となった。小林は1956年(昭31)12月9日、東上中の車中でたおれ、その後次第に回復し、病床にあって教室員の指導にあたってきたが1958年(昭33)3月31日をもって退職した。その後本教室の教授の選考が行なわれた結果、鳥取大学教授長花操が選ばれ、1959年(昭34)9月1日着任した。

昭和30年代の主な出来事をあげてみると、1955年(昭30)4月、第14回日本医学会総会が京都で開催されるにあたり、小林は日本寄生虫学会ならびに日本衛生動物学会の分科会長となり両学会を主宰した。また小林は1958年(昭33)5月に、吸虫類の发育史に関する創始的研究で第9回桂田賞を受賞した。1960年(昭35)11月には長花が日本寄生虫学会西日本支部長に就任し、かつ長花は1962年(昭37)3月から1964年(昭39)3月まで本学学生部長を兼任した。1962年(昭37)4月には吉田幸雄が、鉤虫の感染経路に関する研究により第8回小泉賞を受賞し、かつ吉田は China Medical Board の援助によって1962年9月から1年間米国の Tulane 大学に留学した。

昭和30年代の研究は極めて多岐にわたり、鉤虫の研究はフィールドから次第に実験室内に移り、ヒト固有の鉤虫の動物感染実験に成功し、これらの感染経路と体内移行経路を明らかにして行った。また若菜病の発症機序と治療、各種肺吸虫の形態、发育史と治療、ゴキブリ、蚊、蠅、毒蛾の研究など各方面にわたった。また教室をあげて近畿地方の肝吸虫の調査研究が開始された。

昭和40年代に入って、まず主な人事は、信州大学助教授に転出していた佐藤淳夫が1968年(昭43)9月、鹿児島大学教授(医動物学)に就任し、1970年(昭45)3月には長花操が停年退職し、同年5月に吉田幸雄が後任教授に就任した。その後同年10月には松尾喜久男が助教となり、1972年(昭47)4月には有齒直樹が助手となり、同年7月岡本憲司が講師となった。吉田は1971年(昭46)7月学生部長を兼ね、現在に至っている。

この間における研究の動向は、まず肝吸虫の疫学的研究が次第にその範囲を広め、つぎつぎに新しい流行地を発見した。鉤虫の研究はズビニ鉤虫からアメリカ鉤虫へ、さらには熱帯地域に分布するセイロン鉤虫、ブラジル鉤虫、マレー鉤虫へと拡大し、その成果の一部は1970



年(昭45)4月,日本寄生虫学会総会において吉田が宿題報告を行なった。一方,松尾喜久男らは日本脳炎媒介蚊の研究から端を発し,現在では走査電子顕微鏡を駆使するなどして広く東南アジア一帯の蚊について研究を行なっている。また近藤力王至らは移行性幼線虫症の研究から寄生虫の免疫学的領域に進み,松野喜六らは糞線虫の研究と平行して最近はトリパノソーマなど原虫の領域に進んでいる。このように熱帯病との関連が深くなるにつれ,教室員の海外出張の機会がふえてきた。1966年(昭41)には吉田,岡本らは台湾に調査に出かけ,1968年(昭43)には長花,吉田はテヘランで行なわれた第8回国際熱帯医学・マラリア会議に出席すると共に各国を視察し,松尾は1968年と1972年に台湾へ,1970年にはマレーシアへ,松野は1971年にキューバへそれぞれ出張した。

この間における出来事としては1968年(昭43)4月,長花は会長となって第37回日本寄生虫学会総会と第20回衛生動物学会総会を京都で開催した。つぎにあげねばならぬことは本教室初代主任小林が13年間にわたる病床生活の後,遂に1969年(昭44)10月6日永眠したことである。享年85歳であった。

以上の如く24年間にわたる教室の歴史をふり返ってみるとまことに多事であった。研究は一時も休みなく続けられた。教室で発表した論文は340編に達する。教室に在籍した者で清和会という会を結成しているが,現在70名を数える。また本教室で学位を得た者は43名であり,清和会員で他大学の教授になっている者6名,助教授あるいは講師となっている者3名である。

(文責 吉田幸雄)

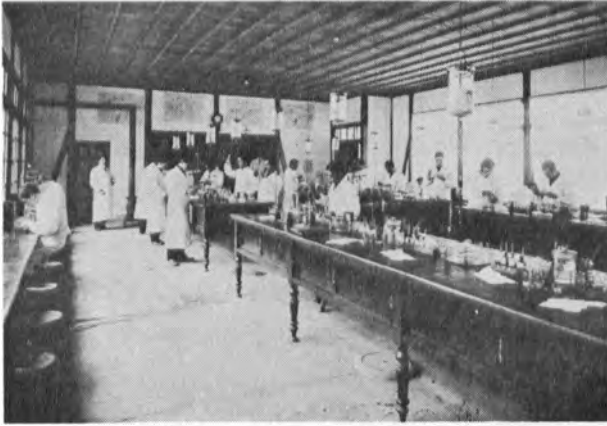
## 微生物学教室

微生物学教室の歴史を本学八十年史から抜粋すると次のごとくである。

1903年(明36)1月広小路構内空地に2階建1棟を新築して階上を病理学教室,階下を衛生細菌学教室にあて,専門学校への脱皮の準備が作られつつあった。

1903年3月医学校は医学専門学校となり,同年4月常岡良三が助教諭となり,衛生細菌学の担任を命ぜられた。引きつづいて1906年(明39)4月助教諭常岡良三は教諭に任ぜられ衛生細菌学担任,初代の教室の主任者であった。

1912年(明45)5月常岡は細菌学研究のため,満2カ年間ドイツに留学を命ぜられ,この間講師として帖佐彦四郎を迎え,細菌学講座を担当せしめた。



微生物学教室 実習 (1911)

1929年(大4)1月17日、かねて留学中の常岡は第1次世界大戦にまきこまれ、一時、イギリスに身をもつてのがれたが、無事帰朝することができた。

1934年(昭9)衛生学教室が独立した。

1942年(昭17)8月、学長であった常岡は、定年制にしたがって学長並に教授の職をしりぞい

た。

同じく1942年(昭17)2月、助教授加藤明敏が教授となり、微生物学を担当することになった。

越えて1943年(昭18)3月13日、将来を嘱望された加藤明敏は病死し、衛生学教室の教授赤野六郎が微生物学教室の管理にあたった。

1943年(昭18)5月、かつて微生物学教室から皮膚泌尿器科に転じた助教授鈴木成美が皮膚泌尿器科副部長より再び微生物学教室勤務となり同年11月教授に任ぜられ、加藤の跡をついで微生物学を担当し、教授赤野六郎は微生物学教室管理を免ぜられた。

1944年(昭19)通史にも記載されているように4月24日午後8時30分頃、衛生学教室、微生物学教室の小使室より失火のため解剖学、病理学の2教室をのこし、基礎教室の衛生学、微生物学、生理学、医化学、薬理学の5教室は烏有に帰した。

教室は第2次大戦中、寺町通今出川南の京極国民学校に、戦後は附属病院内細菌検査室などに仮寓していた。1948年(昭23)まがりなりにも応急に木造2階建の教室が現2号館、中央部付近の空地に新築され、1965年(昭40)11月2号館新築工事が始るまでこの建物の中にあり、1967年(昭42)7月に基礎2号館が新築され、その4階に移転し現在に至るまで転々とした間借りの生活がつづいた。

鈴木成美は2号館の新築移転をまたず1966年(昭41)3月停年により退官、同年11月に助教授菅沼惇が教授に任ぜられ、現在に至っている。

この有転の教室の歴史のなかで微生物学教室に在籍し、研究に従事した者は多数に上っている。1942年(昭17)のBH会(教室の同窓会ともいべきもの)名簿によれば、当時の会員数は63名であったが、鈴木成美の時代になると教室の門を叩く者の数は著しく多くなり、鈴木氏の指導により学位を得た者は160余名の多きに上っている。これはもちろん鈴木の人柄によ

るものであるが、当時の風潮を示すものと考えられる。

研究の面からみると、そのプロジェクトの変遷は興味深く常岡良三自身の学位論文は「異性抗体に就て」であったが、同教授在任の後期は、全面的なサルモネラ食中毒の発生が多く衛生行政としてその制圧に手を焼いたことにもよると思われるが、俄然「サルモネラ」に関する研究が目立ち、保菌者の治療についての興味ある論文が発表されている。しかし一方では、ウイルスの組織培養のような新しいテーマにも取り組みがみられる。一方では化学療法へのぎょう望、一方ではウイルス学への大きい関心への芽ばえと、とってよいであろう。

鈴木成美の時代の研究方向を教室で学位を得た人々の主論文のテーマを分類することでのぞきみることができる。( )内は論文数を示す。

①免疫血清学に関するもの(50), ②細胞内寄生体に関するもの(28), ③化学療法剤に関するもの(27), ④細胞学に関するもの(15), ⑤一般細菌学(14), ⑥宿主・寄生体関係(8), ⑦遺伝に関するもの(8), ⑧疫学に関するもの(3), ⑨その他(9)

鈴木自身の学位論文は「血小板の免疫学的研究」であり、免疫血清学に造詣が深く、そのため教授在任中を通じてこの方向の指導論文が一番多いのは当然と思われる。免疫血清学に関する論文のテーマの主なものあげて見ると、次のごとくである。ヒト血清のトリパノゾーマ殺滅作用に関する研究、胎盤の globulin に関する研究、寒天層中における補体結合反応、腸チフス免疫における不完全抗体に関する研究、T.P. (*Treponema pallidum*) 抗原による梅毒血清反応、蛍光抗体法による梅毒血清診断、実験的自己腎炎に関する研究、免疫電子顕微鏡法による抗原の局在に関する研究などである。このうち特に梅毒血清反応に関する研究は、文部省科学研究費の補助を受けたもので、今日においても臨床診断における基礎的研究として高く評価されている。

細胞内寄生体、なかんずくウイルスに関するものでは、麻疹ウイルスに関する研究が13編で一番多い。初期の研究ではマウス脳固定ウイルスを用いていたが、後になって組織培養分離による麻疹ウイルスを用いて研究が行なわれた。ついで多いのが日本脳炎ウイルスに関するもの(5編)で、日脳ウイルスの分離あるいは組織培養法に関する研究が行なわれた。その他、インフルエンザウイルスに関するもの(3編)、Columbia-SK ウイルスに関する研究(3編)、トラコーマ固定毒(1編)、第四性病ウイルス(1編)などがある。

化学療法剤に関する研究では、時代の進展とともにその研究傾向が興味深く、移りかわる。1945年(昭20)代においては、青カビや放線菌から抗菌性物質を分離する研究が行なわれている。一方、抗生物質の作用機序に関する研究、各抗菌剤の併用効果に関する研究がある。併用の中には、胎盤エキス(グロブリン)との併用、変調療法と化学療法剤との併用に関する研究があり、一定の併用効果を認めている。また、スピロヘータ病、癩および原虫に対する化

学療法の研究，日本脳炎，インフルエンザに対する化学療法の研究などがある。また一方では，化学療法剤の連続投与による副作用に関する研究，ことに腎臓毒性に関する研究があり，本研究に対して外国の製薬会社から内容の照会があり注目された。さらに，基礎的研究として，原形質膜透過性と薬剤の活性に関する問題，抗生物質作用下における細菌の形態変化が光顕ならびに電顕を利用して研究された。

細胞学に関する研究として，電子顕微鏡がわが国で実用化されるや間もなく本学に電子顕微鏡室が開設されたが，教室では細菌の微細構造に関する研究を行なって来た。例えば，アノイリナーゼ菌，ジフテリア菌，Bacillus 属菌，炭疽菌，ブドウ球菌を始めとして，原虫，なかんずく Tetrahymena, Toxoplasma の研究が行なわれた。カーボンレプリカ法は，細菌のコロニーの観察に有用なことが，教室の研究によって認められ，他の研究者によっても利用された。超薄切片法についての研究も，包埋剤，マイクロトームの進歩改良につれて一般に進んだのであるが，教室のこの方面の研究，特に細菌の微細構造に関する研究は，国内および国外においてその業績が認められるに至っている。

一般細菌学としては，淋菌，ナイセリア，乳酸桿菌，耐性ブドウ球菌，結核菌，緑膿菌，PPLO などが含まれる。

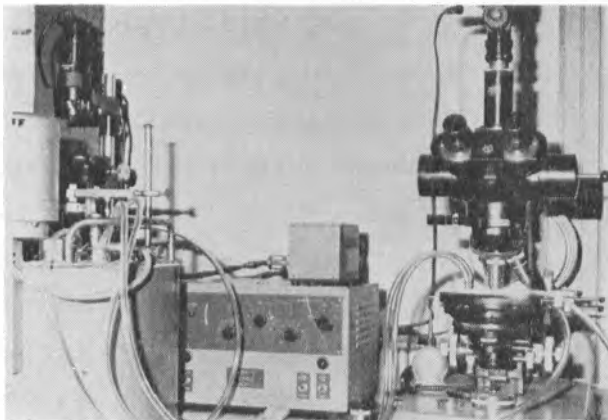
宿主・寄生体関係では，低蛋白血症動物の感染抵抗性，スピロヘータ感染に及ぼす副腎皮質ホルモンの影響，白血球の噬菌現象機転に関する研究などがある。いずれも感染症の基礎的な研究として重要で，今日においても参考とすべき研究である。

細菌の遺伝に関する研究は8編で，多いとはいえない。しかし，細菌遺伝学の進歩の比較的初期から教室では手がけていたといえる。例えば大腸菌の Recombination に関する基礎的研究が行なわれ，赤痢菌の遺伝に関する研究も行なわれた。しかし，この方面の研究を続けてやる者がなくなり，途切れた形となっていることは残念であるが，今後再び活発に研究

される日のあることを期待している。

疫学的研究としては，保菌者の疫学的観察，赤痢の疫学的研究などがある。論文としては少ないけれども，重要な問題を含んでいると考えられる。

以上鈴木の時代における学位論文のテーマを中心にして教室の研究の傾向について述べたも



微生物学教室，還流培養装置（1972）

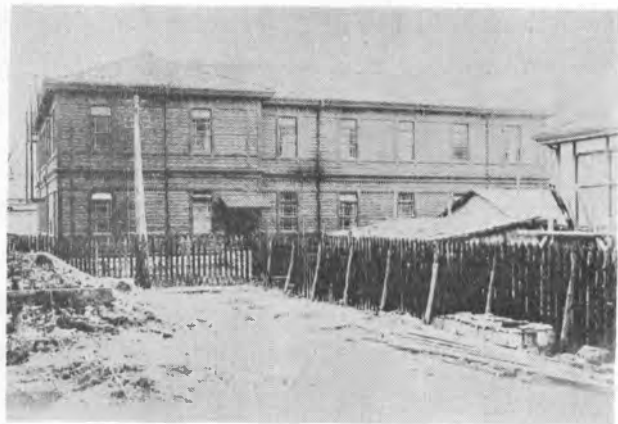
のである。研究には時代の積み重ねが重要であるので、現在の菅沼になってからも大体において以前からの引き継ぎであるということが出来る。しかし昔年にくらべて研究人員は少数となり、広いレパトリーを万遍なくカバーすることは無理なことで、むしろ少数精鋭主義をとり、したがって現在の教室における方針としては、スタッフが教育と研究とを分担して行なうようにしている。その主な内容を述べると次のごとくである。

講義および実習指導の分担としては、細菌学(真菌を含む)を教授菅沼と講師谷野、ウイルスならびに他の細胞内寄生体に関する部門を助教授岸田、免疫血清学を講師片山(学内)が受け持ち、2名の助手と1名の副手がそれぞれ加わっている。研究の面においては、菅沼は細菌の微細構造に関する研究、特にブドウ球菌を中心として細菌の膜系に関する電子顕微鏡的研究を今後とも進める計画である。岸田は外来の病原に対する研究の一端であるウイルスの問題を受け持っている。これら外国の中でも情報を持つ病原に対する予防医学に主題を求め、その1つとしてインターフェロンの研究を進めている。片山は抗体の作用、その白血球との関係、白血球および腫瘍細胞の細胞膜の構造、機能などの問題を重点にしている。

(文責 菅沼 惇)

## 薬理学教室

本教室の創立の歴史は京都府立医学専門学校の発展期、すなわち1909年(明42)5月に教諭藤谷功彦(薬物学・医化学担当)の開講にさかのぼる。藤谷は在籍5年未満にして1914年(大3)2月に死亡、同年3月より講師革島廉三郎に薬物学講座担当が囑託された。1919年(大8)4月には革島は教授(薬物学)に就任。鋭意教室の発展に力を注いだ。同教授は在籍3年余りで1922年(大11)8月に退職、翌1923年(大12)4月助教授藤井猪十郎が教室を引き継ぐこととなった。同年12月には薬物学の



生理および薬理学教室 (1909頃)

築が落成、引続いて翌1924年(大13)3月には助教授藤井が教授(薬物学)に昇任、ここに京都府立医科大学薬理学教室の基盤が築かれることとなった。その後、無事に発展の一途をたどりつつあった本教室は1944年(昭19)4月衛生学、微生物学、生理学および医化学教室と共に焼失し、さらに1945年(昭20)3月には戦火を避けるため疎開を余儀なくされ、この間本教室の教育研究活動は大きく後退をせざるをえぬ状態であった。この頃、本教室にとって特記すべきことは、本教室の名称が1945年(昭20)3月に薬物学教室より薬理学教室に改称されたことである。当時本邦の他大学においても同様な改称が漸次行なわれていたが、従来の医薬品の性質の解明を主とした薬物学から、薬物作用時の生体側の機能変化機構の解明を主とした薬物学に脱皮したいとの意欲のあらわれであったと考えられる。1950年(昭25)6月に本教室は生理学および衛生学教室と共に、旧西構内に新築された薬理学教室に移転、現在の基礎2号館に移転するまでの17年間、この旧西構内の教室において教育研究活動が続けられた。この間1952年(昭27)4月藤井猪十郎、定年退職、同年6月名誉教授の称号を授与された。1954年(昭29)9月には助教授小沢俊次が教授(薬理学)に昇任、藤井より本教室を引き継いだ。1967年(昭42)8月には本教室は藤井・小沢の下に多くの研究者と研究業績を生み出した想い出多き旧西構内の教室から新築された基礎2号館2階に移転、新しい設備のものと将来の発展を期すこととなった。1971年(昭46)3月には小沢俊次、停年で退職、同4月に名誉教授の称号を授与された。同年8月には栗山欣弥教授(薬理学)が就任。また同年9月には助教授長谷川栄一が本学教授(薬理学)に就任、即日依頼退職した。

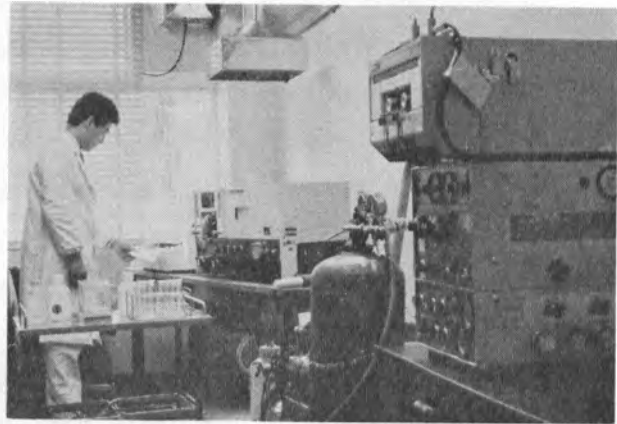
本教室は第2代の革島廉三郎を除き、本学出身の教授によって教室の伝統が受けつがれ、また生化学的薬理学が研究テーマの底流をなしていることに特徴づけられる。

本教室にはこの教室で研究成果をあげ医学博士の学位を得た人達の同門会として、京都府立医科大学薬理学教室観光会がある。故藤井猪十郎の命名の下に設立されたもので、現在70余名の会員を持ち、毎年1～2回の総会を開催して会員相互の親睦を計ると共に、本教室および会員の発展を願って種々の援助活動を続けている。世代の異なった各会員の発展の姿はそのまま本教室の歴史につながるものであり、今後ますます観光会の会員が増加し、本薬理学教室発展の基礎が強固になって行くことが望まれる。

本教室の初代藤谷および第2代革島の時代はおのおの在職の期間も短く、また両教授共に京都帝国大学医科大学森島庫太教授の下で研究生活を送った関係もあり、その研究課題は森島庫太教授の研究テーマに近いものであった。すなわち藤谷は消化器系の薬理学および防虫剤の研究を行ない、特に人工胃液を用いて胃内での消化機構とこれに対する各種薬物の影響の解析に力を注いだ。革島は循環器系の薬理学と生薬の研究を中心に研究活動を行ない、特に強心剤の作用が投与の条件や他の薬物との併用により如何なる差異を生ずるかの問題につ

いて種々の新しい知見を発表した。第3代藤井の時代になって本教室の研究態勢が整い、その29年間の在職中に本教室の教育研究上の地位と特色が確立された。藤井の研究テーマは動物のレベルにおける血糖および糖代謝調節機構の問題に始まり、特に副腎髄質と含水炭素代謝に関して昭和の初期に多くの研究発表が行なわれている。これらの研究はその後自律神経系特に交感神経系の薬理学に発展し、また一方肝臓における抱合グルクロン酸の研究に進むこととなった。1935~1945年(昭10~20)の間においては上記の諸研究はさらにエネルギー代謝との関連のもとに進められ、燐酸代謝と糖代謝の相互関係の問題、一酸化炭素や青酸中毒時の糖代謝変化の問題に発展した。1949~1952年(昭24~27)には以前に行なわれていた動物レベルでの薬理学的研究は一変して組織のレベルに進み、特に肝臓および大脳の組織呼吸を中心にビタミン B<sub>1</sub> 欠乏、各種陽イオンおよび糖類とこれらの臓器の物質代謝との関係が追求された。

第4代小沢は前任の藤井の末期における組織レベルでの薬理学的研究を受け継ぎ、特に中枢神経組織における薬理学的研究を精力的に展開した。1953~1959年(昭28~34)においては脳組織のアミノ酸代謝、アセチルコリン代謝、麻酔剤と脳組織呼吸などの諸問題に対し生化学的技法を用いての詳細な研究を行なうと共に、電気生理学的技法、特に脳波、心電図および筋電図、さらには誘発電位を指標とする中枢神経薬理学の新分野を開拓し、神経組織の機能と代謝を総合的に検索することが行なわれた。小沢在職の後半期1960~1971年(昭35~46)には前記の研究方法はさらに電気刺激適用下の大脳皮質切片を用いての機能活動変化に伴う神経化学的変動の解析、さらにはこれらの組織切片よりの誘発電位を指標とする中枢作動の薬理作用解析へと進展した。この間肝臓、腎臓、子宮、歯髄、腸管などに対する薬物の作用についても、神経組織における薬理学的および生化学的変化との比較のもとに諸種の検討を加えた。1971年(昭46)、第5代栗山が前任小沢の主なる研究テーマであった中枢神経系の薬理学を引継ぎ、組織レベルより細胞あるいは細胞下のレベルへ、さらには分子薬理学のレベルへと進展させるべく努力を続けている。現在の主なる研究課題は生化学的技法によるシナプスの薬理学的研究に抑制性シナプスにおける神経伝達物質の研究および薬物依存形式時における中枢神経系内に惹起される神経化



薬理学教室 (1972年)

学変化の解析である。

資料

1. 藤井教授定年記念 薬理学教室研究業績一覧(昭27) 4月
2. 京都府立医科大学薬理学教室業績目録 第1集 1950~1959(昭34) 9月
3. 観光会回顧写真帖 京都府立医科大学薬理学教室観光会 (昭36) 1月
4. 小沢教授定年退職記念 教室研究業績目録(第2編) 京都府立医科大学薬理学教室編(昭46) 3月

(文責 栗山欣弥)

## 衛生学公衆衛生学教室

1884年(明17) 2月28日付で京都府知事代理から「布達」された文部省の医学学校通則の第2章に甲種医学学校の学科があげられている。そのなかに衛生学の名がみられる。これが本学で衛生学の教育がおこなわれていたことを推測させる最古の文書である。これからみると、本学での衛生学の教育は医学学校開設直後からおこなわれていたと考えられる。

1891年(明24) 9月から教諭宮入慶之助が生理学、衛生学を担当していた。宮入は1894年(明27) 5月まで京都府医学学校に在勤したが、のちに九州大学教授になった。1913年(大2)日本住血吸虫の中間宿主である宮入貝を発見し、その人体への感染経路の確認と体内経過を実験的に探求した。

1894年(明27) 5月から教諭富永兼棠が生理学、衛生学の相当を引継いで、1897年(明30) 9月まで在任した。

その後の教諭は明らかでないが、1899年(明32)頃の卒業試験で、生理学・衛生学を嘱託教員の栗生光謙が担当したとあるので、あるいは常勤の教諭は在職しなかったのかもしれない。なお、栗生は宮入慶之助の前任者で、1882年(明15)12月から1891年(明24) 9月まで物理学・生理学の担当教諭であった。

1903年(明36) 1月、当時の校内南西の空地(ほぼ現在の基礎2号館の位置付近)に、2階建1棟が新築され、階上を病理学教室に、階下を衛生細菌学教室にそれぞれあてた。これは同年3月発布された専門学校令によって医学専門学校への昇格(1903年6月)をめざした校舎整備の一環であった。

1903年(明36) 4月、常岡良三が助教諭に任ぜられて衛生学と細菌学とを担当することになり、衛生細菌学教室が独立した。常岡は1898年(明31)に医学学校を卒業した新鋭の教諭として



新築の研究室で新設の教室を主宰し、1906年(明39)4月には教諭に任命された。

1907年(明40)2月、衛生学細菌学教室の校舎として2階建1棟と平家建2棟が新築されている。当時の医学教育機関の全国的な水準からみると、とりわけて大規模なものであった。

わが国での衛生学研究者の全国的規模の学会は、1902年(明35)4月に東京法科大学でおこなわれた日本連合医学会第1回学会の第14部会(衛生学、細菌学、伝染病学部)から始まっている。1922年(大11)4月2日から3日間、京都でひらかれた第6回日本医学会第13部(衛生学、微生物学、伝染病学)の会長は九州大学の宮入慶之助教授であり、その委員に京都府立医科大学の教授常岡良三が名を連らねている。

1923年(大12)1月24日、京都府立医科大学学術集談会の発会式が、衛生微生物学教室を当番教室としておこなわれ、常岡が「微生物学界に於ける輓近の進況」という特別講演をしている。

1925年(大15)4月4日、衛生学微生物学寄生虫学連合学会が「衛生学微生物学及寄生虫学会研究に従事するものの連合学会」(学会設立趣意書)として設立された。その第1回総会で選出された役員のなかで常岡が評議員になっている。

本学の医化学教室に在勤中の講師赤野六郎は、かねてから衛生学の研修のため国内留学していたが、1934年(昭9)3月、助教授に任ぜられて衛生学を担当することになった。ここに衛生学教室が衛生微生物学教室から分離して独立することになった。赤野は1937年(昭12)4月に教授に任ぜられて、本学衛生学教室の初代教授になった。

1944年(昭19)1月24日午後8時30分頃、衛生学教室と微生物学教室の小使室から出火して、衛生学、微生物学、生理学、医化学、薬物学の5教室が灰燼に帰した。罹災教室の研究室は校内各処に分散したが、衛生学教室は解剖学教室の一部を借用していた。

1944年(昭19)4月1日に金沢医大で第16回日本連合衛生学会が開かれた。本学の赤野は「滴水水銀電極による水質の観察方法に就いて」と題して、水質の微量分析化学のための polarograph 法について特別報告をおこなっている。

1944年(昭19)6月、赤野が病気のため休職したので、衛生学教室の管理は教授勝義孝があたり、京都帝国大学医学部の講師緒方洪平が本学の講師を囑託されて衛生学の教育にあたることになった。

赤野六郎は1930年(昭5)に本学を卒業し、卒業後4年で本学助教授に、卒業後7年で本学教授に任ぜられた。常岡良三が30余年担当していた衛生学微生物学教室から衛生学教室を分離独立させた赤野は、本学衛生学教室の初代教授であったが、1944年(昭19)11月16日、病気のため死去した。

1946年(昭21)11月3日、京都帝大医学部の講師緒方洪平が本学教授に就任して衛生学を担

当した。緒方は、1935年(昭10)4月の第7回日本連合衛生学会で「衣服気候に関する研究」と題して特別講演をおこない、1942年(昭17)3月の第14回日本連合衛生学会(第11回日本医学会)の第12分科会でも、「衣服の研究業績に関する報告」という特別報告をしている。緒方は京都帝国大学医学部衛生学教室において、戸田正三教授のもとで一貫して衣服衛生学の研究を続けていた。本学教授に就任後もその研究の主眼を衣服衛生においたので、以後本学衛生学教室では衣服衛生学の研究が大規模に精力的におこなわれた。

1949年(昭24)4月、緒方は衣服研究会を組織して工学、家政学、人文社会など医学衛生学以外の各方面で衣服研究に従事する人達とともに共通の研究の場をつくった。この会は1953年(昭28)10月、衣服学会に発展し、機関紙「衣服学会雑誌」を発行して、その事務所は現在も本学衛生学公衆衛生学教室におかれている。

1949年(昭24)5月1日から3日間、第1回日本衛生学会総会が緒方を学会長として鴨沂高校を会場にして開かれた。太平洋戦争の敗戦とともに日本連合衛生学会も大きく刷新されることとなり、日本衛生学会として新発足した歴史的な学会であった。

1950年(昭25)6月、生理学、薬理学と衛生学の3教室と共同実習室として2階建2棟と平屋建1棟とが河原町通りを隔てた本学西構(現在の文化芸術会館の位置——元看護婦寄宿舍跡地)に建築され、その竣工をみた。それまで学内各所に研究室などを分散して仮住まいしていた衛生学教室は、木造の仮建築ではあったが、教室らしい建物に6年ぶりにはいることができ、薬理学教室とともに西構の西南の2階建の1棟にはいった。

1956年(昭31)3月31日、緒方洪平は停年退職した。緒方は、同年4月5日から金沢市で開かれた第26回日本衛生学会総会で「日本人の衣生活の衛生的調査研究」という特別報告をおこなった。1957年(昭32)6月、緒方教授は本学名誉教授の称号を送られた。同年7月、箱根で開かれた第27回日本衛生学会総会で、緒方名誉教授は日本衛生学会名誉会員に推挙された。

1957年(昭32)2月1日付で東京大学医学部の助教授額田粲(公衆衛生学)が本学教授として着任した。額田は労働衛生学、衛生統計学、疫学などを主な研究分野としていたが、本学教授に就任後も乏しい研究予算のなかで統計学的手法を中心にした高血圧症の疫学などユニークな研究を進展させていった。また、額田は学生教育の面でも衛生学、公衆衛生学に関連の深い社会施設への学生見学に多くの授業時間をさいたり、学生実習として家庭訪問をおこなったりして改革した。

1957年(昭32)3月の大学院発足にあたり、衛生学教室の教職員の知らないあいだに教室(講座)の名称が衛生学・公衆衛生学教室に変えられていた。これは本学に衛生学講座と公衆衛生学講座との2講座をおく前提としてとられた措置であったと思われる。

1958年(昭33)4月7日から熊本市で開かれた第28回日本衛生学会総会での「高血圧の疫学」というシンポジウムで、額田は「血圧の変動性について」の講演をしている。

額田は1959年(昭34)10月から1962年(昭37)3月まで約2年半の間、学生部長を勤めて入学試験手続の改善などにとりくんだ。

1967年(昭42)3月31日付で額田は退職して、彼の父が創立した東邦大学医学部へ移った。

1957年(昭42)7月13日、基礎2号館が新築落成したので、衛生学公衆衛生学教室は、外壁のひび割れや雨もりなど老朽甚だしい西構の木造建築から、鉄筋コンクリート造りの2号館4階の西側に移転した。同じ階の東側には微生物学教室があり、23年ぶりに両教室が居所を同じくした。

1968年(昭43)1月16日、助教授永田久紀が教授に昇格就任した。永田は緒方、額田両先任教授のもとで、衣服衛生学、衛生統計学、疫学、学校保健学などを中心に研究を積んできた。教授就任後は、教育・研究以外にも自治体の各種行政委員会に参加するなど、学外活動も活発にしている。

1969年(昭44)からは京大大型電算機センターの発足にともなって、研究とくに統計研究に電算機が大幅に利用されるようになった。

1969年(昭44)の大学紛争は、教室にも幾多の有形無形の被害をもたらしたが、教室員の研究意欲はいささかも低下しなかった。

今日、生活環境のなかに社会的、自然的な不健康要因が増大している。社会と住民が医学と医療に求めている課題は多い。本学の衛生学公衆衛生学教室のスタッフは、それぞれ研究、教育さらには学外での直接的な社会活動を通じて、公害、疫学、精神衛生、食品衛生、職業病、労働災害などの重要課題へのとりくみを強めている。

(文責 永田久紀)

## 法医学教室

本邦における法医学の発祥は、「裁判医学校」として、1875年(明8)、東京都浅草の警視庁第5病院内に開設されたが、1894年(明27)、本学の前身である京都府立(甲種)医学校当時、神経精神病学担当の教諭島村俊一が「裁判医学」を教授したのが本学における法医学の淵源である。しかし、1910年(明43)には、すでに京都府立医学専門学校の校長の任にあった教授島村が退職したため、翌1911年(昭44)、京都帝国大学医学部の助教授小南又一郎が本学の講

師として囑託され、法医学の教鞭をとることになった。ついで、1921年(大10)に本学は大学に昇格したが、法医学教室は開設されず、ようやく1947年(昭22)2月、法医学教室が設立されるにいたり、元京大教授小南は専任講師(教授待遇)に任ぜられ、同教室の主任となった。1951年(昭26)12月、現在の基礎1号館が改築竣工され、その一階に法医学教室が設置された。1954年(昭29)11月、講師小南は在職中に死去し、助教授錫谷徹が教室管理に当たった。

1957年(昭32)2月、1954年(昭29)より1956年(昭31)まで Harvard 大学医学部法医学教室に留学してアメリカ法医学を修めた鳥取大学医学部教授小片重男が本学法医学教室の初代教授として迎えられ、ここに初めて本学独自の法医学教室としての体制が確立、大学院も設立されるに至った。以来15年間、小片は学生の教育、法医解剖、親子鑑定および交通事故事件鑑定など、実験・研究ならびに大学院学生および研究生の指導等にあたり、また、国内外の学会活動、特に日本アルコール医学会を創立し、日本におけるアルコール医学研究を総括し、かつ、日本アルコール問題連絡協議会を創立し、アルコール中毒の予防、治療、厚生問題に取り組む諸団体の横の連絡をはかり、海外のアルコール医学会との交流を進め現在に至っている。



法医学教室(1972)



法医学教室(1972)

1951年(昭26)12月に竣工された基礎1号館における現法医学教室の原形は、専任講師小南と助教授錫谷の設計によるものであるが、現在は、教授室、教授実験室、助教授室、第1～第9研究室、解剖室、準備室、暗室、標本室、司法官兼遺族控室、霊安室、死体冷蔵室、浴室、倉庫2室などからなる。

主な研究設備として、ガスクロマトグラフ2基、発光分光分析機1台、ベックマン型自記分光光度計1台、衝撃機1台、各種自動車運転適性検査機などがあり、多方面にわたる実験・研究が行なわれている。

1946年(昭21)、京都府に監察医務制度が施行され、本学と京

都大学医学部とが京都市を地域的に分担して変死体などの検屍および行政解剖を行なったのであるが、1956年(昭31)以来同業務が中止された。したがって当教室の解剖体数は激減したが、小片は赴任以来鋭意遺族承諾による解剖を行なうことに努力した。

また、司法解剖は従来、総て京大医学部法医学教室においてのみ行なわれ、本学に対しては委嘱されなかった。小片は赴任後直ちに京都府警察本部に対して当教室における司法解剖の必要性を熱心に訴え、他方、当時の望月学長および本学出身の警察医の後援を得て、幾多の折衝の結果、ようやく当時の井上本部長、楊枝刑事部長らの理解を得るところとなり、1958年(昭33)3月より京大法医学教室と交互に司法解剖が依頼されることに決定され、同月12日に生後3カ月の男性乳児変死体の司法解剖第1号が嘱託されるに至った。この事実は当教室の法医学会における格調を高揚したものであり、本学にとっても忘却することのできない歴史の1ページである。ついで1962年(昭37)7月4日より滋賀県警察本部から司法解剖および行政解剖が当教室に委嘱されるに至った。

1945年(昭20)から1972年(昭47)7月までに当教室において行なわれた法医解剖の総数は1,248体であり1957年(昭32)以来の逐年体数は別表のとおりである。かくして開始された法医解剖のなかには、世上を大いに騒がせた多くの凶悪な難事件もあり、また、解剖によってはじめて殺人事件であることが判明した例も多い。これらは本学学生への生きた教育資料ともなり、他方、社会の安寧秩序を守ることに對して大いに貢献した。その一部をあげると、「自殺と思われた身許不明婦人強盗殺人事件」、「独居老人連続殺人事件(広域捜査第105号事件)」、「隆清荘独居婦人殺人放火事件」、「植村荘独居婦人変死事件」、「ガードマン連続射殺事件(広域捜査第108号事件)」、「保田殺人事件」などがある。

かような、多年の功績により1970年(昭45)には小片に対して京都府警察本部

昭和32年より同47年7月までの法医解剖体数  
付表 (括弧内は滋賀県)

年 度	行政解剖数	司法解剖数	年度合計
昭和 32	28	0	28
" 33	45	12	57
" 34	32	10	42
" 35	13	18	31
" 36	14	19	33
" 37	19	27 (1)	46 (1)
" 38	12	41 (10)	53 (10)
" 39	17 (1)	35 (4)	52 (5)
" 40	17	27 (4)	44 (4)
" 41	20 (3)	31 (6)	51 (9)
" 42	8	37 (6)	45 (6)
" 43	11	37 (5)	48 (5)
" 44	8 (1)	43 (6)	51 (7)
" 45	5	41 (3)	46 (3)
" 46	8	40 (3)	48 (3)
" 47.7月	0	16	16
合 計	257 (5)	434 (48)	691 (53)

長柏原及也警視監より感謝状が贈られ、さらに1971年(昭46)には警察庁後藤田正晴長官より警察協力章が授与された。また、1964年(昭39)、アメリカの Perry Mason 作家 E.S. Gardner より、彼の著書“The Case of the Phantom Fortune”(つかみそこねた幸運)を献本され、その序文において法医学的才腕を絶讃されている。学会事務として、

1) 日本アルコール医学会の事務所が、同学会の創立以来当教室にあり、その業務が管理されている。2) 日本アルコール医学会の機関誌「アルコール研究」が、1965年(昭41)創刊以来、小片が編集委員長となり、その編集・発行を当教室において行なっている。

現在の研究テーマとして、

1) アルコール中毒に関する研究、とくに急性および慢性アルコール中毒の生化学的研究ならびにアルコール習慣性の本態に関する研究(第45次日本法医学会総会での教授小片の特別講演)。2) ヒト肝臓アルコール脱水素酵素型に関する研究。3) アルコール脱水素酵素の免疫学的研究。4) アルコール代謝と Trace Elements の動態。5) アルコール代謝に対するホルモン関与の問題。6) アルコール負荷時の体温、消化管、呼吸などの生理病態学的研究。7) 窒息および各種中毒時のアルコール代謝酵素群の動態。8) 飲酒時の運転作業に関する研究。9) 血液および血清型群に関する研究。10) 親子鑑定に関する研究。11) 窒息時の血中ガス成分の動態に関する研究。

教育の方針として法医学を基礎的理論と応用医学的实际との両面から説き、医師の実際活動に役立つように把握させ、社会医学としての法医学の使命と重要性を理解させようとする。

講義：4学年の2学期と3学期。実際に遭遇した事件の解説をスライドあるいは標本について行ない、かつ、法医学的検討を行なわしめ、視聴覚教育の実を挙げようとする。とくに、最近の問題としては、臓器移植と死の定義、医療過誤などを含む民事法制および医道徳の問題、交通ならびに産業災害に対する法医学の見地、さらには立法および行政に対する法医学の関与などがあげられ、これらの問題解決への法医学的道標を示さんとする。

実習：5学年の1学期 実習には試料および実験動物を対象とするものと、人死体を対象とするもの、検屍および法医解剖への参加を課する。とくに当教室における実習の特色の1つとして、1958年(昭33)以来実施されている犬を用いての銃創の実習は、本学が唯一のものであるとみられ、最近および将来における銃火器による犯罪の増加に対処する極めて有意義な実習であると自負するものである。事実、1968年(昭43)に発生した108号連続射殺事件において、函館で射殺された死体の解剖にあたった某医師は頭部における銃創(射入口)を「錐のようなものによる」と誤った。これは銃創を一度でも見たことのある者ならば、犯すことのない誤りであると考えられ、この点からも当実習の意義の重大性は明らかであろう。

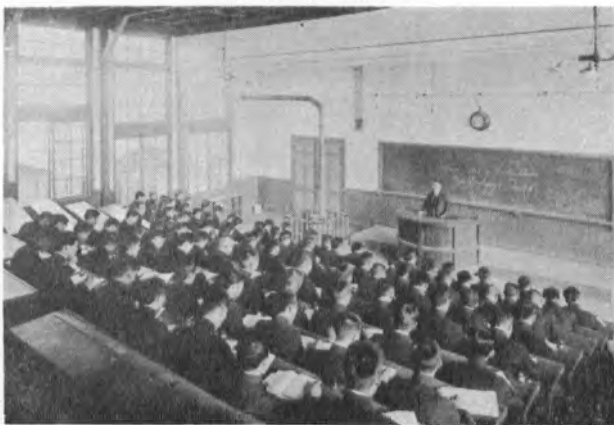
(文責 保田彌壽彦)

## 第1内科学教室

本学の歴史をふりかえると、医学校として開校の当初は外人教師がいわゆる医学全般を講述している。1872年(明5)開校の初代外人教師は Junker von Langeegg (1872年9月～1876年3月)(以下カッコ内は在任の期間をしめす)、専門は産婦人科であった。ついで C. G. van Mansvelt (1876年3月～1877年8月)が教鞭をとっている。講義は次第に系統的な姿にかわり、最後の Heinrich Bot hoScheube (1877年8月～1881年12月)は Leipzig 大学で内科を修め、東大にいた Baelz とは同門の人であった。Scheube の時代になると、外来、入院患者数も漸増し、剖検も当時としてはかなりな数であった。

Scheube以後は日本人教官が内科部長を占めることになるが、本学八十年史をひもといて、

順を追ってみると、半井澄(1873年12月～1886年6月)、斎藤仙也(1882年5月～1888年11月)、新宮凉亭(1881年5月～1883年10月)、佐藤廉(1888年11月～1891年2月)、笠原光興(1891年4月～1899年8月)、平井毓太郎(1894年3月～1899年6月)、浅木直之助(1899年9月～1901年3月)、伏原寅男(1908年5月



内科工藤博士の講義 (1911)

～1909年3月)、望月惇一(1902年4月～1914年10月)、工藤外三郎(1900年9月～1917年7月)、尾中守三(1916年6月～同年12月)となっている。

1921年(大10)10月19日の医学専門学校をへて大学への昇格をみた時、小川瑳五郎(1914年10月～1926年8月)が学長、内科第1部長をつとめていた。内科が2人の教諭、教授をそろえ、第1部長、第2部長が並列するのは1896年(明29)であり、当時は笠原光興(内科第1部長)平井毓太郎(内科第2部長)の名がみられる。1903年(明36)1月頃の内科の外来出番表をみると工藤外三郎、望月惇一が新患、旧患をそれぞれ曜日を変えて診察している。この診療様式が1960年(昭35)まで引きつがれて、第1、第2内科が交互に新旧患を診るシステムが続けられた。

1937年(大12)2月に教授 浅山忠愛内科第2部長(大12年2月～昭18年1月)として着任, 1926年(大15)8月に小川瑳五郎が退職すると, 同年9月には飯塚直彦(大15年9月～昭25年5月)が着任し, 教室は劇然と現在の独立した教室にわかれた, それぞれの教室に特有な教育, 研究, 診療が行なわれるようになり, いわゆる近代的な形態ができた。ここで注意せねばならないことは, 1945年(昭20)までの第1内科, 第2内科というのは, 前任教授が第1を名乗り, 後任教授が第2となっていたことである。そのため同じ教授が着任の始めには第2を, 後に前任教授が退職されると第1を名乗るということであった。ところが保険診療業務の膨大な書類が第1, 第2内科として処理されることになってその交替が難しくなり, 現状に定着したといういきさつがある。

このようにして現在の第1内科学教室は飯塚教授以来の内科をいうことになったのである。飯塚は前述のごとく小川瑳五郎の後任として着任したが, 前任者とは出身校も異り, 研究の面にも大きいつながりはなく, 飯塚が同教室の開祖のごとく考えられている。

飯塚は北大農学部を卒業の後, さらに京大医学部をへて, 東北大学の細菌学教室にしばらく籍を置き, ついで京大辻寛治教授のもとに助教授となり, Paris 留学中に京都府立医大教授にえらばれ, 急遽, 帰国着任した。研究の主流は辻教授の流れを受け内分秘学にあった。着任早々設備のない教室で拙速やむなく血糖値の測定を端緒にして糖尿病の研究にむかったというのがまさしく真実である。大正末期の本邦の内分秘学の動向は高峰博士らによってアドレナリンは早くから発見されていたとはいえ, その他のホルモンは殆んど知られず, いまだ揺籃期にあり飯塚の着任は Banting と Best によるインスリンの発見後わずか5年のことであった。当時飯塚内科の糖尿病研究の発端は, 糖尿病学にみられる進歩の歴史のランチョウをのぞかせ, 今日にいたっても利用価値の高い貴重な成果を生んでいった。

飯塚の行った甲状腺の研究も辻内科以来のものというべく, 内分秘学の分野での糖尿病と甲状腺疾患は今日においても最多数を占める研究の対象とされ, その慧眼は刮目に価しよう。辻教授の定年退官を期として, 日本内分秘学会事務所は京大から飯塚に引き次がれた。以来, 今日にいたるまで, 日本内分秘学会本部事務所は本学第1内科学教室にあり, これがまた, 本教室の研究の基礎を規定することになったのである。すなわち第14, 第15回日本内分秘学会総会を飯塚, 第28回を館石, 第41回を吉田が会長をつとめて主宰した。

1928年(昭3)5月, 講師伊東金四郎が助教授に, さらに1938年(昭13)5月講師館石も同じく助教授となり, 1940年(昭15)8月, 助教授伊東の退職にともない, 1941年(昭16)2月講師角本が助教授となった。

飯塚内科の研究, 診療の場は前述のごとく糖尿病, 内分秘を主としたが, 結核(呼吸器), 癌(消化器), 血液疾患, 感染症など広く内科領域の全般を見ることに対しても常に配慮が失



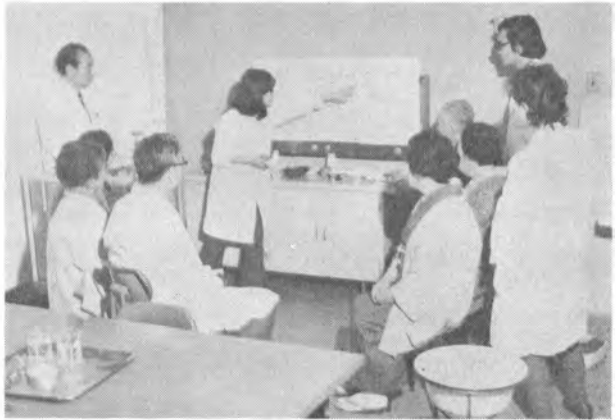
われなかった。研究面ではもちろんのこと、臨床面におよんでもアカデミックな精神が教室員の頭脳を支配する感覚であった。1949年(昭24)4月、飯塚は日本内科学会会頭として第46回総会を主宰した。

こえて1950年(昭25)5月、飯塚は定年退職し、助教授館石が部長代理となった。1951年(昭26)8月館石は教授に就任。1958年(昭33)5月、東北での学会からの帰途不幸急死するまでの比較的短期間ではあったが、館石のもとで引きつづき糖尿病、呼吸器、血液疾患などの研究が行なわれた。ことに糖尿病は当時の流れにのって諸内分泌腺との関連に主たる視点がおかれ、老人性糖尿病という呼称は一次性糖尿病を独立した疾患として見る傾向を作ったといえる。

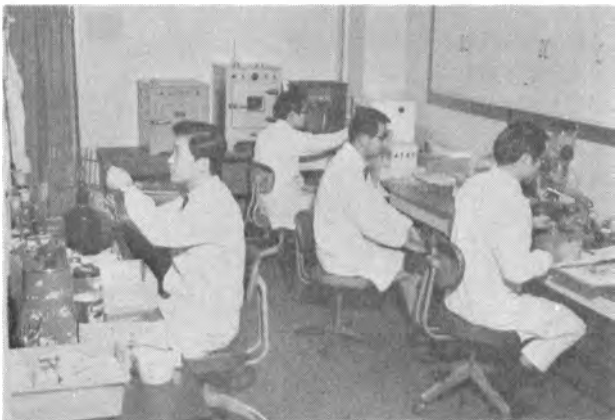
この間、1952年(昭27)3月助教授角本は教授就任と同時に退職、同年5月講師森宗が助教授となり、1954年(昭29)5月退職。同年11月講師吉田が助教授となり、1958年(昭33)5月館石の死亡により部長代理となった。

1960年(昭35)4月、吉田は教授に就任し、弓削学長、岩下病院長の提唱で教授会の決定を経て、1961年(昭36)4月現在の診療棟完成と共に3つの内科がディビジョン制を分担し、第1内科(一般内科、内分泌科、老人病科)、第2内科(一般内科、循環器科、呼吸器科)、第3内科(一般内科、胃腸科、血液科)が各( )内の診療科を標榜することになった。“一般内科”が各内科に残されたのは分科と総合を常に考えるという理念によるものである。しかしディビジョンでの増員と設備の増加は履行されなかった。

このうち、老人病科は社会状況を省みて、その最小要求をみたそうとして吉田が取り入れることを主張したもので、以後、脂質代謝



第1内科第1診察場(糖尿病外来食餌指導風景)(1972)



第1内科教室 研究室(1972)

を含む動脈硬化症の研究は教室の大きな研究目標の一つとなり、高血圧クリニックの開設は、内分泌科における糖尿病クリニック、甲状腺クリニックとともに、特殊外来としての役割をはたすことになったのである。大学における老人病クリニックの開設は全国的に最も早く、東大老年医学教室の開設とほぼ時を同じくし、京大老年医学教室の開設にはるかに先んじたものである。

1964年(昭39)2月、横尾助手は助教授となったが、1969年(昭44)9月、米国留学のまま退職した。

1969年(昭44)本学も全国的な大学紛争の渦中にまきこまれ、その収拾とともに多数の退職者をだした。1970年(昭45)4月、講師竹下が助教授になった。

吉田は糖尿病の研究の中でも、その本態の解明に最も力を注ぎ、インスリンをめぐる問題に集中した。すなわち各種測定法を検討、活用し、糖尿病患者におけるインスリン活性およびその分泌抑制、血管変化、治療による改善などについての多くの研究発表と著書をあらわした。

飯塚、館石、吉田の内科を通じ、入院患者は40~90名、60名台を普通とした。吉田の時期には時に130名に達したことがある。入院患者の病類別では糖尿病患者が圧倒して多かったのは無理のないところで、時勢に従い、結核病舎は縮小され急性伝染病舎利用率は漸減した。

糖尿病クリニックは患者実数1,600名を越え、毎水曜日の糖尿病クリニックは50~130名を数える。また、国際内分泌学会は第1回(Copenhagen)、第2回(London)、第3回(Mexico City)は吉田が出席し、第4回(Washington)は講師青地が出席した。また第5回国際内科学会(Basel)と第5回国際糖尿病学会(Toronto)には吉田が出席した。また第3回アジア大洋州内分泌学会(Manila)には助教授横尾、講師奥村が出席した。

#### 文献資料

飯塚内科教室論文集 1~7巻

飯塚教授開講10周年研究業績

飯塚教授定年記念教室研究業績一覧

館石内科教室論文集 1~2巻

館石教授開講5周年記念教室研究業績一覧

(文責 吉田秀雄)

## 第2内科学教室

波乱多く決して平坦でなかった本学100年のあゆみにおいて、その根底に脈々と流れるものは愛学心を基盤とした先輩諸家のご努力・団結・決断であり、その集約としてこの歴史がつづられたことを考えると、大学関係者の現在の姿勢が今後の本学の動向を左右する最大の要因であることも当然であろう。現在ならびに将来、本学の当面する多くの課題に襟を正して対処すべきことがこの歴史から教えられる。この教えは100年間にわたる本学の歴史を通じての先輩の雄叫として傾聴すべきであろう。

社会情勢の動向は近代とみに多様化しつつ流動することは多くの識者により予測され、指摘されているが、社会の中における大学でも、その動向を先見し模索しながらの対応は、明日の本学の姿に大きく影響するであろう。

今後の本学の歩みへの一つのよすがとして、八十年史との重複を出来るだけさけつつ、限られた紙面ではあるが、この100年間の歩みの概略について教室を中心として記したい。

本学の沿革変遷は八十年史に詳細に記されているが、内科教室としてのまとめがないので、これにもとづいた一応の総括と、中心を最近の20年間において記述をすすめる。

木屋町仮療病院をへて、栗田口(青蓮院)仮療病院に本学の前身が呱呱の声をあげ、その後、京都府医学校1879年(明12)が設立されたが、この間、先覚者の苦労は多大のものであったことが偲ばれ、思えばローマは一日にして成らずの感が深い。1875年(明8)にみられる患者統計では、分類別はなかつたが内科系の疾患が多数をしめるが、“内科”という分科の文字が現われるのは第2代半井澄校長が内科部長に就任した記述が最初のものである。その後、斎藤仙也1882年(明15)、新宮涼亭1881年(明14)、佐藤廉1888年(明21)らが内科部長に就任し、ついで笠原光興1891年(明24)、平井毓太郎1894年(明27)が教諭に就任、その後、1896年(明29)、第1・第2内科部長にそれぞれ就任した。平井は「所謂脳膜炎」の本態について究明し、学士院賞を授与されたことで有名である。同博士は京都帝国大学医科大学の設立と同時に猪子止戈之助、笠原光興、加門桂太郎、浅山郁次郎教諭と共に辞職し、本校に大動揺をもたらしたことは銘記されるべきであろう。平井の辞任にともない教諭浅木直之助1899年(明32)が内科部長に任ぜられた。当時、島村俊一教諭は校長・病院長をかね、医学専門学校への昇格に努力をつくし本学の悲運多難時の校長としての名声はその銅像と共に本学関係者の謝恩の気



伝染病棟 (1910頃)

識高い教諭小川瑳五郎が第2内科部長となった。

1917年(大6), 公立学校職員令により教諭・助教諭は教授・助教授と改められ, 小川瑳五郎は校長および附属療病院長に就任した。その後, 教授尾中守三, 梅田信義の就任があった。当時, 熱望されていた大学昇格は1921年(大10年)10月に達成され, 小川瑳五郎が初代学長に就任した。

1923年(大12), 京都帝国大学教授浅山忠愛が内科第2部長に就任した。小川瑳五郎は本学発展のため多大の力を尽したが, 1926年(大15)後事を他に托して去り, かわって教授浅山忠愛が学長・附属医院長・内科第1部長に任ぜられ, 京都帝国大学助教授塚塚直彦が教授に任ぜられ内科第2部長となった。

1943年(昭18), 浅山は定年退職し, 助教授細田孟がそのあとをついで教授となり, 内科第2部長となり, 第2内科部長塚塚直彦が第1内科部長となった。細田は附属病院長として活躍したが, 1959年(昭34)停年退職し, 後任に助教授丸本晋が教授の職をつぎ附属病院長を兼職のあと, 学長代行として多難な大学紛争を收拾したが, 1972年(昭47)停年退職した。

プロジェクトの変遷: 浅山内科から細田内科の中期にいたる間は主として生化学的手法を用いた腎疾患時の病態生理学的研究が行われ, 細田内科の中期からは腎疾患時の代謝, 特に蛋白代謝についての研究に重点がおかれ, 当時, 本邦に数台しかなかった Tiselius の電気泳動装置を用いて血清ならびに組織蛋白についての多くの業績が発表された。ひきつづく丸本内科では, この蛋白代謝の研究は Macroglobulin 血症の追究につながったが, 研究領域は拡大され, 循環器(心, 腎), 呼吸器, 内分泌(甲状腺, 下垂体, 副腎), 神経系, 血液(白血病, 免疫), 癌, 代謝と多方面に及んだ。

1968年(昭43)春, 東大医学部に端を発した大学紛争は全国に波及し, 本学でも臨床学舎の建築問題を契機として紛争に突入した。1969年(昭44)2月の学生の教授会への乱入, 大衆団

持をこめて長く残されるであろう。その後, 工藤外三郎1900年(明33), 望月淳一1902年(明35)教諭が内科部長に就任した。

1903年(明36)専門学校令により京都府立医学専門学校と改称され, 教諭伏原寅男1908年(明41), 教諭端野令三1914年(大3)が就任。同年教諭工藤外三郎が校長, 附属療病院長兼内科第1部長となり, 学

交強要にはじまり同年3月以降、無給医のストライキとなり同時に大学内外の諸問題をめぐって教室内でも激しい論争がかわされる事態が続いた。その間、助手以上の教職員は助教授講師会ともども一致団結して当教室の診療と研究をまもり、同年7月丸本教授の学長代行就任後もこの姿勢を堅持した。9月授業再開、10月副手再登録と收拾への道が開けたとき、ほとんどの教室員は復帰し、速やかに一致して教室の機能を回復せしめたのである。一時大学の存亡を真剣に憂いた事態も丸本学長代行ら執行部の英断により收拾されたことは特筆に値する。流動する社会の中における大学のあり方は、この紛争を1つの教訓として改善すべきことの多い現実には直視すべきで、大学関係者の肝に銘ずべきことの1つであろう。

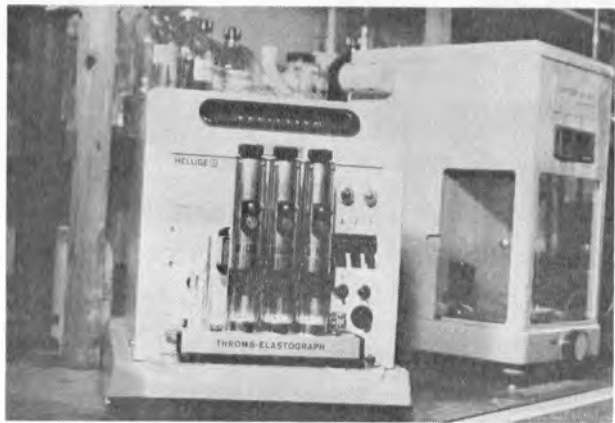
戦後間もなく設置されたインターン制度は1968年(昭43)に廃止され、研修医制度がしかれたことは戦後の医育制度の一大変化であった。本学では1969年(昭44)副手を廃止し、修練医制度を導入し無給医の解消に努力したが、収容人員が制限されている現状である。

有為の人材を多く保有し医学界に貢献するとともに、他方医療面においては関連病院の発展に協力しつつ、臨床医養成の任をもつ大学の立場においては今一段の改善が望まれる。例えば当教室では希望者の約半数が入局できないという実状である。

丸本学長代行、谷院長代行のもとに実施された医療センター構想も現在与謝の海病院においてその一端が実現されているが、府当局の英断とともに本学関係者の協力のもとに今後の卒後臨床教育、医療のモデルとしての展開を期待したい。

前述のごとく諸般の事情から本学附属病院の閉鎖病棟の再開は困難である公算が大きいが、100名の学生教育ならびに卒後教育に現在の保有ベット数では不十分で、視野の広い内科医の養成には関連病院での修練も活用すべきであろう。目下教室より関連病院に修練を依頼しているが、臨床経験の内容向上に有効と考えられる。大学と関連病院の協調はたとえ困難があっても今後ますます密にされるべきであろう。すなわち大学の臨床教室は臨床教育、基礎

的研究を含めた臨床研究の展開に主力をそそぐべきで、近い将来における本学附属の特殊研究施設の設置が熱望される。他方関連病院では卒後臨床教育に重点をおき、両者の緊密な協力は本学の発展に不可欠の条件である。その最大の理由の1つは、今後臨床面、研究面に導入される設備・器具は高価のものが多く、医療制度がたとえ



第2内科学教室 トロンボエラストグラフ (1972)

改善されても、両者のいずれもその完備は不可能で、その分担的役割をそれぞれが担い、医師および患者の交流を円滑に行なうことにより時代に即応した教育ならびに医療の実をあげ得るのではあるまいか。これは言うは易く行なうは難しであろうが、本学関係者は自ら意識改革を行ない、大乗的な見地からセクショナリズムを棄てて、協調精神をもって団結し時代に即応した教育・研究・診療に各自の役割を情熱をこめて果たす決心をすることが本学100年の創立記念として最大のものであると信ずる。もしこれらが不成功に終わるならば本学100年以後の歴史は低迷時代として後輩により記述されるであろう。（文責 伊地知浜夫）

### 第3内科学教室

京都帝国大学で医化学を専攻していた助教授吉川順治が、京都府立医学専門学校の教諭に任命され、医化学講座を担当したのは1915年(大4)5月のことである。このときすでに将来、新しい内科学教室設立の腹案をいだいた吉川は、1917年(大6)3月、京都帝国大学で消化器



内科・胃腸科受付(1920)

方面の権威であった中西亀太郎教授のもとに、2カ年間の留学を命ぜられ、内科医としての研鑽をつんだ。1919年(大8)4月28日、京都帝国大学の留学から帰校した吉川は、胃腸科部長を命ぜられ、もっぱら消化器病患者の診療に従事することとなった。同時に本学に胃腸病学講座が開設され、ここに第三内科学教室の礎石としての胃

腸科学教室が生まれたのである。思うに吉川が自ら学んだ医化学にもられた基礎的知識を臨床面へ導入し、便潜血反応、胃液酸度、肝機能などの臨床生化学的診断法をとり入れた新しい内科学としての消化器病学の講座は、当時の本邦では、類をみないユニークな存在であり、内科の専門分科制度の嚆矢として先端を行くものであった。このとき医化学教室より、助手川井銀之助をはじめ、胃腸科学教室へ移るものが多かった。吉川とともに医化学出身の医員を擁した新設教室は、胃・十二指腸液や、膵酵素活性など、生化学的な方面を中心として臨

床、研究両方面に活躍し、1923年(大12)1月、助手川井は、京都府立医学専門学校の助教授に任ぜられた。1921年(大10)10月19日、大学令による京都府立医科大学の設立にともない、吉川は1923年(大12)3月、同大学教授に任命され、医専教授を兼任のまま、附属病院胃腸科部長を兼ねることとなった。そして翌月から朝香の宮に随行して欧米各国へ出張視察を命ぜられ、同年10月帰学した。この不在中、医専助教授川井銀之助は部長代理として、その留守をまもり、吉川の帰学後、同年12月、正式に胃腸科副部長を命ぜられた。このとき、東北大学助教授であった後藤基幸が、京都府立医科大学教授として医化学講座を担当するため赴任した。後藤は京都帝国大学医化学教室において荒木寅三郎の門下として、吉川と同門の先輩、すなわち兄弟子であり、この後も胃腸科学教室と医化学教室との緊密な関係が続いた。

医専助教授川井銀之助は、1924年(大13)9月、京都府立医科大学講師を嘱託され、1926年(大15)7月、助教授に任ぜられた。このような変遷の中で、吉川とともに作りあげた近代的胃腸科学の基礎は、ようやく芽ばえてきたのであるが、1928年(昭3)7月突如として襲った吉川の急逝は、永く胃腸科教室を苦難の道におとし入れた。吉川の死去後、8カ月にして川井はようやく胃腸科部長代理を命ぜられ、さらに1933年(昭8)3月、4年後にはじめて部長代理から胃腸科部長に任命されている。しかも川井が京都府立医科大学教授に任命され、胃腸科学を担当して独立したのは、戦後1948年(昭23)1月、すなわち吉川の死後、実に20年間の長きにわたる苦斗の時代がつづいた。この間川井は、講師乾義太郎の協力をえて、1932年(昭7)には「胃内凝乳機転に関する主酵素について」、1933年(昭8)には「糞便潜血反応の診断学的価値」、1938年(昭13)には「我領域の独逸医学」、1940年(昭15)には「胃潰瘍の癌変性」、「臨床と実地より観たる代用食と外米食」、1946年(昭21)には「蛔虫の臨床」などの特別講演を消化機病学会、本学学術集談会で発表している。1936年(昭11)頃考案した川井式酸度計や潜血反応試薬は、その簡便さと実用性においてすぐれた特徴をもち、今日なお日常の臨床に役立っている。また川井は、1936年(昭11)12月より欧米各国へ出張を命ぜられ、1938年(昭13)4月に帰国した。この間、BerlinのHorst-Wessel病院においてProf. H. Kalkの指導の下に「Zuckergussdarm」の研究により、Ausserordentlicher Arzt der Klinikの称号をうけている。いずれにせよ20年間の長きにわたり、主任教授不在で、教室管理権、学位審査権などの権限を失った逆境のなかで、堂々と築きあげられた消化器病学の診療と研究の成果は、ひとえに川井をはじめ当時の医局員のなみなみならぬ努力によることを銘記しなければならないであろう。

1946年(昭21)4月、講師に昇任した増田正典は、1948年(昭23)1月、川井の教授就任と同時に、胃腸科副部長を命ぜられ、名実ともに消化器病を専門とする胃腸科学教室の片腕として、敏腕をふるうこととなる。

消化器病を専門にする科にありながら、この方面のみの研究にあきたらなかった増田は、胃腸科学診療のかたわら、本学病理学教室角田隆教授および京都大学天野重安教授の指導をえて、もっぱら研究の分野を血液学の方向にすすめた。このことは第3内科学教室が単に消化器病学の分野にとどまらず、将来一般内科として広い範囲の診療、研究内容をもつに至る原点がここにあると思われるからである。すなわち1951年(昭26)6月には胃腸科学教室は内科学教室と改められたが、診療科名は従来通り胃腸科であった。しかし1957年(昭32)7月、川井が停年退職し、増田が胃腸科部長代理を命ぜられた頃には、消化器病学のみならず血液学、遺伝学においても学会の注目をあつめていた。ちなみに増田は1951年(昭26)9月、日本血液学会において宿題報告「家族性脾腫について」、1957年(昭32)5月、日本人類遺伝学会においてシンポジウム「脾腫の一家族における遺伝生化学的研究」を発表している。

1958年(昭33)1月、増田は教授に任命され、あわせて胃腸科部長を命ぜられた。このとき糖尿病と肝臓学を専攻していた講師葛谷覚元が助教授に、寄生虫学に造詣の深い助手横田穰が講師に就任した。このような人員で出発した教室はかねてからの懸案である胃腸科という小さい殻から脱皮し、広く内科学を学ぶ教室でありたいという念願がかなって、開講2年目にして、1960年(昭35)6月、診療科名胃腸科を“第3”内科と改称した。

増田は1955年(昭30)9月、助教授時代に1カ年間、消化器および血液の腫瘍に関する研究のため、米国 Texas 大学 Anderson 腫瘍研究所に留学した。この頃から、診療、研究ともに広く国際的な視野で臨むべきであるとの見解から、多くの門下を国外に派遣し研究の分野をひろげた。また胃腸科時代からウイークポイントと考えられた循環器、臨床神経、免疫学方面へは積極的に内地留学者を派遣して診療、研究の充実をはかった。自らは1958年(昭33) Washington, D. C. における世界国際消化器病学会をふりだしに、1960年(昭35) Lyden での国際消化器病学会、London での国際肝臓学会、1962年(昭37) Mi inchen での世界消化器病学会、ルーバンでの国際肝臓学会、Mexico City での国際血液学会、Moskow での国際癌学会、1964年(昭39) Brussel での国際消化器病学会、パンジャップのアジア太平洋消化器病学会、1965年(昭40)には Lyons の国際肝臓学会、1966年(昭41)には、東京における3つの国際学会などに出席し、国際的レベルでの討論に参加した。また国内にあっては、日本内科学会、日本消化器病学会、日本血液学会、日本肝臓病学会、日本臨床代謝学会、日本癌治療学会、日本癌学会、日本人類遺伝学会をはじめ多数の学会の評議員または理事を委嘱され、国内における京都府立医科大学第3内科学教室の存在を確固たるものにした。

1966年(昭41)1月、講師横田の退職により、血液遺伝学を専攻していた助手藤木典生が講師に任ぜられた。かくして1968年(昭43)1月、増田教授開講10周年を迎えますます発展の途をたどることになる。このとき入院患者ベット数は90~100床、開講以来の教室刊行論文中、



単行本17, 国際学会刊行論文20, 邦文刊行論文550, 口演論文中シンポジウム, パネルをあわせて102, 国際学会発表37, 学会及び研究会発表701におよんでいる。1967年(昭42)7月, 増田は附属病院長に任ぜられ, このとき短期間ではあるが, 吉村学長が病気で倒れた間の学内業務を総括した。

1968~9年(昭43~44)の2年間は大学学園紛争により, 一時, 診療, 教育, 研究面での停滞をみたが, 1970年(昭45)以後, 再び従来の活気をとにかえし, 年々80~100に及ぶ刊行論文, 20のシンポジウム, パネル, 100~120の研究発表が, 胃内視鏡, 肝臓, 膵, 消化吸収, 糖尿病, 血液, 免疫, 癌, 電頭, 鉄代謝, 遺伝, 循環器, 臨床神経など広い分野で発表されている。

1970年(昭45)4月, 藤木の退職により, 血液学と肝臓学を専攻している助手滝野辰郎が講師に就任した。翌1971年, 助教授葛谷の退職により, 滝野は助教授に, またその後任には, 膵臓学と消化吸収方面を専門とする助手細田四郎が講師に就任した。また同年5月, 与謝の海医療センターの講師として, 英国から帰国した辻俊三と血液遺伝学を専攻している細川計明助手がそれぞれ講師に就任し, 現在に至っている。

なお, 停年退職した川井は, 1957年(昭32)8月, 京都府立医科大学名誉教授の称号を授与され, 1966年(昭41)10月, 病で倒れるまで, 健保鞍馬口病院胃腸科部長として第一線の診療に従事した。また葛谷は津市民病院院長として, 横田は藤沢薬品開発部長として, 藤木は愛知県立心身障害者コロニー遺伝学部部長としてそれぞれ活躍している。

#### 資料

1. 定年退職記念川井銀之助教授業績目録, 京都府立医科大学胃腸科学教室, 1958年(昭33)12月
2. 増田正典教授, 開講10周年記念教室研究業績目録集, 京都府立医科大学第3内科学教室, 1968年(昭43)4月

(文責 滝野辰郎)

## 第1外科学教室

草昧の時代, 療病院の中で患者の外科的な診療が行なわれていたことは, うなずけるとしても, 独立した外科教室としての体裁は, 1882年(明15)5月, 医学士猪子止戈之助が一等教諭に任ぜられ, 療病院学校にて外科学を担当し, 療病院外科部長を命ぜられたのにはじまる。1899年(明32)7月になると, 1887年(明20)以後, 本校校長を兼務していた猪子は他の多くの

教諭とともに新設の京都医科大学(後の京都帝国大学)へ転任し、助教諭松山為雄が教諭に任ぜられた。1902年(明35)、松山もまた辞職し、池田廉一郎(東大)が教諭となった。

1903年(明36)6月、専門学校令により、医学校は京都府立医学専門学校となり、医学校をその傘下におさめていた療病院は、逆にその附属療病院となって新しく形態をかえた。1911年(明44)5月、池田廉一郎は遠く新潟医専に転任し新しく京都帝国大学助教授であった副島豫四郎が教諭にむかえられた。1914年(大3)、副島は再び京都帝大助教授に復職して去り(後に小倉市記念病院を創設)、同年8月、医学博士河村叶一教諭が就任した。後の第1外科を主宰する河村は新しい外科学を導入するために、1918年(大7)4月から翌年6月まで欧米に留学したが、なかでも永くアメリカの Mayo Clinic にとどまって研鑽をつんだ。当時アメリカでは日本からの勤勉な移民労働者に対する偏見が強く、排日・移民拒否運動は日系人の一般にまで及んで、一時日本からの留学もほとんど途絶えるという険悪な世情にあったが、河村の真摯な態度は周辺をかこむ排日気分の緩和に役立ち、Mayo Clinic における日本からの後継者の留学が容易になったという。彼は Dr. Man の指導で、十二指腸切除という見事な成果をあげて帰朝し、その後も直腸癌・胆道系の、当時困難であった消化器系の外科に卓抜な技術を発揮した。また、一方では当時アメリカで勃興しつつあった脳外科を導入し、脳腫瘍手術例の数多くの業績がある。河村在外中の留守を守った助教授藤森舜吉(明41本学卒)は手術手技にすぐれ、のちに大阪鳥潟病院をへて大阪千日前、藤森病院を開設した。

1921年(大10)10月19日、医専は上下一体となった苦闘の末に京都府立医科大学に昇格、



外科学教室 同窓会雑誌第一号(1936)

1923年(大12)3月、医専教授河村叶一、同鈴木正次(京大)は京都府立医科大学教授に任ぜられ、それぞれ第1・第2外科部長となって、ここにはじめて外科学教室は2講座制の形態をととのえた。当時の助教授に第1外科・木村辰三(本学、後に松江県立病院外科医長)、第2外科・宇野鬼一郎(本学、後に愛媛県立今治病院長)がある。河村叶一は Mayo Clinic での理想の再現に燃え1927年(昭2)に職を辞し、京都市内の間之町御池に当時京都では唯一の鉄筋コンクリート建築・河村病院(後の第二日赤救急分院)を創設した。

河村叶一の後任として、望月成人(京大)が長崎医科大学から同年11月にむかえられた。当時の外科学教室は主宰者以外は変則的な交替性をとっていて、

第1外科望月,第2外科横田(京大)両教授の下に,臨床面で医員は毎年その所属をかえて,両教授から親しく指導を受ける習慣になっており,この制度は本学外科教室の誇るべき特徴で,第1外科教室に助教授・講師として来須正男(本学),今津九右衛門(本学),木口直二(本学)がいた。当時の外科教室は,外傷その他救急処置を要するものが多く,「万年当直」と称して十数名の少壮医員が日夜待機して臨床に研究にはげみ,活気にあふれた環境を温醸した。これが後年京都駅事件(通史参照)(軀幹圧迫症),室戸台風による関西風水害などの救助に際し,すさまじく敏速適切な教室の救助活動が発揮されたゆえんである。望月は在職26年余,門下生の教育指導に専念し,戦中戦後の困難な時期に病院長・学会協議会会員なども兼ね,広く本学ならびに学会発展のために尽し,1954年(昭29)2月,定年退職後も,困難をきわめた本学長を務めた。

望月の後を継いで,同年9月,峯勝外科講師(本学,元満州国佳木斯医科大学教授)が第1外科教授に就任した。その頃の日本の医学は,ようやく戦後の混迷期を脱して,なんとか欧米の水準に近づきつつあった時代で,他の学会と同じく外科学会にも専門化が行なわれ,これにしたがって峰の指導のもとで教室の活動も多方面におよんでいった。峰は研鑽うむところをしらず,このなかでも,低体温法の問題は,すでにたゆまざる実験的研究段階を経て盛んに臨床的応用にもちきたし,臨床上 risk の多い患者,食道癌,頭部外傷をはじめとする脳外科手術,心臓大血管外科などへ応用がなされていった。一方,戦後盛んに行なわれた肺結核外科の豊富な経験から開胸による肺癌,食道癌の手術を開拓し,放射線療法・化学療法と相まって,治療成績の著しい向上がみられた。また小児外科への一般の関心は1958年(昭33)の日本外科学会を契機として急速に高まり,新しく小児外科学会の誕生となり,峯教授,萩原徹助教授(本学)が学会発起人として名を連ね,教室でも困難な症例を容易に処置する多くの経験をもつようになった。脳外科方面では,精神科(花園分院)に小手術場を設営し, Parkinson 病に対する定位脳手術をてはじめに,脳腫瘍などの手術症例がふえ,昭和36年以後は,永くアメリカに留学した遠山講師(本学)を中心として,本格的な脳外科手術がその数を急速にふやしていった。しかし,何といても峯の中心課題は胃外科とくに胃癌の手術的治療であり,このために最大の努力が傾注され,多くの医局員をひきいて積極的な周囲リンパ節の拡大廓清術に情熱を傾け,よい治療成績を残した。

峯は研究・治療の場にあっては極めて厳格な師である反面,自然をこのうえなく愛し,短歌,絵画にも優れた才能を示し,ずばり「外科医の研究室は手術場である」という言葉を残して1967年(昭42)3月停年退職した。

1968年(昭43)5月,峯の後任には東北大学助教授間島進が選ばれた。間島はすでに消化器外科,とくに胃癌を中心とした実験的臨床的研究で本邦外科学会に重きをなしていた。1969

年(昭44)末には、助教授萩原徹、講師原田稔(本学)が退職、1970年(昭45)1月には、国立舞鶴病院外科医長であった大同礼次郎(本学)が帰室した。大学紛争後無給医が全廃され、現教室では、研修医・修練医制度がしかれ、教授・助教授・講師各1名、客員講師2名、助手6名、修練医8名、研修医8名、研究科学生5名、その他出張研修員15名から構成されている。現在は教授を中心とした潰瘍癌、発癌などの基礎的臨床的研究と、大同の食道外科や消化器外科手術の基礎的研究、遠山の脳神経外科のほか、小児外科などグループ化が営まれ、日夜その研鑽に邁進している。

第1外科教室としての研究のプロジェクトをかえりみると、望月外科における主要研究テーマの1つは輸血、輸液の問題で、特に木口によってなされた保存血輸血の研究は当時としては大変ユニークなものとして高く評価された。その後乾燥血液の研究に進み、その業績は1937年パリにおける第2回万国輸血学会で発表された。終戦後は銀行血液の問題で峯の指導による酸素飽和血輸血、酸素加保存血に関する研究がなされた。一方、来須正男は「脳血管の神経支配」に関する研究に始まり、交感神経の研究を経て「ショック」の研究に進み、当時第2外科にあった峯とともに1948年(昭23)第49回日本外科学会総会において「ショック」に関する宿題報告を担当し、終戦後しばらくは「ショック」の研究が主要なテーマであった。助教授来須正男は、その他に後腹膜腔の外科に関する一連の業績があり(「前腹壁切開膜外経路による腰椎椎カリエスの根治手術法」など)、こうした業績がみとめられて、後に整形外科教授に選ばれたが[1949年(昭24)],各臓器に於ける血流動態の研究はその後も続けられた。峯は、横田外科当時、胃運動、腹膜炎、門脈循環などの研究に打ち込み、第1外科教授に就任後は、低体温および薬物冬眠のショック予防効果に関する研究、低体温法の Poor Risk 患者への臨床的応用という一連の研究をした。脳神経外科領域において、実験的脳浮腫の研究が盛んになるにおよび、教室でも電動式硬膜外振動法が考案され、脳浮腫に関する一連の研究は、第16~19回日本脳神経外科学会で発表された。1961年(昭36)頃から、胃癌手術における根治性の基準が論議され、当教室でも胃癌手術成績の向上をめざして精力的な研究がなされ、胃全剝後の峯式代用胃・超亜胃全剝術・上胃成形術などがそれで、これには生理学的・病理学的基礎研究、胃癌手術後の栄養面、代謝面など多角的な研究がなされた。1964年(昭39)には、Wien 国際外科学会で峯は、噴門癌について多年の業績を総括発表した。また老人外科にも関心を示し、Risk 点数表による手術適応の基準設定の研究は学会で高く評価された。

教授間島は、就任以来、積年の潰瘍癌の発生、発癌過程の実験的臨床的研究や、乳癌のホルモン併用療法を基礎的に究明し、特に抗癌剤エマルジョンの局所注射は講師高橋(東北大)によって、新たに開発されつつある。助教授大同は頸部食道癌の腸管移植、進行中部食道癌

に対する by-pass 優先の二期分割手術の安全性を先がけて発表し、さらに胃全摘手術に対して、消化吸収面よりみて極めて合理的な“d”吻合法を考案し、またその下部食道切除への応用や、食道吻合時にリングを使用しての縫合不全防止は、学会で高く評価され、さらに消化器外科の基礎的な病態生理の究明に余念がない。講師遠山の脳神経外科グループでは、急性脳腫脹に関する脳循環動態の研究として、脳血管の自律神経支配の問題を手掛けている。萩原元助教授の開拓した小児外科は、山本助手により受け継がれ、本学小児科の熱心な協力のもとに順調に発展し、活発な学会発表を続けている。

#### 資料

教室の歴史に関連する刊行物の所在

1. 京都府立医科大学外科学教室 同窓会雑誌 創刊号 昭11.7 発行一(第1外科教室所蔵)
2. 萩原 徹：一ヶ月成人先生を偲んで一 青蓮会報 第5号 昭46.9.20 発行
3. 近畿外科学会第100回記念座談会 外科 29巻5号 505—514 昭42
4. 峯 勝：外科臨床領域に於ける最近の話題 京都医学雑誌 12巻3.4合併号 139—143 昭37
5. 峯勝教授定年退官記念業績集 京都府立医科大学第1外科教室 昭44.3
6. 河村叶一：論文別刷 本学図書館所蔵

(文責 遠山光郎)

## 第2外科学教室

第2外科学教室の初代教授は鈴木正次である。鈴木は1884年(明17)、千葉県成田に生まれ、独逸協会中学校、第一高等学校を経て、京都帝国大学医科大学に入学した。陸軍委託学生として学生生活を送り、卒業後、京大伊藤外科(第2外科)に籍をおき、各地の陸軍病院に軍医として勤務し、1916年(大5)学位をえた。陸軍軍医学校(現、国立東京第一病院)教官をへて、1921年(大10)9月京都府立医専外科2部教諭となり、同時に京都衛戍病院(現、国立京都病院)外科主任(三等軍医正)を兼務し、しばらくは週1回



外科学教室 大手術場 (1911)

ずつ陸軍病院にも通っていたが、1922年(大11)9月、本学専任教授となった(当時38歳)。

鈴木が着任した当時、本学の外科学教室は5代目の河村叶一教授の主宰下にあった。漸次増加しつつある患者を診療するため、医科大学に新生した本学に外科は2教室あることが望ましいという一般的趨勢によるものであった。

第2外科学教室創設当時の教室員の構成は河村外科よりまず講師として宇野鬼一郎をまねいた。彼は1917年(大6)に本学を卒業、1923年(大12)5月1日、本学ではじめて学位審査を受け、医学博士第1号となった人であり、1925年(大14)助教授となった(後に高松日赤病院長、さらに宇野病院を開設して院長となり、晩年これを愛媛県に寄付して県立今治病院となり今日に至る)。

また、助手として竹下加吉(後に福知山市にて開業、府会議員となった)が移籍し、のこりの助手2名には河村外科から交代制で手助けをうけていた。1922年(大11)新卒5名が入局。すなわち藤田登(後に横田外科助教授、神戸大学第1外科教授を経て現在神戸労災病院長)、岡田寛三(後に苗加寛三)、原唯一、岩島武次(後に京都第一日赤病院外科部長)である。さらに1923年(大12)、益本圭次、喜多文一郎、金森芳松らの新入局をみた。苗加はその後、台湾総督府医官となり、後に同地で病院長として活躍した。

1926年(大15)、宇野の高松日赤病院長転出に伴い講師藤田登(後に助教授)、講師岩島武次の構成で1928年(昭3)12月、横田教授を迎えることになった。

鈴木が教授となってから発表した論文は11編であり、虫垂切除術と胃癌に関するものが多い。なかには「手術室採光の合理化」といったものも含まれ、その内容は全て臨床関係である。教授はあくまでも臨床重点主義で、研究テーマも自分の臨床時における観察の中からえらび、問題点を動物実験で裏付けをしようとしたが、その多くは不成功に終わったという。したがって教室の業績集なるものは残されていない。

また鈴木は虫垂炎の早期手術、胃癌の治療、化膿創の治療に意を注ぎ、当時はまだ局麻の多いなかで、とくに腰麻の普及に努力し、手術対象を胃切除にまでひろげた。手術創の感染と手術手技(所要時間)ということが大きな問題であった当時であったから、教授は手術手技の熟達を強調したという。教室員に対してはきびしいというよりはむしろ自由に手術をやらせて温厚であったといわれる。ある日鈴木自身が虫垂炎に罹患したが、その際手術による疼痛がどのようなものであるかを自ら体験する目的で腰麻をあえて避け、自ら執刀し、講師藤田が第1助手をつとめているが、この結果、腸間膜の疼痛がとくに強く感じたと述べている。

1928年(昭3)当時の小川学長が兵庫県立病院(後に神戸医大)の院長として赴任するに際し請われて副院長兼外科部長として本学を去った。在任わずわか7年であった。本学を去るに当り、現職の教授が一般病院の外科部長として去るのには問題があるとの声があったそうで

ある。京都府のさる高官が兵庫県に転任し、その高官の招きで小川学長が兵庫県立病院院長に着任するに際し、小川学長のたつての懇請で鈴木教授は藤田登を伴って神戸に転じたという。これに対し次代の本学学長が兵庫県立病院を本学の関連病院とするため、あえて鈴木にその責を委託したのであると述べたという(岩島武次談)。彼は1934年(昭9)日赤京都支部病院(現、京都第一日赤病院)創設と同時に院長として着任1953年(昭28)死去するまで現職として活躍した。

次代の横田教授は、京都帝国大学鳥瀉外科の講師、助教授、長崎大学教授をへて、本学に着任した。学内にあっては、時あたかも病理学の角田らを中心とした教授陣の刷新運動1914年(大3)頃勃発がまさに当を得てその効果があがりはじめた時期であり、学外にあっては大阪府立、愛知県立、熊本県立、慶応、慈恵および本学の各医専が相次いで医大に昇格した直後のこと、文字通り日の出の勢であった。したがって、この時期は教室として発展せんとするいわゆる少年期でもあった。

横田の思考は極めて緻密であり、しかも精力的、手術手技も巧みで、新任の教授はどんな手術をするのかと、多勢の医局員がとりまいて見学したという。この時期の教室の研究の足跡を知るため、本学図書館にある業績集(I~IV)をひらくと、その研究領域の広さと、これをささえた有能かつ新進気鋭の教員数の多いことにおどろかされる。教授自身の執筆になる35編をはじめ教室の論文は1950年(昭25)1月までに計351編に及び、顔面、脳神経外科からはじまり、性器や骨系統に及ぶといった実情である。これらの分野のうちとくに腹部内臓の病態生理の解明を教室のテーマとしている。系統的な研究の成果は漸次報告され、ついに学会に横田外科の名をとどろかせた。すなわち腸管運動の検討にはじまった研究は流血の偏在性という結論に達した。門脈系こそ“第2の心臓”であるという主張である。これらの成果は、日本外科学会で宿題報告として発表され[1933年(昭8)]、また日本学術会議編纂医学綜報にも掲載された[1949年(昭24)]。

横田は教員を殊のほか慈愛深く指導し、門下生もまた満腔の敬意を表していた。したがって門下から多数の人材が輩出した。すなわち、本学に整形外科教室を創設した来須正男、第2外科学教室の教授となってあとを襲った河村謙二、本学第1外科学教室に転じ望月教授のあとを受け継いだ峯勝、大阪体育大学の忠田喜一教授、神戸大学藤田外科の窪田秀雄助教授らのほか、公的医療機関にあっては京都第二赤十字病院の宇山理雄院長、同松繁重副院長、並川力大津日赤病院外科部長、藤田貞彦国立神戸療養所所長、佐谷秀雄京都市交通局病院副院長(現第二日赤病院外科部長)、岡江久義陸軍軍医大佐、故倉護公立南丹病院院長、和田哲爾同副院長、美馬陽鞍馬口病院院長、小林与次郎済生会京都病院副院長などがある。一方開業して全国各地で重鎮となった人も極めて多く、桜井雅四郎(兵庫県)、町田昌直(高知

県), 中島英一郎(京都市), 今津九右衛門(京都市), 迫間忠義(山口県), 川島四十三(岐阜県), 須藤健二(高知県), 相原軍一(兵庫県), 藤田一雄(京都市), 藤井俊治(広島県), 等々, まことに多士齊々である。

横田は1952年(昭27)在職中に突然病に伏し, 約6ヵ月間自宅療養の甲斐なく死去した。

この時期にあたり, とくに前半において忘れてはならないのは京大関による外科学教室の人事支配である。京大外科学教室発行になる日本外科宝函第7巻は猪子, 伊藤両教授の還暦記念号として付録を発行(1930年・昭5)したが, その中に「京都帝国医科大学が創立される当時に於て現在の京都府大療病院をもその管掌のもとに属せしめ, 云々……」と記されるに及び, 本学の内外に不満の聲があがったのは当然である。この件について本学外科医局員一同は1931年(昭6)1月31日夜, 丸山公園「井雪」に医局会を開き善後策を協議したが, 結局は黙殺することになったと, 京都府立医科大学新聞(第30号, 昭和6年2月2日)は報じている。時勢ののって華やかに展開された外科学教室の研究の裏面では当時のわれわれの先輩が研究組織の底辺で悪戦苦闘した一面がうがわれる。

横田のあとをついだ河村謙二は1929年(昭4)本学を卒業と同時に着任早々の2代目横田教授の門をたたき, 師事すること25有余年, 助手, 講師, 助教授を経て1954年(昭29)5月, 推されて第2外科学教室の教授となった。

河村は骨移植に殊のほか興味をもち, 脊椎カリエスに対する肋骨片移植固定術など, 独自の術式を案出した。参考までに横田外科業績集(IV)をひらけば, 収録されている論文128編のうち, 彼の著になるもの25編におよび, そのほとんどが骨組織に関するものである。これらの研究はさらに長年にわたりつづけられ, 後には骨銀行設立にまで発展した。胸部外科にも関心の深かった河村は多くの国立療養所との関係をもち, 肺結核の外科治療に貢献したほか, 大量輸血の基礎研究を行ない, 心臓外科への道を開いた。しかし何といても河村のライフワークは臓器移植の研究であった。骨移植にはじまる臓器移植の研究は, 身体各臓器について検討がなされたが, そのうちとくに腎移植の臨床では多大の成果をあげ, 自らは日本移植学会の設立に東奔西走し, 推されて初代会長となり, 本学第2外科教室に日本移植学会事務局を設けた。さらに後には国際移植学会の理事となり, 日本を代表して再々国際会議に出席した。在任わずか12年と, 比較的短いにもかかわらず河村自らの筆になる著書は10余冊, 教室の刊行論文は430余編におよび, 2倍の期間教室を主宰した教授横田のそれをはるかに凌駕する。学会発表, 講演, 放送などは全く枚挙にいとまないといいよい。これらの全ては河村外科学教室業績集(I~V)として教室に収納されている。

河村の門下より82名の医学博士が送り出された。人脈をたどれば, 名古屋市立大学の青地修教授, 同後藤幸生助教授, 本学麻酔科の藤田俊夫助教授, 京都第一日赤病院外科の安住修



三部長，明石市民病院の久保田修副院長，鞍馬口病院の溝淵浩外科部長などのほか，ながく助教授をつとめた北川司郎博士，助教授の後府立与謝の海病院院長に転じた東平介，講師から同病院長のあとをついだ岩佐裕などがあげられる。在職中，教授河村は本学に中央手術場制を導入したほか，青地，藤田をして本学に麻酔学教室の創設にあたらせ，また自ら教授兼任のまま神戸健保病院院長を勤め，施設の再建に意を注ぐなど，社会活動における行動半径にも幅広いものがあった。名誉教授となってからは愛媛県立今治病院長（1967年7月～1969年5月）をつとめた。その後一時下鴨の自宅で老後を養っていたが，とくに乞われて兵庫県明石市民病院院長となり，現職のまま脳出血で世を去った〔1971年(昭46)5月30日〕。

現在の橋本勇教授は第2外科の4代目にあたる。昇任が1967年(昭42)10月1日であるから，本学開校100周年と同時にちょうど開講5周年になる。橋本自身の専門は心臓外科であるが，教室はさらに消化器班，移植班の2班を加え，さらに内分泌外科(甲状腺，乳腺など)にも精進し，日夜多忙を極めている。心臓外科の研究は河村外科時代に教授自身が班長となって始めたものである。手術例数も800例に達した。最近では講師渡部を中心とする乳児期開心術，講師原を中心とする人工弁置換術の手術成績の向上に意を注いでいる。また講師中路を中心とする血管外科の発表も見逃すわけにはいかない。臓器移植の研究は先代の河村に引続きますます発展を遂げているが，最近では講師中根およびアメリカから帰った講師岡のグループによって本格的な腎移植の基礎的研究がすすめられるとともに，臨床例はすでに25例に達し，本邦第1位を誇っている。

消化器外科はその歴史も最も古く，遠く横田外科の時代にさかのぼる。現在臨床の対象は食道から直腸に及ぶが，助教授篠田を長とする胃癌，講師小玉を中心とする食道などがその特色としてあげられる。中でも小玉を中心とするガストリンおよび癌免疫の研究はひときわ業績をあげ，文部省科学研究費の援助をうけている。

橋本は河村教授時代からの教室員と研究テーマをうけつぎ，発展させながら，さらに Shock の研究など，癌免疫，移植拒否反応の本態などの分野で新しい構想の下に研究をはじめたが，大学紛争，教室員数の制限などで思うように研究がはかどらない悩みがあった。しかし最近では橋本が念願とした教室の研究器材も不十分とはいえ



第2外科学教室 第1研究室 (1972)

整備され研究もようやく軌道に乗り、今後の発展が期待される。また、橋本は着任早々卒業教育の重要性の認識からいわゆる関連病院をも含めての医師の教育を計画し、その構想のもとに関連病院の整備発展を推進した。たとえば、国立神戸療養所の新田俊男医務課長を兼任講師に委託して肺外科の教育を担当せしめ、京都第一赤十字病院および国立豊橋療養所に信岡亘、福井純の両講師を配して心臓外科を開発し、はやくもそれぞれ手術例も百数十例となる実績をあげている。このほか研修病院として京都鉄道病院に金田、鳴門健保病院に柳田、大阪鉄道病院に中本および本山、鞍馬口病院に宮田、近江八幡市民病院に藤沢、明石市民病院に黒岩、公立南丹病院に筒井といった新進気鋭の外科医長をあて、また本学医療センターの出発となった府立与謝の海病院には現職の岡講師を伴って自ら院長を兼務し地域医療への大学の推進をはかるなど、スケールも一段と広いものになった。橋本は早くも1970年(昭45)に第8回日本人工臓器学会の会長をつとめたほか、日本外科学会の「学会のあり方委員会」のメンバーとしても斯界の将来のため努力をしている。とくに本学の将来については公立医科大学の特色ある発表についてなみなみならぬ見識を持ち、これを推進している。

(文責 原 智次)

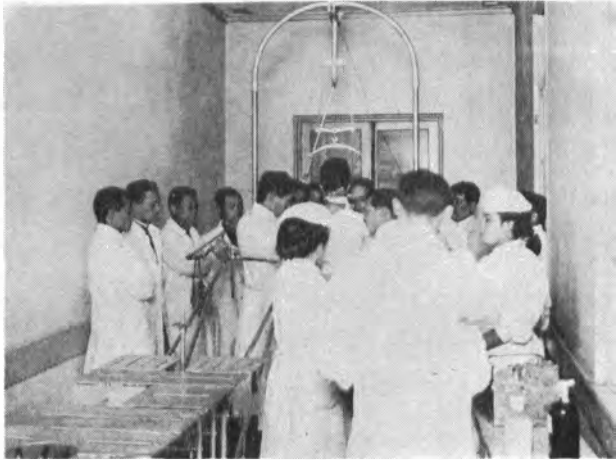
## 整形外科学教室

日本の大学において整形外科学を独立講座としたのは東京帝国大学が嚆矢であって1906年(明39)のことであり、その後1907年(明40)には京都帝国大学、次いで1908年(明41)、九州帝国大学に整形外科学教室が開設された。ついで大正時代に移り新潟医専、慈恵会医専などにも新設され、戦前にはこの他東北大、慶大、日本医大、昭和医専、久留米医専、岩手医専などに整形外科があって、その頃においてすら、本学における整形外科学教室は独立するような動きがほとんどないまま一般外科に含まれた状態で太平洋戦争が終わった。

第二次大戦後、文部省の方針で設置が必須とされ、本学においても整形外科学教室の独立開設の必要を生じ1948年(昭23)1月に当時第2外科学教室所属の助教授来須正男が選任され、整形外科学の創設が行なわれた。当時、終戦直後の窮乏時代にあり、物資不足のため開設は困難をきわめ、1年間の準備期間をへて、正式には1949年(昭24)8月に初めてその開設を見た。当時の資材不足は筆紙に尽し難く、府当局からの援助費も極めて少なく、教授来須の努力は大変な事業であったことと思われる。当時の1～2号病棟(現在の職員駐車場付近にあ

った)を教室として改造するにあたって、立命館大学講師であった島崎栄次氏から資材、材木などの寄付をうけた。

1949年(昭24)開設当初の教室は、教授以下6名で1936年(昭11)本学卒の保田岩夫(現京都第二日赤整形外科部長)、1942年(昭17)卒の藤田政孝(現在、山科愛生会病院院長)、1941年(昭16)卒の加登豊(1971年、昭46春死去)、1945年(昭20)



整形外科治療室 (1920)

卒の永山寿の4名の助手、大阪医大卒の大塚義彦、岸上清、両副手の6名であった。開設当時は、教授来須が1949年(昭24)4月の「日本外科学会」の宿題報告「ショックの問題」を担当したこともあって、整形外科とはいえ、一般外科的な分野に立ち入った過渡期であった。

その後、1950年(昭25)1月には講師保田岩夫が助教授に1950年(昭25)3月には藤田政孝が講師に就任し、教室としての陣容は固められていった。教室の研究は、主として頸動脈球および血流に関する研究をはじめ、まことに広汎であるが、根底には一般外科的なものが多かった。1953年(昭28)3月までの卒後教育のために6月毎に第1外科、第2外科、整形外科の3教室を交代勤務することになっていたために、外科的色彩が強く残っていた。この3教室交代勤務制は、卒後教育のためにはあるいは寄与するということもあつたかのようにみえたが、かえって整形外科の独立性を遅らせたのもやむをえなかった。しかし来須の業績のうちで現在なお、わが整形外科教室が誇りとしうるものは脊椎カリエスに対する根治的前方直達侵襲法を1932年(昭7)に全国に先がけて行なったことである。本法は40年後の今日においても、現在の整形外科医の支持する方法であり、来須の外科的なすぐれたアイデアとして、絶賛をほくした。

第2代の諸富武文教授(日医大卒)は、故神中九大教授のもとに師事した、生粋の整形外科医であり、1952年(昭27)以来、弘前大学教授であったのを辞して、1958年(昭33)本学整形外外科教室に赴任した。学問的に多面にわたる業績と、政治的な才をもち、大学にとって極めて有能な数少ない教授の一人である。諸富は整形外科学の重要性をといてエネルギーに整形外科学教室の教室造りに専念した。1960年(昭35)3月20日、保田岩夫は一日教授となって退職、1960年(昭35)5月1日、藤田政孝は助教授に就任、1961年(昭36)4月、勝又星郎は講師になり1962年(昭37)3月には、藤田政孝も京都第一日赤永院長の懇望も辞し難く、部長

として栄転、ついで助教授勝又星郎、講師岡田正三のもとに、諸富教授の下に入局するものは次第にふえていった。

諸富は弘前時代から手がけてきた植皮術や筋膜性腰痛症に関連した腰痛に関する研究に努力するとともに、交通事故の激増に伴う交通災害を重要視して、開放性骨折をとりあげ、化膿骨傷の病態生理を徹底的にその基礎から究めて、開放骨折、骨髄炎の今日の一步進んだ治療体系の一環をつくりあげた。これらは1963年(昭38)医学会総会(大阪)においてシンポジウムを担当したのをはじめ、毎年、整形外科学会の注目をあび、今日、日本で行なわれている開放性骨折治療の1つの基準をつくりあげた。

勝又は、難治な脳性小児麻痺を自らのライフワークとして取りあげ、脳定位手術の開発研究をおこない臨床に応用してその成果を、1965年(昭40)日本整形外科学会総会シンポジウム(長崎)において発表した。諸富の研究意欲は骨折のみにとどまらず、ついで外傷時に伴う神経損傷の研究に及び、末梢神経麻痺の保存的療法については、電気生理学的に教室独自の新しい治療法の体系をつくりあげ、全国に先がけて Cytochrome C の有用性を説き、さらに、切断された末梢神経麻痺についても全く新しい縫合法を考案し、国内のみならず、第15回国際外科学会 (Mexico) において発表し、世界の注目をあびた。これらの総括的な発表は、1967年(昭42)医学会総会整形外科分科会(名古屋)で講師岡崎清二が招待講演を受け持った。現在では Cali fornia 大学に学んだ講師平沢泰介を中心に神経移植の研究が深められ、その実際成果については、国際整形外科学会において「The clinical experience of nerve homograft」および「Histological study on peripheral nerve heterograft」と題し、あるいは日本移植学会のシンポジウムとして発表されている。また関節研究の面ではリウマチに関して講師吉良貞雄は Vit. E による新治療法をみいだす一方、基礎的研究面でも関節液の生化学的研究方法に全く新しい知見を得て学会の注目を浴びている。その後講師立沢喜和によりリウマチ性関節炎の観血的療法に続いて日米リウマチ協会の奨学金で米国 Iowa 大学へ留学した講師井上四郎により、リウマチの手の再建術についての研究が続けられている。また講師平沢泰介も Harvard 大学に留学し、リウマチに関する教室の研究への展開がなされた。

諸富は1973年(昭48)国際リウマチ学会の副会長を担当することとなり、政治的手腕と研究内容が学会に高く評価されるものと思われる。諸富の研究は究めて多様になり、実験的骨髄内移植腫瘍をラットに移植し抗癌剤の作用機序の解明のために脈管学的、病理組織学的、電顕学的、生化学的にわたる研究がなされている。また、外傷による醜形に対する皮膚移植の研究は弘前大学時代にその端を発しているが、“たなばた”の色紙細工の網にヒントをえて、大きい皮膚欠損部の補填に網状植皮術を考案し(1963年)、井上四郎、客員講師中村繁夫

を中心にすぐれた臨床成績を残してきている。また岡田は先駆的に人工補填材料について研究し、日本形成外科学会のシンポジウムに参加している。その他、社会問題化している外傷性頸部症候群に関する研究や交通事故や火傷などの外傷による醜形に対する研究など、実際社会面に即した研究が広く行なわれている。第31回日本筋電図学会(1969年)において「外傷性頸部症候群の筋電図」というテーマで岡崎がシンポジウムに参加、筋電図の新しい検査法の応用とその限界について発表し、骨接合術や関節軟骨損傷などに関する研究は助教榎田喜三郎を中心としたグループで行なわれ、1972年(昭47)の第4回結合組織研究会で榎田と井上は「結合組織と石灰化」と題するシンポジウムに参加、軟骨修復に関する新知見を発表した。10月にテルアビブで開かれた第12回国際整形外科学会には榎田が「The mechanism of repair in injured articular cartilage of wound adult rat」と題し報告した。

教室が担当した学会の数も多い。初代来須は第4回中部日本整形外科災害外科学会を担当したが、第2代諸富が就任して以来、優れた人望によって1960年(昭35)には第15回中部日本整形外科学会会長を1961年(昭36)第14回日本筋電図学会を、1962年(昭37)関西形成外科学会を、さらに第8回日本手の外科学会を1964年(昭39)9月、1970年(昭45)には第35回中部日本整形外科学会および第6回日本移植学会の会長をつとめた。

諸富の就任以来、一般の患者の整形外科に対する認識の向上とともに整形外科の患者は増加し、日々の診察に当っては診療室の数、医師の数など、いろいろと問題があった。諸富着任後、1959年(昭34)より新館第1期工事が完成、2階全棟を全面的に使用できる予定であったが、一般外科外来の場所がなく、一時、整形外科の半分をゆずって診療が始まった。1959年(昭34)の外来は1,561名の新患、1961年(昭36)には22,621名、1962年(昭37)は23,494名と激増し、1965年(昭40)、32,035名と急増したにもかかわらず、治療室の増設なく診療は大きく午後にくいこんだ。そこで第2診療室を二分して診療が始まるという急遽の策がとられた。1967年(昭42)32,600名の新患をむかえ忙殺された。慢性疾患に対する診療の機能は低下して最悪となった。まず特殊クリニックを設けることとなり、1967年(昭42)頃から講師吉良貞雄担当によるリウマチクリニック、講師水田早苗担当の腰痛クリニックが誕生した。当時、社会問題化して来た外傷性頸部症候群(むち打ち損傷)について頸椎クリニックを岡崎が担当するなど徐々に特殊クリニックが新設された。その後、先天性股関節脱臼クリニックが榎田担当で発足するとともに、形成外科クリニックも神戸こども病院形成外科よりの客員講師大原義雄とともに井上四郎が担当した。

整形外科の特徴的なことは、諸富の努力によって関連病院の拡張がなされたことである。関西一円から山陰、山陽、北陸と各地に出張病院が設けられ、近畿の官公立病院へは医長や部長として数多くの医員が出張した。教室作りが緒についた時、学園紛争のため医局員が不

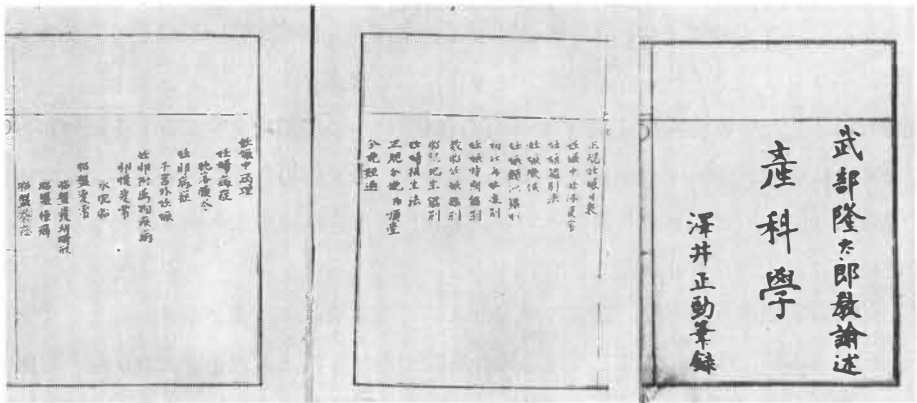
足し、各地よりあいつぐ派遣要請にもかかわらず、満足に派遣できないまま現在に至っている。紛争終了後、整形外科は後進の育成にとくに画期的な卒業教育システムを確立した。毎週1回抄読会、症例検討会、医局会の他に週2回の術前検討会を設けて鋭意、教室の研究と診療に、そして教室の運営に努力している。 (文責 岡崎清二)

## 産婦人科学教室

本学に産婦人科学教室が誕生したのは1884年(明17)9月である。木屋町仮療病院をへて1872年(明5)11月1日、愛宕郡第二組栗田口村青蓮院内に仮療病院が設置され、1880年(明13)7月18日現在地に移転しているから、本教室創設の地は現在の場所である。教室創始前の産婦人科患者の実体については詳細は明らかではない。従来からの習慣で総合的治療が行なわれ、専門別による診療の区別がなかったが、患者の増加とともに患者みずから医師を選択するようになり、次第に各専門部の独立の機運が醸成されていった。

1884年(明17)9月助手武部隆太郎は教諭に任ぜられ、婦人科学と産科学を担当し、療病院部長を命ぜられた。正確にはこれを本教室独立創始の発端とすることができる。教諭は産婦人科学のほかに外科総論と薬物学を講義した。現在のような組織での医局員はなく、外来・入院患者はすべて部長が診察にあたり、婦人科的手術は小手術のみにとどめられ、開腹手術は外科の教諭猪子止戈之助が執刀し、武部は介補者として関与した。

足立健三郎が1887年(明20)6月、教諭に任命され産婦人科学を担当。この時代になると、



武部「産科学」(1884)

教育は産婦人科学のみを講義し、診療は前部長同様、教諭自ら外来入院の全部にわたって行なわれている。1889年(明22)4月、産婆教習所が本校附属として設置された。手術は1893年(明26)1月に大手術場の完成とともに、開腹術もここで行なわれ、はじめは猪子の指導で行なわれたが、手術手腕は向上し、数年後には婦人科における手術界の権威とさえ認められるにいたった。足立は東京大学卒業後、直ちに來任し、この頃も教室員は1名もなく、明治26年卒業の長岡保が本教室最初の専属医員となった。長岡は翌年足立教諭退職後、後任決定まで全診療と大手術を行なった。なお、足立は退職後、郷里で開業したが、再び京都にもどって、現在の足立病院を開設した。

1895年(明28)1月、東大卒業後第五高等学校医学部に勤務していた高山尚平が教諭に任命され、産婦人科学を担当した。この頃から講義の分担はあらたまり、教諭は産科婦人科学のみの講義を行ない、その実地指導は学用患者があるたびに学生を呼出して、自らこれを行なうという方法であった。産婆に対する教育は漸次医員に分担されたが、外来患者の診察はすべて部長が行なった。小手術は内診室で行なわれたが、大手術(開腹術)はこの頃から大手術場で外科と隔日交替で施行されるようになった。Alexander氏手術は、わが国では高山によって最初に行なわれ、また子宮癌の広汎性全摘術に及び、その名声は全国にあまねくものがあつた。研究に関しても、同教諭の時代に始められ、1903年(明36)1月研究室が増築された。専属医員はなお長岡のみであったが、彼が小児科へ転出すると、1895年(明28)、紀野好学が入室、その後毎年1~4名の医員が教室に入るようになった。この時代は婦人科患者は著しく増加したが、産科の患者はこれにともなわず、実習にもことかくため、妊産婦無料診察券を発行し、無料入院の勧誘を行なった。高山は医療器機械類の考案改良にも努力した。そのほか、在京都産婦人科医よりなる京都産婦人科学会の創設、日本婦人科学会設立に努力し、附属産婆教習所出身者よりなる産婆茶話会を設立し、その指導発展に力をつくした。このように、高山の時代になってこれまでの混乱の時期を脱し、本教室は長足の進歩をとげた。1899年(明32)、京都帝国大学創業に当たり、わが校の運命は風前の燈火にも等しく、翌年教諭島村俊一が校長に任命され、同年9月高山が院長となり、立ちなおるかにみえたが、高山も1903年(明36)福岡帝国大学へ転任した。

秋元隆次郎は1903年(明36)5月教諭に任命され、産婦人科学を担当。同年6月本校は京都府立医学専門学校に指定され、府立療病院ははじめて附属療病院となった。1906年(明39)、中村関太郎は助教諭に就任、明治40年まで勤務、1912年(大1)10月、秋元は休職を命ぜられ、ドイツに留学、1913年(大2)11月に帰国、教諭留学中、迎諾、ついで加治安信が講師として勤務、教育に関しては、産科婦人科学講義の一部を助教諭に分担させ、また分娩の実地指導にあたらせた。診療面では婦人科にくらべて産科が大きな発展をとげた。教室員は年とともに

に増加した。

1906年(明39)11月、高山尚平は京都医科大学教授として福岡から転任し、その名声のため同じ京都にある本教室は多大の影響を受けることとなった。また、1913年(大2)9月から附属産婆教習所の卒業生にはただちに開業免状が授与されることになった。

1914年(大3)7月、加治安信が教諭に就任。1917年(大6)1月、勅令により教諭、助教諭は教授、助教授と改称され、1918年(大7)大学令による単科大学設立が認められることになるや、卒業生は昇格期成同盟会を組織し、さかんな昇格運動を行なった。学校側も予科と花園分院を建設し、大学設立の認可を申請した。1921年(大10)10月19日、本校に大学設立の認可がおりた。ちょうど本校創立50周年に当る。1922年(大11)5月、加治は、欧米に出張、翌年6月帰国、その間瀧山耐が部長代理、1923年(大12)3月、加治は大学教授に任命された。翌13年10月、有給医員は助手、無給医員は副手に任命、産婆教習所は大学附属となった。教育に関しては、産科学婦人科学講義は教授が担当した。診療については独立採算の必要から、教授が入院外来の診療を行ない、医員は入院患者の配当を受け、診療に関与した。医局員は毎年その数が増したが、研究はほとんど行なわれていない。

1925年(大14)11月、京大助教授山田一夫、本学産婦人科学教授に就任。1926年(大15)産婆長をおき、産婆教習所卒業生2名を産婆助手に採用、1927年(昭2)3月、産婦人科学教室同窓会である「同和会」発足。1928年(昭3)4月10日、山田は、欧米視察に出張、同年4月講師瀧山耐、助教授に就任。

1932年(昭7)学用産褥婦専用病舎設立、1933年(昭8)志田半三郎、助教授に就任。

1934年(昭9)5月6日、教室創設50周年記念式が挙行され、同記念誌が発行された。

1944年(昭19)2月、伏見分院に本学附属女子専門部設立。1951年(昭26)3月廃校、初代産婦人科教授に末川悳、ついで志多半三郎就任。

1953年(昭28)6月、山田一夫定年退官、9月名誉教授に推薦された。

山田の就任当時は産婦人科の講義を教授が担当し、産科手術学を瀧山、後に志多、松下らが担当した。従来は学用新患があるときのみ招集されて学生の実地指導が行なわれていたのを改め、学用再来患者を対象とした実地の教育が行なわれ、また毎日診療手術が見学できるよう改善された。さらに産科学の実習のため産直室を設け、当直医指導のもとに学用患者の分娩を見学させた。入室者の診療指導は厳重な監督のもとに行なわれ、手術は原則として教授が行なったが、教室員の手術関与の範囲は著しく拡大され、1929年(昭4)に助手、副手が再来患者の診療を担当する制度を設けた。図書と標本の整備を行ない、1927年(昭2)1月24日、定例雑誌抄読会の第1回が開催された。山田の在職期間は29年にわたり、教室の基礎が確立され、在任中の論文数は230編に及んだ。



1954年(昭29)3月, 東大助教授澤崎千秋が教授に就任。早々, 4月から医局員を手術, 分娩, 外来の3班に分けて配置し, 2ヵ月交代制を実施。研究室が整備され, 第1研究室は胎盤内分泌臓器の組織学, 抗生物質, 蛋白代謝, 実験腫瘍の研究, 第2研究室はV. B<sub>6</sub>の代謝, 第3研究室は代謝研究, 第4研究室は腎クリアランス, 第5研究室は基礎代謝測定室, 第6研究室はホルモン研究をそれぞれ分担させてグループ化し, 各研究室は活気づいてきた。同年4月, 山田は日本産科婦人科学会名誉会員に推薦された。同年5月, 山田一夫, 武藤友美, 西村宰爾は第10回近畿産科婦人科医会総会で「正常成熟新生児の血液像, 就中其造血像について」論文に高山賞を受賞された。同年7月徳田源市講師, 助教授に就任。同年10月志田半三郎助教授, 教授に就任(同日辞任)。1955年(昭30)1月, 講師森武史助教授に就任。同年10月同窓会報創刊号発刊。

1956年(昭31)3月31日, 澤崎は, 第30回日本内分泌学会総会で教室の研究成果を「胎盤ホルモンと妊娠時代謝」と題し特別講演。1958年(昭33)3月, 澤崎は本学を退職し, 日本大学教授に就任。教授在任期間は4年であったが, その間教室の業績は飛躍的に向上した。教授論文数258, 教授著書数26, 教室論文数262, 学位取得58名におよんでいる。

1958年(昭33)12月, 助教授徳田, 教授に就任。教授就任以来診療については各自に責任と義務と権利が与えられ, 研究に関して多くの設備が設けられた。研究班に抗生物質, 糖代謝, 子宮内膜の組織化学, 性ホルモンの生物学, 性ホルモン代謝, 子宮筋生理, 電気生理, V. B<sub>6</sub>代謝, 悪性腫瘍担体における窒素代謝があった。1959年(昭34)9月, 診療棟本館の新築をみて移転, 1961年(昭36)3月, 講師石東嘉男, 米国での臨床病理と細胞学の研究を終えて帰国。同年7月, 抄読会のほかに臨床研究会がもうけられた。この時代の研究課題は内分泌系に関するものが多い。estrogen, progesterone, 合成黄体ホルモンの代謝および臨床の実験(徳田, 東山), 担悪性腫瘍体の血清, 肝および腫瘍組織蛋白の電気泳動(鍛冶, 教室資料参照)などがあり, カナダ, ヨーロッパなど外国でのシンポジウムに参加した。

1965年(昭40)1月, 外来診療体系が一部変更され, 再来患者は炎症, 腫瘍, 妊娠(2), 不妊およびホルモン療法の5部門とした。同年4月, 講師小野和男, 助教授就任, 同年12月, 小野は, 新設の京都市立病院産婦人科部長に転出。講師井上正二が助教授に就任。

1966年(昭41)5月, 東山秀聲, 第34回近畿産科婦人科学会総会で「各種 Progestin の中樞作用に関する基礎的研究」論文に学会賞受賞。同年6月, 山田名誉教授喜寿の祝賀会が都ホテルで開かれた。同年10月徳田教授, 日産婦臨床大会で「妊娠と糖尿病」と題し特別講演。

1968年(昭43)3月11日, 徳田, 岡田は Berlin での第2回 Scherling Symposium に招請され, 欧州に出張, 16日徳田は “Studies on Metabolism of Name Progestational 19-Norsteroids” と題し講演。同年11月11日徳田は, 台湾医学総会の招きで「ホルモンの

生体内代謝」の講演のため出発。同年12月14日、徳田源市教授開講10周年記念祝賀会（於都ホテル）。同時に徳田源市教授開講10周年記念誌を発行し、10年間の業績目録とともに、研究および診療面にわたる教室10年間の歩みの概要をまとめた。同年6月23日、徳田は紛争のさなか附属病院長代行に就任した。紛争の間に教室員は他病院に就職し、その数半数となった。1970年(昭45)8月31日、徳田は心筋硬塞のため入院、同年9月15日早朝死去した。

徳田の在職期間は12年、その間教室の診療、研究は大きく発展した。著書14、論文208編、教室の論文531編、学位取得者44名に及んだ。

1971年(昭46)3月1日、講師岡田弘二、教授に就任。学生の講義、実習はおもに助手以上の有給職員が担当。研究グループはホルモンの代謝、ホルモンの生物学、子宮筋生理、抗生物質・抗癌剤、糖代謝、子宮内膜の組織化学である。診察に関しては、新来診察は講師以上の職員、再来診察は全教室員がこれを担当し、炎症、腫瘍、癌、妊娠、不妊およびホルモン療法の4部門からなり、小手術、大手術とともに一定のカリキュラムに従って、各自の責任と義務のもとに行なわれている。同年10月13日臨床医学舎竣工し、同月30日教授室、助講室、医局、研究室の順に新学舎5～6階に移転。

1972年(昭47)6月16日、岡田は東山とともに Washington における第4回国際内分泌学会に出席のため出発。“Conversion of 3-Deoxysteroids to the Corresponding 3-Ketosteroids in vitro and in vivo”の講演後、米国各地を視察し7月3日帰国。同年7月31日助教井上正二、国立奈良病院副院長に転出。

教室の歴史に関連する刊行物の所在は産婦人科学教授室、助講室、および医員室にある。

(文責 東山秀声)

## 小児科学教室

小児科学教室が内科(教室)から分離独立したのは1908年(明41)5月4日である。東京帝国大学小児科学教室が本邦で最初に設置されたのが、1898年であるから、これより遅れること19年である。ただし、独立する以前にも平井銃太郎(後、京大小児科初代教授となる)が小児科の講義と診察を行っていた。教室創立当初の正確な位置は明らかでないが、1909年(明42)に旧本館(木造1970年取りこわし)が落成し移転した。旧本館は今はないが、小児科は現在の臨床研究棟東端あたりに位置していた。検査用器材としては手回わしの遠心器と顕微鏡

1台という貧弱な設備のスタートであった。小児科の分離独立にはその準備員としての三好益太(1907年卒)の多大な努力があった。彼は部屋、診療器具、検査用具などの選定に連日奔走したという。初代小児科部長は本庄謙三郎で、1908年(明41)4月29日、京大小児科学教室より本校教諭として赴任した。本庄は



小児科学教室(診察室)(1911)

1903年(明36)10月、京都医科大学(現京大)を卒業し、1908年(明41)4月まで京都帝国大学小児科教室に在籍した。1911年(明44)から約3年間ドイツに留学し、帰朝後2年目、すなわち1917年(大6)7月死去した。在任期間約10年である。教室出発当時は本庄部長と三好益太のわずか2名であった。しかし秋にはさらに2名の医師が入局し総勢4名となっている。当時の診療状況は、外来10~15名、入院患者5~12名である。また現在のような優れた処方の補液はなく、食塩水を消毒の上使用したという。1911年(明44)には斎藤二郎(現本学名誉教授)や建田四郎らが入局した。本庄は1912年(明45)より2年間ドイツに留学、この間京大から阪井千春が小児科部長として赴任している。ここに1913年の教室スタッフをあげてみる。講師阪井千春のほか斎藤二郎、森家五郎、麦谷良作、田村嘉彦らがあり、このほか医員として年々平均4~5名が入局している。1931年(昭6)、本庄教諭の死去にともない同年6月京大助教授三浦操一郎が当小児科教授ならびに小児科部長に任ぜられた。三浦は1898年(明31)東大医学部卒業後、東大小児科教室に入局。1903年(明36)から1917年(大6)まで京大小児科助教授を勤めた。1921年当時のスタッフは三浦教授、斎藤助教授、井貫耕平、井上次郎、山本卓、山田義雄、長村亨らであった。なお、この年、斎藤助教授に学位が授与されている。1937年(昭12)医専教授三浦操一郎、同助教授斎藤二郎は医科大学昇格にともない、それぞれ医科大学教授、同助教授となる。ちなみにこの年の入局者は6名であった。この時期の外来診療は新患受付が11時まで、旧患受付が11時半までとなっており、月・水・金の新患を部長が火・木・土の新患を副部長が診察している。さらに毎週土曜日午後を種痘日とした。1939年(昭14)のスタッフは三浦教授、斎藤助教授、林、長村、三杉の3助手であり、このほか、4名の副手がいる。同年助教授斎藤は5ヵ月間のドイツ留学にたった。

1917年(大6)以来小児科部長の任にあった三浦は1928年(昭3)9月30日、腸チフスにて死去した。同年12月、助教授斎藤二郎は後任教授に任ぜられ、小児科部長を命ぜられた。ここ



鴨川西岸の病棟 (1927)

に初めて本学卒の教授が生まれたわけである。1929年(昭4)井貫耕平(1914年卒)は講師ならびに副部長を嘱託された。1931年(昭6), 副部長兼講師であった井貫耕平は助教授に任ぜられた。この年, 新卒業生, 加藤静応(現, 耐久会本学小児科同門会会長), 高木敬一(第二日赤小児科顧問)ら6名が入局している。

1935年(昭10)には中村恒男(現小児科教授)ら, 新卒業生10名と, それ以前に卒業した3名を加え13名が入局した。また研究生として岡本隆一(元衆議院議員)や高木敬一ら5~6名が研究にいそんでいる。井貫副部長は「プルペシチン」の研究を完成したという。

1939年(昭14)1月, 助教授井貫耕平は依頼退職して市内に開業。4月, 本学の新卒業生7名, 他学卒業生2名, 計9名の入局があった。大野正清, 田中幹夫ら講師となり, 講師田中は八木南丹病院へ赴任した。講師高木も舞鶴海仁会病院小児科医長として赴任。この年の日本小児科学会総会は熊本で開かれ, 教室から5名が出演している。

1940年(昭15)の教室スタッフは斎藤教授, 講師高木敬一, 巽弘, 大野正清, 田中幹夫, 医員中村恒男ほか10名である。研究室では岡本隆一ほか8名が研究活動に従事していた。当時の研究内容はリュウマチ性疾患とビタミン関係で, この年の京阪連合小児科学会地方会では斎藤が「ロイマチス性疾患に対するビタミンB<sub>1</sub>の治療的効果」を発表している。1940年(昭15)および1941年(昭16)の小児科入院合計をみると2,355名で入院総数は現在よりもかなり多いことがわかる。しかし, 入院患者の疾病内容は現在と大いに異なり, 伝染病, 寄生虫病や呼吸器疾患が圧倒的である。

1943年(昭18)9月, 講師高木敬一は助教授に任ぜられ, 第二日赤小児科部に赴任した。11月には講師中村恒男が助教授に任ぜられた。この年9月の新卒者からは軍医として本学を去るものが主であったので1名の入局者もなかった。1947年(昭22), 建田恭一(元解剖学助教授)ら5名入局。

1948年(昭23)4月, 第51回日本小児科学会総会が斎藤教授会頭のもとに本学で開催された。本学会で斎藤は「日本におけるロイマチス」と題し, 宿題報告を行なっている。この年の入局者は楠智一(現小児科助教授)ら11名であった。1950年(昭25), 建田恭一講師に任ぜられた。1951年(昭26)5月2日, 斎藤は定年退職し, 同年5月助教授中村は小児科部長代理を命ぜら

れ、つづいて11月教授に任ぜられた。1952年(昭27)1月、露木萌助教授に新任、三宅廉の後任として伏見分院小児科部長に任ぜられた。この年の新入局者は7名である。当時の教室の研究室ではビタミンとともに百日咳の組織学および生化学的研究が活発に行なわれている。1954年(昭29)7月、建田恭一が助教授に任ぜられた。また楠智一は東大医学部生化学教室での研究を修了し、1956年講師として教室に復帰した。

1957年(昭32)8月15日、中村恒男はフルブライト協会招聘により米国 Texas 大学に留学し、中枢神経系の組織培養の研究に従事した。翌年12月13日、中村は1年間の留学を終えて帰国。

1959年(昭34)、小児科学教室開講50周年を記念し、盛大な記念行事が行なわれた。実際には、1958年が開講50周年に当るが、中村が渡米中であったため1年延期されたものである。

1960年(昭35)第1期改築工事が竣工し、小児科外来は現在の位置に移転した。この頃の当教室における臨床および研究に関する卒後教育の課程はおよそ次のごとくであった。1年間のインターン後4月入局。入局後4か月間は指導医(助手)とともに患者を受持ち、その指導を受けつつ研修。9月より独立。2年目は関連病院に出張し、当該病院医長のもとで小児科臨床を研鑽する。出張する関連病院としては、明石市民病院、国立善通寺病院、健保神戸中央病院、南大阪病院、国立舞鶴病院、岐阜県立病院、国立豊橋病院などがあった。3年目は大学に助手として復帰し、最初の数カ月は新入局者の指導医となり、研究も開始していた。当時の研究内容は、ビタミンおよびホルモンに関する生化学的研究、肝や肺の発生と病理に関する電子顕微鏡的研究—この研究成果は1968年版以後の Bloom and Fawcett 著、Text-book of Histology に写真が引用されるまでに発展した—神経系の組織培養などである。入局後4年目以後は助手または副手としてそれぞれ研究に専従する。5年目の終わり頃には研究を完成し、平均6年目に学位を得て助手、医長あるいは開業へと針路を定めた。大学院の場合は1年間の臨床研修ののち大学院に入学。第1学年は臨床と研究、第2学年は各自テーマに従って特定の基礎医学教室に赴いて研究に従事、第3、第4学年は研究と臨床に従事し、研究成果が誌上発表された時点で大学院卒業および学位授与となった。

1962年(昭37)教授中村は Lisbon で開催された第10回国際小児科学会に出席し、ビタミンに関する教室の研究成果を発表した。1965年(昭40)4月30日、助教授建田恭一は小児科教授に昇任。同日同教授を辞職し、京都女子大児童医学科教授に就任。同年6月1日講師楠智一は助教授に、助手林玲二は講師にそれぞれ昇任した。この年、第11回国際小児科学会が東京で開催せられ、当教室からはビタミンに関する研究、肺の電子顕微鏡的研究や周生期脳障害に関する研究などが発表された。この方面の研究は引続き実施され、1968年(昭43)の第12回国際小児科学会では中村によりビタミン代謝と副腎皮質との関係、およびヘモグロビンFに

関する研究成果が報告された。

1966年(昭41)、東大に始まった医学部紛争は急速に全国に波及したが、当大学もその例外ではなかった。当教室でも教授室、助講室、医局ならびに主だった研究室は全共闘学生によって封鎖されたので、中村は外来の暗室を仮の居室とした。副手以下の無給医は一切の診療行為を拒否したため、教授、助教授も入院患者を受持ち、かつ当直も行なった。紛争の原因、目的、経過などについては割愛するが、当小児科の紛争は精神科と並び、きわめて激しいものであったといわれる。この紛争も1970年初頭にはほぼ終熄をみた。しかし紛争の間においても研究は細々ながら継続され、1969年(昭44)には中村の主催のもとに第21回日本ビタミン学会大会が京都で開催された。

1970年(昭45)6月30日、講師林玲二辞職し、京都市民病院に転出。同7月1日、助手三宅宗隆講師に昇任。1971年(昭46)5月15日、講師三宅宗隆辞職し、南大阪病院に転出。同8月15日、助手島田司巳講師に昇任。同7月1日教授中村は本学学長に就任し、小児科学教授を兼務することとなる。同10月、研究室、医局、教授室など、新築成った臨床研究棟に移転。この頃より紛争で一時中断されていた研究も活発に再開された。その主な研究テーマとしては、(1)パントテン酸や CoA に関するもの—本研究成果により中村は1970年(昭45)日本ビタミン学会費を受賞、(2)先天代謝異常および肥満に関する研究、(3)中枢神経系の発達とその異常に関する研究、(4)小児期悪性腫瘍に関する研究、および(5)小児循環器疾患に関する研究などがとりあげられた。

この時期の診療状況は次のごとくである。外来新患の診察は教授、助教授、講師が、旧患診察は助手が数名でこれに当る。このほか特殊外来として精神神経外来、循環器外来、腎臓外来、肥満児外来がもたれている。毎週火曜日、金曜日の早朝には入退院患者についての検討会が、水曜日の午後には診断や治療の困難な症例について検討会と抄読会がもたれ、教室員の臨床研修の一つの場となっている。1971年度の外来総数は3,574名、入院患者総数は558名となっている。入院患者を疾患別にみると精神神経系疾患、先天性心疾患、悪性腫瘍、腎疾患などが大半を占めている。

#### 参考文献

1. 京都府立医科大学小児科学教室開講五十周年記念誌。1959
2. 京都府立医科大学八十年史。1955
3. 斎藤教授定年記念研究業績題目集。1953
4. 斎藤二郎 別刷
5. 小児科入院患者の病歴誌の年次の検討・永田久紀他。日本衛生学雑誌 18 : 336, 1963

(文責 島田巳司)

## 眼科学教室

眼科診療は、仮療病院開設当初より行なわれており、1875年(明8)の療病院統計に、眼患者数183人の報告がみられる。

教育に関しても1881年(明14)の学科課程において、就学期間5年の最終学期に、眼科学講義が行なわれ、検眼検喉室で検眼実習が行なわれた。また、教材として、シュルスク眼科書が使用された。

しかし、眼科専任教諭によって、講義および診療が行なわれたのは、1882年(明15)甲種医学校として認定された後である。

初任教諭、浅山郁次郎(1884年～1898年、明17～明31)(在任期間)は、1884年(明17)に就任し、わが国眼科学の創始期の一人として、眼病理学の面などに多くの業績をのこした。1899年(明32)、京都医科大学の創設にともない、1902年(明35)初代教授として転出した。この間、1891年(明24)には、眼科教室として、平家建西洋館が、1894年(明27)には、診察室が増築され、眼科部に患者溜室、診察室、暗室、研究室などができ、一応形として整備された。

1898年(明31)療病院内で、第2回日本眼科学会総会が開催された。

浅山のドイツ留学によって、融礼次郎(1898～1902年、明31～35)1898年(明31)第2任教諭として就任(本学出身)したが、1902年(明35)に退職し、京都東山区で眼科を開業した。

伊藤元春(1902～1914年、明35～大3)は1902年(明35)仙台第二高等学校医学部より着任し、1914年(大3)に退職した。著書として、「視器中枢診断一覽」(明27)がある。

小柳美三(1914～1915年、大3～4)は1914年(大3)京都大学より転任したが、翌年、大阪赤十字社病院へ転任し後に1917年(大6)東



眼科学教室 診察場 (1911)

北帝国大学医学部の設立にともなって初代教授に就任した。著書として「眼科診療指針」(昭2)「眼科診療新書」(昭9)がある。

1916年(大5)東京帝国大学より増田隆(1916~1925年, 大5~大14)は第5代教諭として就任して来たが, 1917年(大6)の公立学校職員制によって初代教授となった。著書として「微生物眼病学」(大2), 「外眼病図譜」(大3), 「網膜黄斑部疾病論」(大4)などが残されている。業績として, 東京大学在職中から手がけていた網膜黄斑部についての研究は, 特にすぐれ, 現在もなお「増田病」の名のもとにのこされている。1925年(大14)現職のまま病死した。

第2代教授, 藤原謙造(1926~1947年, 大15~昭22)は1926年(大15)台北医専教授より転任してきた。1947年(昭22), 第51回日本眼科学会で慢性涙囊炎について, 特別講演を担当し, 著書としては弓削との共著による日本眼科全書「交感性眼病」がある。1947年(昭22)退職し, 国立舞鶴病院長として赴任した。

第3代教授, 弓削経一(1947~1969年, 昭22~昭44)は1947年(昭22)本学助教授(女子専門部教授兼任)より眼科学教室教授に就任した。1950年(昭25), 第54回日本眼科学会を担当した。1956年(昭31)より昭33年まで, 大学附属病院長を兼任するかたわら, 1958年(昭33), 第62回日本眼科学会で「斜視及びその治療に関する諸問題」について宿題報告を行なった。さらに1959年(昭34)から1963年にかけて, 学長として大学および病院の近代化のために活躍した。1963年(昭38)本館竣工にともなって, 診療室は第1診より第7診まで, それぞれが新しい機能をもった室として設計され, 弓削の決断によって従来の予診係, 記録係, 処置係などの診療体系は廃止され, 一患者に対して一医師がすべて検査から診断, 処置に至るまで責任をもって当る体制をとることとなった。その他, 特別クリニックの開設, 眼球銀行の設立, 診療の予約制など色々と新しい試みを断行し, 今日の眼科教室の基盤を完成した。

雑誌「明交」および明交会: 雑誌明交は1953年(昭28)弓削の発意によって, 同窓会員の意見, 研究など諸々の発表の場として創刊された。発刊の言葉から「どんなに高邁な思想を持っていても発表しなければ思想を持たぬに等しい。発表なくしては人を益することもなく, またその発展も望まれない。発表することは人に対する愛なくしては出来ない」という一節を引用しておく。現在, 10号まで刊行されている。これより先, 1935年(昭10)同窓会の親睦を計って, 明交会が発足している。発足時1円の会費であったが, 現在, 会費500円, 会員数126名で, 毎年9月23日故人となった教授藤原の誕生日に総会がもたれている。

特殊クリニック: 今では各科においても採用されている特殊疾患についての診療を, 1959年(昭34)に開始した。発足時, 各分野の主任には, 白内障: 百々, 緑内障: 今井, 眼底: 谷, 涙: 長嶋, 斜視: 足立, 屈折: 稲富の諸氏が担当した。現在, 糖尿病性網膜症: 谷, 緑内障: 今井, 色覚: 深見, ブドウ膜炎: 弓削, 角膜疾患: 根来, 中心性網膜炎: 初田, 暗順応



障害：富井，斜視：足立，稲富，コンタクトレンズ：根来，外眼筋麻痺：兼子らによって特殊診療が続けられている。

京都府立医科大学 眼球銀行：1964年(昭39)角膜移植法案の制定に続いて，アイ・バンクの設立が厚生省より認可された。登録第1号は開設者の蜷川知事で，昭和42年末現在745名の登録があり，角膜移植術も，百々，根来らの角膜移植クリニックのもとで現在まで98名，約110眼に移植が行なわれ，開眼および角膜疾患の治療に役立っている。

外来診療予約制：1966年(昭41)より，外来患者の新患は，救急疾患を除いて予約制となった。患者1人の診療に要する時間を約15分とし，発足当初は患者との間に多少のトラブルを生じていたが，現在では待ち時間1時間，診療1分のごとき不合理も解消されて円滑に運用されている。

弓削の著書としては，日本眼科全書「交感性眼炎」(金原出版，昭30)，「新トラコーマ読本」(日本眼衛生協会，昭31)，「日本眼科文献集I，II，III」(金原出版，昭34～昭36)，「斜視及び弱視」(南山堂，昭38)，「幼年弱視」(昭41)，「欧米旅日記医学教育をみつづ」(昭41)などがある。1968年(昭43)停年を待たずに勇退し，京都市立病院長として赴任した。

第4代教授，谷道之は1968年(昭43)本学眼科学教室助教授より昇任した。教授就任後間もなく大学紛争の嵐の中に巻きこまれたが，病院長代行，病院長などの管理職につくかたわら，1970年(昭45)，第74回日本眼科学会において「糖尿病網膜症を中心とした蛍光眼底写真」について宿題報告を担当した。著書として「小眼科書」(金芳堂，昭40)，「外傷性頸腕症候群(分担)」(南江堂，昭44)，「糖尿病眼底(分担)」(医学書院，昭45)，「糖尿病のすべて(分担)」(南江堂，昭46)がある。1971年(昭46)臨床研究棟の竣工にともない，教授室，医員室，研究室はすべて5階へ移転した。

患者の移り変わり・外来患者数および入院患者数

昭和	20年	23	26	29	32	35	38	41	42	43	44	45	46	47
外来	2444	2727	3367	3708	4326	4473	5659	6301	5907	5842	4320	5181	5391	5750
入院	65	111	117	188	291	326	338	459	394	359	309	352	342	407

1945年(昭20)より年次的に見て行くと患者数は入院，外来ともに年々増加の一途を辿ってきたが，外来予約制の実施と，大学紛争の影響によって一時的な減少を示した。しかし，その後，再び上昇のカーブを描いている。

つぎに，とり扱われた疾患群の代表的なものの頻度についてみると，次のとおりである(%)。

1952年(昭27)頃は結膜や，まぶたの疾患が全体の約40%近くを占めていたが，年々外眼部の感染性疾患は減少の傾向にあって，1968年(昭43)には20%以下に減少している。これに反

疾患群	結膜	眼瞼	屈折	水晶体	緑内障	眼底	眼筋
昭27	23.7	12.7	21.1	4.8	1.2	5.9	3.0
33	21.7	9.2	31.8	5.8	1.3	6.7	6.6
38	14.6	8.0	27.9	6.1	1.4	10.7	8.8
41	12.3	6.8	24.9	6.4	2.1	11.8	9.0
43	11.1	6.8	24.8	6.9	2.3	10.6	10.2

し、眼底疾患、斜視、白内障、屈折異常などの目の赤くならない病気が増加しており、1952年(昭27)約40%弱であったものが、43年には半数以上を占めるようになった。このことは眼科が red clinic から white clinic へ移行して行くのを如実にしめしており、また、一面からみると、衛生思想および衛生環境の向上、高齢人口の増加、近見作業の増加を示している。

手術についてみると、涙器疾患では、1957年(昭32)までは涙嚢摘出術が手術の主体であったが、1958年(昭33)を契機として涙嚢鼻腔吻合術が主に行なわれるようになった。斜視手術では1952年(昭27)53眼に行なわれていたものが、1955年(昭30)には200眼にまで一挙に増加し、その後毎年同数近くの手術が行なわれている。角膜移植術は1963年(昭38)より毎年平均10眼ずつ手術が行なわれ、白内障手術は1952年(昭27)頃を転機として囊外摘出術から囊内摘出術へと移行している。

研究の移り変り：約30年前に遡って、その大きな動きのみについて順次みると、  
 トラコーマ研究……1943～1958年(昭18～昭23)、弓削、上野、土田、高橋、柏井らによってトラコーマの集団治療、トラコーマの免疫学的診断について研究が行なわれた。

涙の研究……1952年(昭27)より長嶋によって導涙機転および流涙症の治療が、1970年(昭45)より分泌機転についての研究が行なわれている。

斜視の研究……1953年(昭28)より弓削、足立、稲富らによって行なわれ、わが国、斜視学のメッカとなる。

白内障の研究……1954年(昭29)より百々によって、主としてその手術的な治療について研究が行なわれている。

色覚の研究……1955年(昭30)より深見によって診断法についての研究が進められてきた。

糖尿病性網膜症の研究……1964年(昭39)より病型の分類や早期診断、蛍光眼底撮影法による診断、光凝固による治療が始められる。

業績表その他(眼科学教室 図書室蔵)

増田博士 論文集 1926年(大15)

増田教授 眼底図の原図、其一～其三

藤原教授 開講拾周年記念 業績表(上下) 1935年(昭10)

藤原教授 開講拾周年記念 論文集 1937年(昭12)

藤原名誉教授 古稀祝賀記念号 明交5号 1955年(昭30)

弓削教授 開講12周年記念 実績日録 1959年(昭34)

弓削教授 還暦記念号 明交9号 1966年(昭41)

弓削教授 開講20周年記念号 明交10号 1967年(昭42)

弓削教授 退職記念業績集 1968年(昭43)

(文責 根来良夫)

## 皮膚科学教室

本学の皮膚科学教室は1897年(明30)1月に当時の駮黈院長・江馬章太郎が医学校教諭となり、皮膚科学・梅毒学および耳鼻咽喉科学を担当、皮膚科・耳鼻科部長心得となった時に始まっている。本邦医学校で皮膚・梅毒科の専門教官を得たのは本学がもっとも早い。なお、これよりさきに、1895年(明28)9月に訓示第96号によって療病院制を一部改正し、耳鼻科部長・皮膚科部長をおくとの記載がある。

1898年(明31)1月に江馬は皮膚科・耳鼻科部長に、さらに1903年(明36)6月には専門学校令により昇格とともに、医専教諭になった。ついで1908年(明41)10月に助教諭中村登が耳鼻咽喉科部長心得となり、あらたに診療室を開設、ここに耳鼻咽喉科が皮膚科と分離・独立した。

1914年(大3)7月に江馬は退職し、8月に佐谷有吉が東京帝国大学から教諭として赴任、皮膚・梅毒学を担当、ついで1918年(大7)2月には中川清が東京帝国大学から教授として来任した。

1923年(大12)3月に大学昇格にともなって中川は本学教授(皮膚泌尿器科学)となった。1929年(昭4)2月に講師田村真男が助教授に昇任、1931年(昭6)に退職、日本赤十字社京都支部病院皮膚泌尿器科へ転出した。1935年(昭10)5月に鈴木成美が助教授に就任、おもに泌尿器科の充実に努めたが、



皮膚科 外来診察場 (1911)

1943年(昭18)5月には教授加藤明敏が死去したあとの微生物学教室に籍を移し、同年11月から同教室を担当、教授となった。1945年(昭20)6月に中川清は附属女専講師を兼務し、1945年(昭20)8月15日に第二次大戦終了。1946年(昭21)4月に講師野中弥一が助教授に昇任し、もっぱら泌尿器科の再建に努力した。

1947年(昭22)6月に、朝鮮総督府京城医学専門学校教授であった片岡八束が本学附属女専教授に就任、同年10月に中川清は退職して東京医専教授として転出し、片岡が本学教授に就任した。1948年(昭23)6月に小田完五が女専教授となり、1949年(昭24)6月に野中弥一がときのレッド・パージに関連して休職、1950年(昭25)1月から小田が本学助教授を兼任した。同年10月、中川に本学名誉教授の称号がおくられた。1951年(昭26)4月、附属女専の廃校にともなって小田完五は本学助教授となり、附属伏見病院皮膚泌尿器科部長を兼務した。1954年(昭29)8月に小田は伏見病院の兼務をとかれ、外松茂太郎が助教授に昇任、同時に伏見病院皮膚泌尿器科部長を命ぜられた。同年11月片岡八束は停年退職し、学長専任となった。

1955年(昭30)12月、北大教授岩下健三が本学教授に就任、1956年(昭31)2月に片岡八束は学長を辞職し、4月に名誉教授の称号を受けた。1959年(昭34)に中川清は永眠した。1960年(昭35)4月に岩下健三が附属病院長・附属看護婦学院長となり、1962年(昭37)4月に退任、1963年(昭38)7月に外松茂太郎が本院に配置換えとなった。同9月に第3期病棟完成。皮膚科外来は新築2階診察場に移転した。泌尿器科はそのまま在来の診察場で診療を続けて、小田がほとんど専従し、医員・診察場は皮膚科・泌尿器科が分立することとなった。ついで1964年(昭39)5月に小田は教授に昇任、泌尿器科教室を担当し、ここに多年の宿願であった皮膚科学、泌尿器科学教室の分立がようやく完全に実現した。1968年(昭43)3月、岩下は停年退職し、4月に名誉教授の称号を受けた。

1968年(昭43)7月に外松茂太郎が教授に昇任した。10月に講師広井潤が助教授に昇任、11月に京都市立病院皮膚科部長として転出、講師上田恵一が助教授に昇任した。この年の暮頃から大学紛争が徐々にエスカレートし、1969年(昭44)は教室も大きな嵐の中に投入された。1971年(昭46)7月、外松は大学院研究主任に任ぜられ、1972年(昭47)6月、機構改正にともなって研究部長となった。なお、1971年(昭46)の新来患者数は4,010名、入院患者数115名、配分ベット数15床、病舎は21号、伏見分院皮膚科の新来患者数は974名であった。

研究プロジェクトの変遷：江馬章太郎は本邦における皮膚・梅毒科専門の先覚であり、すでに1901年(明34)4月の第1回日本皮膚病学会総会で「結節性臭疹について」を講演した。学会の評議員として、第7回日本皮膚科学会総会1907年(明40)8月には宿題報告「小児湿疹の原因および療法」の一部を担当、「小児湿潤性湿疹の療法」について報告した。なお京都医学会雑誌第162号(明治34年7月、1901年、廃刊号)には「円形禿髪について」の論説がある。

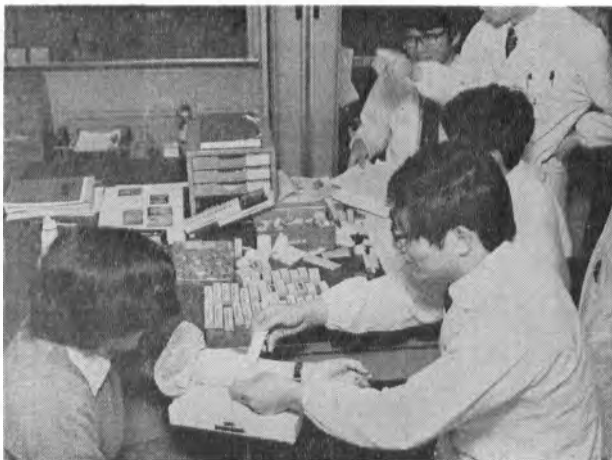
佐谷有吉は実験梅毒に興味をもち、「培養スピロヘーテンを心臓に注射して発生せる家兎全身梅毒の治療」という報告がある。また光線療法に精通し、1914年(大3)11月、医専・附属療病院落成式における記念通俗医学講演会で「光線と医療」について講演した。

中川清ははじめ病理組織に興味をもち、そのブロック狼瘡状毛瘡は本邦最初の報告であり、またへブラ疱疹状膿痂疹について広汎な知見補遺を行なった。また早くから脱毛症について興味をもち、皮膚美容に対しても大いに関心を示した。昭和初期までは末梢神経についての業績が多い。ついで皮膚機能、とくに皮膚の免疫学的機能と経皮吸収に教室をあげて取り組み1938年(昭13)4月の第38回日本皮膚科学会総会には宿題報告として「経皮的療法」を講演した。第二次大戦中はもっぱら熱傷の治療について実験的・臨床的研究を行ない、創製された火傷膏は戦後もしばらく愛用されていた。敗戦後は原爆熱傷についての研究がある。

片岡八束は戦後の疲弊した教室を乏しいなかから日夜その復旧に尽力し、一方ライフ・ワークである Hoffmann のエソフィラキシー (Esophylaxie) 学説にもとづく、皮膚を一種の内分泌とみなす Hauthormon の研究にいそしんだ。そして皮膚刺激の面からあらゆる生物学的・生化学的方法を駆使して教室全員の先頭に立ち、全力を傾倒して「皮膚ホルモンの片岡」の名をえたほどである。また臨床的な慧眼は衆目の一致するところであり、片岡の指導による多くの貴重な臨床例の報告・原著がみられる。また1951年(昭26)11月には設立に努力した第2回皮膚科・泌尿器科学会中部連合地方会を主催し、「皮膚疾患とアミノ酸」について特別講演を行なった。

岩下健三はようやく再建された教室を、さらに発展・飛躍へと導き、その研究テーマはビタミン・ホルモン・アレルギー、また梅毒・水疱症・角化症など広汎にわたった。とくに角化についての造詣は深く、組織学・組織化学・生化学的、また電顕・autoradiography・器官培養などによって研究を進め、

1966年(昭41)5月には第65回日本皮膚科学会総会を主催、その集積を「表皮角化に関する知見」として講演した。これよりさき1958年(昭33)11月には第3回中部連合地方会を主催し、小田が「泌尿器科領域における腎機能について」、また外松が「皮膚と含硫アミノ酸」について特別講演を行なった。また国際学会に対しては、おもなも



皮膚科学教室 診察場 (1972)

のとして第5回国際アレルギー学会 (Madrid, 1964年10月)に DNCB 感作, 第13回国際皮膚科学会 (München, 1967年7月)には魚鱗癬・乾癬・器官培養による角化・帯状疱疹などについて公にした。なお退職後も1968年(昭43)11月に第18回日本アレルギー学会総会を名誉教授として主催した。

外松茂太郎が教授に就任して月を経ずして大学は激動の紛争にまき込まれ, 研究も全面的に停止, その後混迷を続けたが, 昨今ようやく立ちなおりつつある。しかしその紛争の爪あとは大きく, 再建・発展にはなおいささかの月日を要しようが, 従来確立された autoradiography・電顕・器官培養・組織化学を4つの柱とし, また外来は一般診療のほかすでに皮膚形成・皮膚アレルギーの2つのクリニックを設け, 教室員の和のもとに研究面・臨床面ともに充実を進めつつある。教室のかがやかしい歴史を守り, さらにさらにつぎの100年への光栄ある前進・発展を期している。

(文責 外松茂太郎)

## 泌尿器科学教室

本邦医科系諸大学においてほとんどがそうであるように, 本学泌尿器科学教室も皮膚泌尿器科学教室を母胎として分離独立をみたものである。本学では皮膚泌尿器科という科名がその前身である皮膚梅毒科にかわって用いられたのが1932年(昭7)のことで, 泌尿器科の呼称がここに初めてみられる。

中川清教授時代に助教授鈴木成美は1938年(昭13)7月より1カ年間学術研究のため, 東京帝国大学医学部へ出張, 高橋明東大教授について泌尿器科学を専攻帰学し, 教室に新風を送った。教室誕生の胎動はすでにこの時点にさかのぼるものと考えられるが, わけあって1943年(昭18)5月, 助教授鈴木が微生物学教室に転出したことは教室にとって痛恨事であった。片岡八東教授時代に助教授野中弥一, 小田完五の名をあげることができる。戦後全国的に泌尿器科学教室が次々に新設される趨勢の中で, 本学においても教室主宰者であった岩下健三教授によって警鐘が鳴らされ, ようやく分離独立の気運が熟した。当時本学では一教室教授1, 助教授1, 講師1, 助手6よりなる完全講座制が実施されていたが, 1963年(昭38)7月には学内操作による定員外助教授1, 助手2の教室員配属増が教授会で承認され, 第3期工事竣工を機に同年9月以来旧木造皮膚科外来あとに診療部門としての泌尿器科が設けられ, 助教授小田が診療業務を担当していた。

新教室の初代担当者として小田完五が翌1964年(昭39)5月1日付をもって教授に任命され、講師久保泰徳、助手2、副手4(6月助手となる)の陣容にて完全講座として発足した。以来年々新入局者を加え、1967年(昭42)10月、久保は助教授に、1969年(昭44)1月、平竹康祐は講師に昇任。京都第一赤十字・京都第二赤十字・国立舞鶴・松下・大阪回生・中津済生会・神戸健保中央など各病院を関連病院として漸次隆昌に向かいつつあった。全国的規模で勃発した学園紛争は1969年(昭44)、早春本学へも波及し、教育・研究・診療の面で教室の被った人的・精神的損害は決して小さくなく、同年末助教授以下全員あいついで教室を去った。翌1月新しく3名の学内講師、6月2名の助手を得ることができ、6名による教室再建への険しい道が開かれた。1972年(昭47)4月には三品輝男、村田庄平の両名が講師に昇任した。なお客員講師には古沢太郎(新設以来)・大山朝弘(昭和47年度)がある。

新設当時の研究設備は極めて貧弱であり、新設にともなう経費もまた微々たるものであった。研究室には旧皮膚科診療施設(旧本館西南凸角)あとの一部があてられ、1970年(昭45)1月よりは20号病棟4階に移転、宿借りした名ばかりの研究室であって、新生のよろこびの中にも、創設の苦痛がひしひしと感ぜられた。外来診療室は独立を機に前に述べた旧木造皮膚科外来あとから臨床講堂下の一階

東側に移転仮設されたとはいえ、約7年間にわたり他科診察室と隔絶していたため、職員・患者ともにまことに不便が感ぜられていた。1971年(昭46)10月研究室・診察室ともに現在地に安定し、やっと他科に仲間入りすることが出来、現在にいたっている。X線検査は放射線科外来に出向いて行なわれ、



泌尿器科学教室 外来受付 (1972)

手術には中央システムが採用されている。入院患者病棟は、1967年(昭42)2・3月に病棟配分の変更が行なわれ、これを境として主要病棟が6・13号から10・12号に移り、独立を機に専用病床数が22床に増加した。共用病棟である16・23号の利用については変更はなかった。

皮膚泌尿器科時代の泌尿器科学の系統講義は総論が4回生3学期より助教授により始まり、5回生1学期で各論が終了した。臨床講義は5回生3学期、6回生1・2学期に行なわれ、教授は主として皮膚科学を講じ、泌尿器科学は助教授に委せられていたが、泌尿器科学にも造詣の深い岩下は分立前まで泌尿器科学臨床講義の一部をも講義した。臨床実習は5回生3学期、6回生1・2学期にポリクリの時間として皮膚科学と泌尿器科学との区別なく、水陸両面



泌尿器科学教室 外来診察場 (1972)

との個人的な接触によって直接の指導を受ける方式が実施され、現在にいたっている。

教室研究テーマの主流は腎機能と体液平衡に関するもので、泌尿器科における水分代謝を基調とした腎機能(小田ほか)、尿量と腎機能(小田ほか)、尿浸潤時の体液平衡(平竹)、急性尿路閉塞(小田ほか)、閉塞腎の回復性に関する実験的(大山, 三品)臨床的(井上)研究などの業績発表がある。このほか臨床統計, レ線診断法, 手術手技および術後の遠隔成績, 新薬治験, 興味ある症例などが原著として発表され, 著書(臨床泌尿器科学), 総説, 図譜などがある。講演発表は日本泌尿器科学会総会, 同中部連合地方会, 同関西地方会をはじめ日本腎臓学会, 日本小児外科学会, 日本化学療法学会, 日本内分泌学会など, その他各種研究会において, 以上原著発表内容のほか腎不全, 尿路感染症, 男性不妊などに関するものがなされている。第54回日本泌尿器科学会総会(1966・京都)に分腎機能検査法(小田), 第18回中部連合地方会(1967・金沢)に尿路変更術と術後管理(小田), 第19回中部連合地方会(1968・大阪)に腎疾患における腎保存手術(久保)のシンポジウムに参加し, 第21回中部連合地方会(1971・京都)に小児膀胱尿管逆流現象の臨床(平竹)の特別講演がある(京都府立医科大学学報号外参照)。なお第21回中部連合地方会が小田会長のもとに, 1971年(昭46)秋本学記念講堂において開催されたほか, 教室は数回にわたり関西地方会を担当した。

診療面より当科の推移と特徴についてのべる。分立前よりすでに1,200名台であった年間外来患者総数は分立後漸次増加し1,800名台に達したが, 1969年(昭44)には学園紛争の影響で, 1,100名台に減少, 学内正常化にともない再び上昇傾向を示し, 本年上半期をもってよ

作戦ともいわれる形式で行なわれていた。専門学科としては全く異質混交しており, 系統講義時間は別として臨床講義および実習時間ともに時間数に制限があるなど, 早期の分離独立が望まれた理由の一つでもあった。分離独立後は独立講座時間数が割りあてられ, これらの弊害は大いに改善された。系統講義についてはほぼ分立前のカリキュラムが引きつがれ, 助教授・講師により講義され, 1967年(昭42)以後一部改正により5回生2学期20時間に短縮された。臨床講義は主に教授, 時に客員講師によって6回生1・2学期に行なわれている。外来および病舎実習は5回生3学期, 6回生1・2学期の1カ年間に, 10人前後の小グループに分かれて, 1週間連続2回ローテートして出席, 各教室



うやく往時のピークに回復した。入院患者件数についても外来患者数とほぼ平行した増減があり、年間100名台を割った紛争の年を除いて平均220前後である。大学附属病院の性格上当然とはいえ、当科では外来の約45%が紹介患者で、その55%が学外診療機関、45%が学内各科よりのもので、とくに内科・婦人科・外科・小児科との関連が深い。また当科診療の特徴の一端を示すために分立前5カ年間と1971年(昭46)1カ年との入院患者数上位5疾患の比較をこころみた。前者では上部尿路結石(19.0%)を筆頭に前立腺肥大症(10.5%)、膀胱癌(7.3%)、腎結核(7.0%)、膀胱結石(3.3%)の順に、この5者で全入院患者の47%を占めていたのに対し、後者では上部尿路結石(19.0%)と前立腺肥大症(10.9%)の率には変化はないが、膀胱癌が全体の20.7%と第1位に進出し、この3者ですでに全体の約50%を占めている。入院加療を要する腎結核は7.0%から2.2%と約1/3以下に減少しており、また泌尿器科といえただちに性病が連想されがちであるが、これは過去のイメージで、淋疾外来患者は年間10名内外に過ぎないこととあわせて、絶滅には程遠いが結核・性病患者数の減少は特殊感染症に対する抗生物質の威力の賜物である。ついで年間入院患者の年齢分布をみると50歳以上52%、60歳以上43%、70歳以上21%のごとく当科に老人患者の占める率の多いことも時代の趨勢と当科の特徴とをよく反映している。このほか奇形(各種尿路通過障害・尿道下裂・停留睪丸など)、腫瘍との関連で小児患者数も無視し得ない。

本学における人工血液透析について一言しておく必要がある。第1例は慢性腎不全患者に1963年(昭38)初めて旧コルフ型ダイアライザーを用いて行なわれた。以後急性透析が主な対象であったが、慢性透析への利用は1967年(昭42)後半からのことである。適当な透析室を欠いたため、ほとんど夕方から深夜におよぶ中央手術室での時間外勤務奉仕の変則的な活動であった。1968年(昭43)秋より17号舎の一室に透析室が仮設され、教室内の透析グループがこれに参加し、翌年末まで続いたが、人員の関係で一時中止され、現在におよんでいる。1教室の片手間的な運営ではなく、近き将来中央的性格をもった機関として再生する日をまつのみである。

大学は教育・研究を使命としながらも医学部臨床系は診療に直結している関係上、診療に費される時間も決して少なくない。新設以来多少の変遷を経た現在では週日午前中外来・入院の診療、月木土のレ線検査、火水金の手術、金の手術後から日没おそくにおよぶ外来や手術前後症例の検討、抄読会など医のモラルに立脚した徹爾多忙な日々の連続である。元旦の教授宅での小集會に始まり、年末忘年会に終わる年中行事の中に、4月新入歓迎会、夏休暇中のナースを含めた1~2泊の水泳行、随時のボーリング大会、麻雀大会など盛り沢山なレクリエーションがあり、明日の飛躍への英気が養われている。(文責 小田完五)

## 耳鼻咽喉科学教室

1903年(明36)専門学校令の公布とともに京都府立医学専門学校と発展改称した本学では、日露戦争という困難な社会情勢にもかかわらず、増築設備の計画が具体化され、1905年(明38)頃より同42年に至る間に建築の槌音がキャンパスに響きつづけていた。その頃、耳鼻咽喉科は胎動の時期にあった。耳、鼻、咽喉頭の疾患は、専門分化の傾向にあったとはいえ、本学においては、耳の疾患は、江馬章太郎部長の皮癬科で処理され、耳漏のある中耳炎は、硼酸の微温湯で耳洗浄後、酢酸鉛液でタンポンするにすぎなかった。このような中耳炎の患者は1日10名ないし15名あったと記録されている。また、鼻疾患に対しては、池田廉一郎外科部長のもとで処理され、反射鏡で診ることもなく、毛筆でコカイン塗布のみの処置で終わるという程度であったが、それでも外科において、蓄膿症の手術らしきものが行なわれ、犬



耳鼻科診察場 中村登教諭(1912)

歯窩より洞内に入り、副鼻腔(上顎洞)と鼻腔の流通開放術が若干行なわれていた。咽喉頭検査は、内科で処理され、硝酸銀塗布や食塩重曹水の吸入が施療されるにすぎなかった。

当時京都大学で和辻春次初代教授により、耳鼻咽喉科はすでに独立し、本学明治34年卒の外科医中村登はしばらくここにて和辻教授の秘蔵の弟子として、数々のエピソードを残しながら、新しい領域の研鑽をすると共に、本学にも独自の耳鼻咽喉科を独立せしめ、人材を養育する構想を練った。

1908年(明41)9月、本学の増築も一応完成に近づきつつあるとき、2学期より耳鼻咽喉科が新設されることになった。当時助教諭であった中村は、耳鼻咽喉科部長心得となり、医員として、一井碩と清水保太の2人が決まり3人編成でもって、1908年(明41)10月21日に独立した。これが本学耳鼻咽喉科学教室の誕生である。当時は病院の増築中で、構内も混乱し、

適当な耳鼻科の診察室を求めることが難しく、現在の大学正門を入った北側、今の門衛室辺りで、業務が開始された。6坪程の診察室と3坪位の患者待合室兼受付の2室のみで、中村部長以下計3名の医師が、午前の外来診察が終わると、そこで昼弁当を共に開くという状態であった。診察室には、2台の診察用回転椅子の中央に器械卓子(台)がおかれ、中村部長は、2つの診察台をクルクル回り、診察室3名、受付1人の看病婦はそのまわりを走りながら介助した由、反射鏡はもちろん使用されていたが、光源は窓の光線にたよっていた。開設当時は外来患者数40名位であったが、すぐに70名位となり、看病婦を1名増員せざるを得なかったようである。午前の外来診察後は、手術が行なわれ、その後、入院患者処置、診断材料の鏡検、毎日の回診、学生講義の準備と黎明期の過酷な業務は、中村に集まりすぎているもの、若き中村は医学の進歩を期し、患者に対する医師の義務について、異常な熱意とエネルギーをもってあたり、患者数も半年後には100名を越すにいたった。狭隘にすぎる診察室は本建築とは別個にとりあえず1坪半程のバラックがつけたされ、初めて狭いながらも医員室として本が読める程度になった。

当時の手術は、扁桃切除、アデノイド切除、鼻茸、甲介切除、鼻中隔手術などがすでに行なわれ、これらは診察室で手術された後、患者は帰宅した。また、当時すでに確立されていた蓄膿根治手術、乳様突起削開術など大手術と称されたものは外科の手術室が使用されていたが、場所を借りるのは気分がよろしくないとのことで、開設2・3ヵ月後には、耳鼻科の診察室で処理されている。小手術は、月、水、金で大体5～6名、大手術は、火、木、土で日に2～3名が処理され、入院患者は約20名、他科よりの紹介をうけるもの日に15名といわれた。1909年(明42)6月、4年にわたる増築工事ができあがった。同年5月、中村は教諭となり、同時に耳鼻咽喉科部長を兼ねることとなった。

仮設の診察室で不遇をかこっていた耳鼻科にとって、新築の病院は目を見張るものがあった。玄関の真上に診察場(昭和45年解体時は、医局として使われていた)、廊下に対向して東側に、医員室と部長室と研究室があてられ、同年8月には医員室の階下、つまり正面玄関を入れて右側に待望の耳鼻科専用の手術室が機能を開始した。照明はガス灯でマンテル交換が大変であった由である。

3名の耳鼻科医員の1人は、この年3月帰郷し、一時期2人で、すべての仕事がまかなわれたが、以後、耳鼻科に入室するもの、やめるもの、出入をくりかえしながら、次第に医員が増加してゆく。また新館移転時には看病婦も7名に増員された。

当時、耳鼻科の処置が15銭、一方、消毒のためのガス、電熱の装置はなく、たよっていたアルコール消毒のためのアルコールが日に3円、29名の患者の処置料がアルコール代になくなる時代であった。この頃から、大学昇格に至る1921年(大10)の間は創業時代から整備充実

期に入り、すべて業務が型なりにレールに乗った時期といえる。もちろん、この間に本学にとっては大変な受難期が含まれる。1914年(大3)に10カ年にわたる改築工事は修了したが、1918年(大7)大学令の発布の以前に、本学に存亡の危機が訪れた。学内騒然とした記録が残されているが、耳鼻科の記録の中には、この頃のものでも、さほどの「いらだち」は感じられない。病院では、ある病舎では入院患者が3名を数えるにすぎない状態であったという。しかし、耳鼻科では、中村の献身の努力により、すでに確固たる土台は築かれており、加うるに、診察に研究に教育に示された熱意により、教職員は何らの動揺を示さず、安心して日々の仕事に専念し得たものと思われる。

1915年(大4)4月より翌年6月まで中村は、京都帝大耳鼻科に研究出張を命ぜられている。1916年(大5)5月「迷路の炎症に就て及実験的研究」なる論文により、医学博士の学位を受領、1917年(大6)1月、従来の教諭、助教諭の名称は、教授、助教授に改称されることになった。中村登教授指導のもとで、各医員はかなり勉強を強いられたようで、ドイツ語論文を訳しては、教授の訂正をこい、抄読会に発表することの苦しさを思い出して記されたものがある。このような研鑽の結果、本学耳鼻咽喉科の名声は次第に高く、今日の伝統の基礎が培かれた。

大正前期を通じて外来80~100人、入院患者70~80人が受診されるのが通常であった。他聞にもれず喉頭結核とジフテリーが入院患者の多数を占め、前者に対して、疼痛止めに上喉頭神経のアルコール注射、後者に対する緊急気管切開が盛んに行なわれた。ジフテリー後麻痺による死亡、耳手術後の丹毒の併発などに、当時の治療は現在考えられる以上の手間が必要であった。

本学の歴史に波乱のページをとどめる大学昇格問題は、1918年(大7)、原敬内閣の政策にスタートするが、校友の努力により、全国第4番目として1921年(大10)10月正式に決まった。この頃中村は留学中で翌年春帰国、1923年には中村は医科大学教授に任命された。当時、富岡末吉助教授1926年(大15発令)、河野敏之医局長と教室医局の形態もようやく充実し始めた。この頃より入室志望者は次第に多く、その結果、大学第1回卒業生が出る1928年(昭3)には、本学卒業生9名の、さらに翌年には10名の入局者をみるにいたり、ここに教室の黄金時代が始まる。研究面では、中村により宿題報告「喉頭結核の病理」が多大の反響をもって報告されたのをきっかけに、喉頭結核に関する研究が教室内で展開されるとともに、一方では、内耳の病理に関する研究が平行して密度高くなる行なわれた。1937年(昭12)の本学集談会の発会式の特別講演には「ミクロトーム」の供覧がもの珍しげに行なわれた時代である。すぐに耳鼻科に1台購入されたが、個々の研究の計画には並々ならぬ苦勞があった筈である。

教室の内部充実と共に、遠隔地より耳鼻科の応援を求める声がしきりで、多くの医局員が

西に東に応援診療にでかけた。この頃の慣習として、大学卒業後3年位は医局で臨床の習熟を、その後研究室入りということになっていた。教室の学位第1号は細田忠四郎による「聴器に於ける悪性腫瘍の移植及増殖に関する実験的研究」で、1925年(大14)10月16日付で授与されている。

多勢の医局員をかかえて、いろいろの工夫がなされ、この頃の助手の給料は40円で、昭和4年卒の10人組は仲よく10等分してわけた由、ちなみに、この頃の耳鼻科の処置料は40銭であった。散髪代が50銭、市電6銭、診察衣を自費で買うと1円80銭、ネクタイ1本1円という時代である。付記するならば、教授の給料300円、助教授120円、講師100円～80円であった。

1931年(昭6)には本学耳鼻咽喉教室第2代教授である中村文雄ら7名が入局している。週1回の抄読会、1929年(昭4)に始められた月1回の耳鼻咽喉科臨床集談会と勉学のあり方は軌道にのっていた。しかしながら、抗生物質はもとより、化学療法のはしりとしてバイエルの「プロントジール」が盛んに用いられるにすぎない時代で、この前後9年間に喉頭癌摘出は1例を見出すのみである。多数の手術をさばくため、すでに1922年(大11)手術場は拡張されていたが、診療、手術、回診、病棟交換などすべて耳鼻科所属の看護婦によって介助され、大正4年頃、見習看護婦として配属されていた菅谷鉄子が昭和に入ると、婦長として15名前後の看護婦を統括し、日々の診療を支えた。

1932年(昭7)、教室は創立25周年を迎えた。本学講堂で記念祝典は厳粛裡に举行され、中村登は今日なお教室のフィロソフィーとしてうけつがれている式辞を述べている。「医師は、患者には親切で、その不幸を憫みつつ治療にあずかり、医学の教育に向かっては、人格の陶冶を第一義とし、研究に関しては、常に未開の地を拓くの策をたて、しかも、そのテーマは、実地医学に親密に関係するものを……」と説くとともに、「本学に籍をおくものは、常に経済的裏付けの貧しいことを前提と自覚し、この不備を努力と奮励をもって打ち破るだけの勇気をもつことが義務づけられる……」。明治末期以来、大正を通じ、本学が常に自給自足、幾多の難関を克服して京都府民の医療に、医学、耳鼻咽喉科学の進歩に粉骨努力した中村登の身にしみこんだ信念として感銘深く響き残る。教室25周年の記念式の夜、祇園の料亭「樹乃枝」で懇親会が会費11円50銭で開かれている。登教授夫妻は、列席した恩師京大耳鼻科の和辻春次教授が、伸びゆく愛弟子が主宰する教室を絶讃される祝辞を述べられる間、感極って目頭にハンカチをあて、暖い師弟愛に満場肅然としたと記録が残っている。

1931年(昭6)以後、附属病院の鉄筋コンクリート改築が進められ、1938年(昭13)11月に第6期工事が完成し、ここに現在なお残る病棟が完成した。しかしながら、この頃より軍国主義の風潮は次第に高く、以後教室員の出征などの出入りは次第にはげしくなる。しかし、すでにでき上がった教室の伝統は守られ、以後の苦難の時代に耐えてゆく。1933年(昭8)、中村

登は第2回の欧米出張を命ぜられ、さらに進歩せる知識をもち帰った。帰朝後1936年(昭11)7月、附属病院長に就任。この時までには、学長と院長は兼務することになっていたが、この時をもって分離された。学長は病理学の角田隆である。1938年(昭13)、助教授富岡末吉が病魔にたおれた後、1939年(昭14)6月に、すでに2年前学位を授与され、東大耳鼻科颯田琴次教授の下に内地留学に出張していた講師中村文雄が助教授に昇任、以後、第二次大戦に突入するわが国の暗黒時代に、不足する医局員の中心になって活躍が始まった。医師不足の解決策として、全国に臨時医専が生まれたが、1944年(昭19)には、伏見分院を場として女子専門部が併設された。浜、中村(文)、竹沢、飯田、鈴木(由)らのスタッフがその教育をも分担した。

中村登は同年8月附属病院長を辞しているが、1942年(昭17)8月、常岡学長のあと学長に就任し、再び多忙な日々が始まる。連日の過労から、中村登の健康状態はすぐれず、かつ任期中の1944年(昭19)4月、衛生学教室、微生物学教室の小使室よりの失火のため、基礎医学教室の大半が焼失するや、病中にもかかわらず陣頭にたって復興に努力するなどの過労が重なり、病状次第にすぐれず、1945年(昭20)7月25日、教室と本学とそして耳鼻咽喉科学会のために、文字通り一生をささげつつ永眠した。同月29日本学前庭で学内葬が行なわれた。連日空襲警報がなる戦時中最悪のときであったが、学内葬の当日は晴天で、空襲もなく中村登を送るにふさわしい日であった。

波乱をもふくみつつ胎生期から立派な教室として完成するまでの初代中村の時代は、終戦を目前に控えて幕をとじた。1946年(昭21)3月には、助教授中村文雄が教授に昇任した。ここに第2代教授の戦後復興の時代に入る。

戦後間なしではあったが、軍医出征中の医局員がそれぞれ戦場で多難の年月にたえ帰学し始めた。研究室も次第に活気を取り戻し始めた。初代教授のフィロソフィーに加えて、教室員や先輩の「和」を強調される中村文雄の人徳は、他学に比して復興が早く、1949年(昭24)には日本耳鼻咽喉科学会会長を努め、1951年(昭26)には、慶応北里講堂で行なわれた日本医学総会分科会で、「鼻内気流と鼻腔機能」と題し、宿題報告を果たし、当時珍しかった、ライカ判カラーで2時間にわたる演説を行なった。代が変っても府立医大健在の印象を与え、当時の教室員は2年にわたる苦労を一瞬に忘れた感激のシーンを覚えている。これを契機として中村文雄は、内外にその名声がひびき、耳鼻咽喉科学の重鎮として、また大学内のなによりの指導者として位置が次第に固まってゆく。研究指導面でも、先代の遺志をついで新しきものの開拓に留意し、内耳の組織病理の研究は聴中枢へ、また電気生理学的手段がいち早くとり入れられ、形態学は組織化学へ、さらに内耳の生化学へと進展し、発声の電気生理学的研究とともに幾多の教室スタッフと苦を共にしながら、病める嬰児の治療を指向する聴覚の研究へと集約されてゆく。

1957年3月より9月まで、欧米出張を命ぜられ、これらの業績を発表し、海外でもその真価を認められたことになる。

帰国した秋、その年はちょうど教室の開講50年にあたる。本館3階の記念式会、岡崎の細川別邸でパーティーがもたれた。この時には25周年と同じく、先輩の思い出をつづった冊子が発行され、当時の写真のネガも教室員の努力で保存されている。

臨床面で、戦後著明な変化が起った。ペニシリンなど抗生物質の出現である。その夢のような効果は、耐性菌で満ち満ちている今日では想像できないほど素晴らしいものであった。

殊に1949年(昭24)4月、厚生省より、初めてストレプトマイシンが1症例40gずつ試験的に配布されたとき、永年、耳鼻科医が苦しめられた喉頭結核が対象であるだけに、その効果に文字通りぎょう天したものである。ストレプトマイシンは聴覚の副作用を残しながら、耳鼻科より喉頭結核を文字通り一掃した。また、戦後しばらくして施行されたジフテリーの予防接種は、耳鼻科よりジフテリーを殆んどなくした。かつて入院が常時100人を占めていた耳鼻科も医学の進歩によるジフテリーと結核の消失のために入院患者がへり、耳、鼻、咽喉頭の炎症、腫瘍の手術が化学療法に助けられて、より確実に施行できる時代に入ってゆく。それとともに耳鼻咽喉科は次第に専門細分化し、分科会的な学会の洪水になやまされる時代をむかえる。

1958年(昭33)教授中村文雄は附属病院長に、同年9月には第7回国際気管食道学会で国内日本人として初めてのグールド賞を受賞、文部省の各種委員を努めながら、海外出張も度重なり、1962年(昭37)3月には本学学長に就任、以後5年にわたり、臨床棟の改築の基礎交渉が確立された。1968年(昭43)には学術会議会員をつとめるなど、学の内外での活躍をしながらも、一人の医師として、指導者として日々の診療、手術を疲労をかくして努めていた。1971年(昭46)3月末、停年退職を向かえ、初代におとらぬ大きい功績を残して25年間の教授現職を退いた。25年間に500に余る論文が発表されており、今更ながら初代、二代の両中村教授の築いた偉大さを感じる。人の非を真向からせめることなく、暖く自分のふところにだきこんでゆく人徳は、この25年中村文雄に共に学んだ200人を越える耳友会員に忘れ得ぬものであろう。

1970年(昭45)6月16日、教授中村文雄の後任として助教授水越治が昇任。研究態勢、教育態勢がすでにととのっているため、現スタッフ、助教授中野友博以下は、他学に比べて極めて優位にたつ。1971年(昭46)5月、教授水越治は、日本耳鼻咽喉科学会で宿題報告「内耳有毛細胞の病態」を担当、中村教授時代から続けられていた聴覚問題に正攻法でとりくみ、同年、さらに2つの学会を担当しながら、1972年(昭47)、創立百周年を20数名の教室員と祝った。

(文責 水越 治)

## 神経精神医学教室

京都府療病院は1872年(明5)栗田口青蓮院内に開設され、ドイツ人医師 Junker von Langeegg (在任1872~1876年)が教師として招聘され診療と医学教育に当たった。1875年(明8)禅林寺の前管長東山天華らの努力により、南禅寺方丈内に京都府癲狂院が創設された。院長は真島利民で Junker, 神戸文哉, 三上天民らがこれを補佐した。これはわが国最初の公立精神病院である。この癲狂院には護床室というものが設けられ、四壁を当時極めて高価な弾力膠エラスチカゴムで被覆し、興奮患者が自らの身体を傷つけるのを防いだ。また癲狂院規則第15条には「患者ノ症緩ナル者ハ養生ノ為ニ是迄手馴タル職業ヲ為サシムルコトアルヘシ」と定められており、また1877年(明10)には、癲狂院患者教則および工場規則が制定されたことからみて、日本における(最初の)作業療法が癲狂院で創始されたといつてよいであろう。このことは、今日の精神障害者の診療に従事しているものにとっては、あえて特別の興味の対象にはならないが、精神障害者を狂人よばわりし、もっぱら治安維持というかたくなな発想からひたすら拘束することのみに専念していた当時を思えば、その卓見は瞠目にあたいするといえよう。このように当時としては病室の構造、管理運営の面からもまことに細かい配慮がなされており、そのような中ですでにこの頃からわが精神医学教室の母胎が培われていたことは当教室の誇りでもある。

Junker のあと、オランダ医師 C. G. van Mansvelt (在任1876~1877年, 明9~10)、ドイツ医師 Heinlich Botho Scheube (在任1877~1881, 明10~14)が、それぞれ教育、診療にあたった。当時教員であった神戸文哉は、精神医学を講ずると共に、1876年(明9)イギリスの Henry Maudsly の著書を翻訳し、「精神病約説」全3巻として出版したが、これはわが国における西洋精神医学の専門書の嚆矢である。

1881年(明14)の京都癲狂院の入院患者は163名で、その診断別は癲狂(mania) 61, 自尊狂 12, うつ憂狂(melancholia) 29, 德行狂(moral insanity) 13, 癡狂(monomania) 19, 酒癖 6, 失神(dementia) 15, 麻痺狂(general paralysis) 1, 未診定7となっている。これらの診断名は現代の精神医学用語とはおよそかけはなれたものであるが、当時の精神医学の体系の一端をうかがい知ることができよう。

さて、癲狂院入院患者は、1875年(明8)に82名より年毎に、132名, 152名, 203名, 268名



と増加の一途をたどり、14年には163名となったが、元来当院の運営経費は篤志家の寄附によって賄われていたので、遂に収支あいつぐなわず、1882年(明15)、わが国最初の公立精神病院は、開院後わずか7年で廃止され、その設備は私立京都癲狂院(現、川越病院)にひきつがれた。

ここで1879年(明12)の癲狂院の経費をみると、歳出2,910円95銭に対して歳入は1,616円86銭にすぎず、そのうち寄附が約半額の812円31銭をしめている。

1894年(明27)になって、東京帝国大学より、島村俊一(在任1894~1910年、明27~43)が教諭として迎えられ、神経病学、精神病学、法医学を担当し、翌1895年、神経精神科を独立させ、これを主宰した。この時から正規の講座が開講されることになった。1897年(明30)鴨川堤に40床の精神病舎が新設完備され、これはわが国医学校において精神病舎が設置された嚆矢である。島村は東京帝国大学を1887年(明20)に卒業し、榊俣教授に師事したのち、1891年(明24)から1894年までドイツに留学して「橋部及脳脚部、特に動脈神経核の血液供給」の研究をなし、1906年(明39)には、上行性神経炎に因する脊髓炎、所謂片山地方病の病理解剖、動脈エンボリー及ジャクソン氏癲癇の原因追求、広汎性硬皮症の病理解剖などの業績を残した。また、臨床的名声は隆々たるものがあって、関西の医界を風靡し、島村の診療を受けた者は先生を慈父のごとく尊敬したという。1900年(明33)から1910年(明43)まで校長に就任したが、当時京都帝国大学医学部が新設され、在来の教職員はあげて大学に栄転し、ひいては京都府にも本学廃止説がもちあがるなど、わが校存亡の危機にさらされることになったが、島村は奮起して府当局者を説得し、遂に存続と決定させ、陣容整備に努力し、京都府立医学専門学校を完成させた。殊に院校全部の改築と改良をなしとげて後日、医科大学に昇格する基礎を確立した。

1900年(明33)、教室の助手であった土屋栄吉は岩倉病院(それまでは同地に、わが国最初の精神障害者のためのコロニーがあった。)の院長となり、1945年(昭20)、中部防衛軍精神病院として接收せられるまで同病院の発展に尽力し、また本邦精神病患者療護の発達に貢献した。1912年(明45)、助教諭野田浦弼は、第2代教諭に就任(在任1912~1926年、明45~大15)。1917年(大6)~1920年(大9)まで精神病研究のためアメリカに留学。1922年(大11)花園分院が新設された。同院は主として、精神神経病者を收容し、



神経精神科学教室 診察室 (1913)

患者収容数 200 余名で、近畿随一を誇る最新式の設備と収容数を有する精神病院と目された。この時から、精神医学教室とその研究設備は花園に移転した。

1926年(大15)助教授久保昱二郎は第3代教授に就任〔在任1926年(大15)～1951年(昭26)〕、教授久保は主として、神経病、神経生理の研究にあたり、数々の業績を残した。助教授松岡龍三郎は、主として生化学研究を、講師小谷庄四郎は精神病理学、大脳病理学の研究を行なった。その他、この時期の研究は枚挙にいとまがなく、久保教授定年記念神経精神科研究業績一覧の中におさめられている。太平洋戦争も末期に近づいた1945年(昭20)春、花園分院本館から出火して本館を全焼、幸にも入院患者に異常はなかったが、研究設備の損害は甚大であった。当時の辛苦に耐えぬいた久保名誉教授は現在も奈良県に健在である。

1952年(昭27)助教授小谷庄四郎は、第4代教授に就任〔在任1952年(昭27)～1965年(昭40)〕。小谷は京都大学心理学科を卒業後本学に学び、講師時代には予科で心理学を講じた異色の人である。その研究は広範多岐にわたっており、大脳皮質機能の実験的—臨床的研究、大脳病理学では、第40回日本精神神経学会総会で失認について、宿題報告を行なうと共に数々の有名な論文を発表した。精神病理学では、北林忠正、生駒春英、水野精一助手らと共に「精神分裂病の人格構造に関する実験的研究」を行ない、ライフワークともいえるべき“A dynamic theory of schizophrenia”を発表した。また、講師東昂、助手和気正人らと共に組織学的研究を行ない、電気生理学的研究においては、助教授水野精一、講師酒井泰一らと共に数々の業績を残し、この分野は教室の伝統として今日までひきつがれている。当時の教室からは多くの教室員が輩出し、現在臨床の第一線で活躍している。小谷名誉教授は、現在追手門学院大学教授で心理学を担当している。

1966年(昭41)、北海道大学助教授飯塚礼二は、第5代教授に就任〔在任1966年(昭41)～1970(昭45)〕。飯塚は神経病理学、なかでも脳炎と中枢神経系の脂質代謝の領域での研究が多く、就任するや教室に新風を吹込み、各研究分野の拡充、あるいはまた、診療部門の改善に精力的な活動をおしまなかった。1967年(昭42)、かねてより懸案の精神科病棟の移転改築が実現され、教室、研究室および病棟を含めて本院構内に移転し、花園分院の名で親しまれていた病棟跡は、現在府立体育館となっている。昭和42年より新たに心理担当者が定員化され、臨床心理学の分野での活動が定着した。

ここで、特筆すべきこととして大学紛争をあげなければならない。1968年(昭43)より全国的に吹きあれた学園紛争の嵐に直面し、教室でも例外でなく、当時若干の医師グループによって始められた「闘争」がつつぎと無給医グループから助手層へと発展し、医局解散宣言を行ない、講師以上を残して精神科医師連合が結成され、学位制度廃止が決議され、やがて診療拒否、宿直拒否などの反体制運動へと展開し、講師以上の教室員によって辛うじて診療

が維持され、入院患者は激減し、各病舎には一時わずかに2～3名の入院患者を数えるのみという事態に至った。1969年(昭44)9月、大学当局の紛争収拾と正常化への動きが活発となるにつれて、教室内での反体制運動も下火となり、青年医師連合に属する医師および中堅助手層の大半がそれぞれ辞職した。1970年(昭45)、かねてより要求されていた無給医制度廃止の線にそって、修練医、研修医制度が新設されたが、教室員は激減した。そのような中で、飯塚は1970年(昭45)退官し、現在順天堂大学教授。このような空前絶後ともいべき激動の中で教室は、制度、構成員とも大幅な変革を余儀なくされ再建への努力がなされつつあるが、現在も紛争の傷痕を残している。

1971年(昭46)、加藤伸勝は松沢病院より第6代教授に就任。加藤は1950年(昭25)本学を卒業後、松沢病院に勤務しつつ脳の生化学的研究や病的醗酵、精神病者の社会復帰に関する数々の業績をあげており、現在教室の新しい研究体制を備えるために、精力的な努力を行なっている。

助教授浮田義一郎は神経病学、特に脳循環や脳血管の研究を行なっている。

1972年(昭47)、かねてより空席の講師として、東京大学より高橋三郎が着任し、脳の生化学的研究、特に精神内分泌学的研究を行なっている。

その他、助手の門林岩雄は電気生理学的研究を、山根秀夫、佐藤能史と森律は組織病理学的研究を、宮本宣博と近藤文雄は精神病学の研究を行なっている。

1965年(昭40)より1971年(昭46)の間に、3代の教授交替と前述の大学紛争、研究室病棟の移転改築など、まさに激動と変革の歴史が6年間に圧縮されて今日に至っており、それ以前の歴史とは余りにも強烈な対照をなしているといってもあえて過言ではなからう。今後教室内外の有志の熱意と努力によって、より新しい充実と発展が切に期待される次第である。

#### 資料

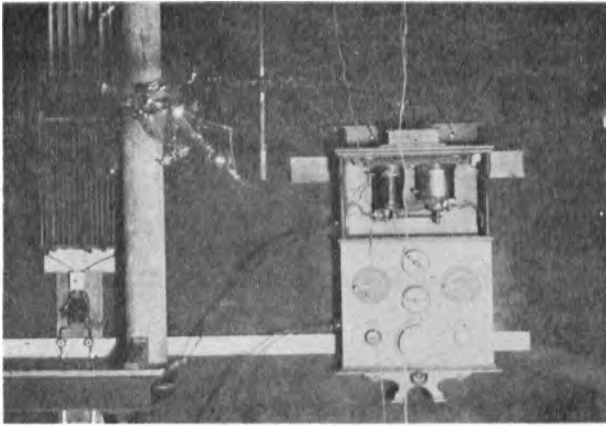
- 土屋栄吉博士還暦祝賀論文集
- 久保教授定年記念神経精神科学教室研究業績一覧
- 京都府立医大八十年史

(文責 近藤久雄)

## 放射線医学教室

京都府立医科大学の放射線医学教室は1928年(昭3)4月13日、後藤五郎初代教授の下に、理学的診療学講座として開講された。

従来本学における放射線診療は、1905年(明38)京都府立医学専門学校時代に、初めて外科にレントゲン装置が設置されたのに端を発し、以後外科教室の下に従属的な状態にあったが、



X線装置(1912)

大正の終りより昭和の初年に当り、ようやく独立した放射線診療専門部門の必要性がわが国の医学界でも認められるようになってきていた。

本学でも助教授後藤五郎が1925年(大14)から1年間東京大学物療内科、慶応大学の藤浪教授の放射線診療を研究、見学。帰学後1926年(大15)7月に診療科としてのレ

ントゲン科の独立をみ、助教授後藤が部長を命じられていたが、1928年(昭3)講座として発足したわけである。これは講座としては慶応大学、大阪大学に次ぎ、わが国で3番目に古い放射線医学教室ということになるわけで、その後、現在に至るまで、わが国放射線診療上に常に指導的立場にあり、種々の貢献をしてきている。

開講当初の教室構成員は教授後藤、助手大岩憲一、技師福岡太郎、北野一男、江崎辰夫、看護婦高橋やく、越本ひしみであった。

当初購入された装置はシーメンス社製深部治療装置スタビリボルト「S」号、線量測定装置アイヒスタンドゲレーテ、ゼーマン・スペクトロスコープなどであった。

### 構成員の主な変遷

1930年(昭5)4月 横井勝朗 卒業入局。1931年(昭6)11月 山田喜三(昭3阪大卒)入局。1931年大岩憲一 講師に任命。1932年(昭7)12月 金田弘 卒業入局。1933年(昭8)11月 大岩講師 病のため辞職(昭12.7.16死亡)。1934年(昭9)4月 中村正義、太田清輝、大坪大助、卒業入局。1936年(昭11)1月 金田弘 講師に任命。1939年(昭14)4月 古市(後青山と改姓)大三、入局。1941年(昭16)2月

横井勝朗 講師に任命。1942年(昭17)2月 内田秋夫 入局。1944年(昭19)3月 金田弘 助教授に任命。1944年(昭19)8月 古市大三助手講師となる。1946年(昭21)1月 金田弘 第一日赤に移る。1947年(昭22)8月 前田盛正、佐藤敬明 卒業入局。1950年(昭25)1月 横井勝朗 助教授に任命。1950年(昭25)10月 野田喜夫 入局。1951年(昭26)4月 金田弘 信州大学医学部、放射線科教授に任命さる。1952年(昭27)5月 奥孝行 入局。1952年(昭27)7月 村井知也、猪原和之 入局。1953年(昭28)5月 南周子 入局。1957年(昭32)6月15日 後藤教授 停年退職。1958年(昭33)4月 金田弘 教授に任命。1958年(昭33)5月 前田盛正 講師(非常勤)に任命。1963年(昭38) 前田盛正 助教授に任命。1970年(昭45)3月 金田教授 停年退職。1971年(昭46)3月 前田盛正 退職。1971年(昭46)4月 村上晃一 教授に任命。1971年(昭46)6月 浦野宗作 助教授に任命。1971年(昭46)10月 浦野宗作 退職。

我が国における大学放射線医学教室は人員の不足のためもあり、必ずしも欧米各国にみられるように、放射線診療の全域にわたっての実際の診療を分担していないものが多かった。もちろん、当初より学生の教育面では、十分にその責任を果たしてきているが、診療、研究の面では、偏った内容のものが多かった。ところが本学の放射線医学教室は、教授後藤による開講以来、決して多くない教室員にかかわらず、努力と周囲の各教室の理解のもとに、放射線医学の全域にわたり、教育、診療、研究の各方面に及んで円満な発展をとげてきており、わが国ではまれな存在といわねばならない。特に地元わが国の放射線機器の製作のパイオニアである島津製作所があるためもあって、常にその時点での最新鋭の装置を開発し設置してきている。

すなわち近年では高エネルギー放射線治療装置として  $^{60}\text{Co}$  遠隔照射装置を 1955年(昭30)に設置、またX線テレビジョンも早々に1964年(昭39)に購入され現在でもなお活躍している。また現在の放射線診断棟は1963年(昭38)に建設されたが、当時としては、技術者専用の裏廊下の設置、制御盤の撮影室外別室部分への設置など、最新の理想的なもので、全国から見学、平面図の要求などが100件以上に及び、以後のわが国の放射線科の設計に大きな影響を及ぼしている。また自動現像装置も当初より大型同型のものが2台同時に設置され、以後のフィルム処理に役立ってきている。

しかしながら、年々撮影枚数も急増し、現在では、これらの設備でも、すでに手狭となり、またその後さらに新しい装置も開発されて来ているので、100年を新たな時代の出発点として、本年より装置の更新、拡充が重点に行なわれ始めている。

最近の年間のフィルム使用枚数の変化は次の通りである。

1951年 1,808ダース    1956年 2,707    1961年 5,965    1966年 8,473

1971年 11,167

すなわち過去20年間に約6倍、過去10年間に約2倍の増加を示している。また治療件数も次第に増加して現在年間延10,000件に近く、公立大学中2位をはるかにひき離して、最大数

となっている。

「日本放射線医学史考」：わが国の放射線医学資料の集大成とも言うべき本書は、当教室後藤五郎名誉教授の十数年の努力の結果生まれたものである。すなわち1958年(昭33)に日本医学放射線学会より依頼を受けてから、広範な関係資料の蒐集、とりまとめ編集の結果、1968年(昭43)4月、まず明治大正篇303ページが京都市で開かれた第27回日本医学放射線学会総会の記念として刊行され、次いで「昭和篇(1927~1945年)」683ページが1969年(昭44)10月東京で開催された第12回国際放射線医学会議を記念して刊行された。2巻合せて1,000ページに近いこの大冊は実にわが国の放射線医学の創生の頃より、第二次大戦終了までの全貌を明らかにした名著であり、永久に伝えらるべきものである。なお後藤名誉教授在職中の教室の概史は、同教授の筆になる「わが教室の足跡」に詳しい。

教授金田の着任以来、さらに当教室の名をわが国の放射線学会で高くしたのは、節照射法と、とくに肺癌治療への応用であった。節照射法は在来、深部治療装置に使用されて、深在性の難治腫瘍治療に応用されてきていたのであるが、さらに、その応用を $^{60}\text{Co}$  X線遠隔照射にも拡大し、肺癌の治療成績を著しく改善した。このような治療成績の向上は単に肺癌だけでなく、悪性リンパ腫、頭頸部腫瘍その他広く悪性腫瘍全般に及んだが、これは、当教室での放射線生物学的な面での放射線治療の理論的な裏づけのための研究を盛んにすることとなった。このため前田盛正をはじめ多数の教室員が米国テキサス州の M. D. Anderson Hospital に留学し、この方面の協同研究を行なってきた。

今後、当教室創設の当初よりの方針であった診断、治療さらに核医学を合わせた、放射線医学の全般にわたってのバランスのとれた発展と、その総合とが、100周年の時点に当たっての再出発の課題であろう。(文責 村上晃一)

## 麻酔学教室

(附. 中央手術部)

河村謙二は第2外科教室教授に就任早々、蜷川知事に建議書を提出し、1日も早く中央手術室(以下中手と略す)をつくるよう働きかけた。とも角手術場改造に関して三外科協議会が開かれたのは1956年(昭31)のことで、翌1957年河村委員長のもと、北川司良助教授が副委員長となり正式に発足した。予算は極めて乏しかった。これまで分散していた各科の手術場を

1カ所を集めてやろうというので、各科もち寄りで使えるものを提供して貰うというとりきめをしたが、結局 sectionalism の壁に阻まれ実行は困難を極めた。

1955年(昭30)河村は塩田亮三、青地修2名の助手に渡米して麻酔を学んでくるよう命じた。外科医にメスを棄てよという命令である。2人は職を辞し同年12月箱根山丸で北太平洋を渡り San Francisco へ向った。1年後、塩田は帰り Succinyl choline,S.C.C. を使っても容易に挿管が行なわれるようになり、同時に開腹、開胸時の筋弛緩はそれ以前とは比べものでなくなった。塩田が助手(学内講師)に任ぜられたのは僅か半年であったけれども、その年に真正正銘の Heidbrink(Stand 型) 313A が購入された。続いて翌1958年(昭33)1月青地が帰り早速中手委員に加えられたが、在米中に弓削院長の依頼で纏めて上申された中手の設計と運営についての理想は殆んど生かされず、1959年(昭34)8月竣工したものは望月名誉教授案になる外廻り廊下式になってしまった。中手の室は合計8つで、それぞれ1つずつ手術台がおかれた。床はすべて電導床で、壁には吸引がとりつけられ酸素が配管された。

手術は当時は8時半に執刀できたが、1966年(昭41)より9時執刀、麻酔は8時に開始となった。8室を午前・午後に分けて各科が定められた曜日に割りあてられた数の室を使う。申込は前々日にする。これを中手婦長と麻酔科で調整する。手術に必要な器械器具はセットに組み手術申込みの際に記入するのである。この為中央材料室(中材)の苦労はなみ大ていではなく、初代森田婦長、上坂婦長、長澤婦長以下スタッフは必死の努力を続けた。

青地は塩田と共に1958年(昭33)年5月から若い医局員、インターンのために毎週木曜日の午後、麻酔学の講義を始めた。20回に亘り毎度タイプされたマニュアルが配られた。その頃、各科からの要請で Heidbrink をゴロゴロ押してガタピシの廊下を婦人科へ、耳鼻科へ、そして眼科へと出張が行なわれ、婦人科の手術場は湿式で床の上を夏は心地よく水が流れた。

わが国で第8番目の麻酔科教室の誕生：

遂にかくて1959年(昭34)7月1日、中手発足を目前にして青地は麻酔科助手(学内講師)となりただ1人の麻酔医師は弓削院長直属という形で、それまで無給であった第2外科講師の籍を離れた。日本で8番目の麻酔科がここに生まれたのだ。同年第6回日本麻酔学会で本学から始めての評議員が出た。

同年8月11日、第1期工事竣工、9月早々各科から麻酔科要員として若い無給医局員たちが集まった。

10月1日、青地は麻酔科部長となり、移転騒動もさめやらぬうちに新手術部は発足した。1960年(昭35)青地のもとにただ1人の助手藤田が生まれた。河村の命令で「1年間青地のもとで働くよう」といわれ、2名はメスを執らずに麻酔に専従することになった。

1961年(昭36)4月、青地は助教授に昇任。当時のスケジュール表(写真)を一見すれば、わ

手術時間表 36年5月30日 火

時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
11:00	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室
11:30	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室
12:00	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室
12:30	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室
1:00	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室
1:30	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室
2:00	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室
2:30	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室
3:00	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室
3:30	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室
4:00	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室
4:30	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室
5:00	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室
5:30	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室
6:00	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室	手術室

ずか2名の麻酔科医と、数名の修練のための rotator ないし関連病院からの医師とで、どれだけの症例をさばいたかが判る。その年6月京大麻酔科、渋谷欣一氏から合同で症例検討をしようという誘いがあり、monthly conference と称して検討を重ねた。これは今日に及んでいる。近畿麻酔研究会を母体として日

本麻酔学会関西地方会が発足したのは1961年(昭36)12月であった。その頃から研究に手を染め始めることができた。漸く臨床検査部長仁木偉瑳夫の援助で臨床研究も進んだ。

1963年(昭38)12月、日本麻酔学会の施行する麻酔指導医第1回認定試験に青地は合格した。次に秋の第2回試験を藤田俊夫が受け、これで本学は2名の指導医がいる病院として学会から認定された。翌年1月藤田は助手を辞し麻酔科 resident として New York 州立大学へ留学した。そのあと後藤幸生が助手に任せられた。1965年(昭40)8月(不完全講座ではあるが)青地を頭に藤田、川口力講師以下4人の助手がそろった。藤田は1966年(昭41)1月帰京した。診療科としての麻酔科は講座となり麻酔学教室と称えられはしたが、1外のみは麻酔を担当することはおろか、手術室にも出入させられなかった。大切な麻酔器も麻酔器具も使われればなしであった。

1966年(昭41)8月、阪大助教授宮崎正夫が教授としてむかえられ、青地は名古屋市大教授として去った。9月末、後藤・安中両名も名市大へ転じ藤田のみとなった。

10月1日、1外より久保・藤本、2外より中路・村田が助手として採用された。藤田は助教授となった。生化学研究が増え、生理研とあわせて2つ、医局、教授、助教授室と形態も揃った。研究設備として青地のときに購入された Astrup 微量ガス分析装置に次いで日立ガスクロマトグラフ、Jarrell-Ash 原子吸光分析器、Ohio 麻酔ガス分析器、Krauer 滲透圧計などが威力を発揮し出した。

研究の主力は水と電解質、ショックと微小循環、酸塩基平衡から麻酔と腎機能、肺機能—肺胞換気と湿度、低体温は独自のものとして注目され続けて来た。1966年(昭41)9月第2回アジア・オーストラリア麻酔学会、1971年(昭46)11月アジア太平洋胸部疾患学会、1972年(昭47)9月第5回世界麻酔学会などにはその成果が世界にとわれた。The 5th World Congress of Anesthesiology は本学100年祭の直前に京都で開催され、宮崎は事務総長と



なり藤田は技術展示副委員長として活動した。この間にも研究は進められ、いたみの追究はペイン・クリニックと共に進んだ。最も新しい吸入麻酔剤 Ethrane は8つの leading departments の1校として研究をゆだねられた。



麻酔風景(1972)

紛争の激しさを加えた1969年(昭44)6月、藤田は New York

州立大学から帰り、7月にまた助教授として復職した。人々は互いに離反し反目し合い、手術室で教授会のメンバーが手術をするときには麻酔をしないなどというビラが貼られてあった。教授は夜警し当直をしなければならない破目にあった。

漸くおちついた1970年(昭45)立石、奥野は相次いで渡米した。紛争の傷あとはいたかったが、学園が平静となるにつれ、研究好きで仕事好きの若い医局員が増えて来た。

1972年(昭47)8月、第二日赤へ吉田が赴任した。懸案の関連病院への出張問題の端緒となった。

### 中央手術部の変遷と発展

麻酔科の発足と進展とともに各科の若い中堅スタッフによって中手の運営は民主的に進められていった。

看護婦は発足時わずか18人であったが、1967年(昭42)4月より7名定員増加が決まった。また2名の補助看護婦が働いてくれるようになった。婦長は初代井上婦長、白井主任、2代亀田婦長、現3代目津田婦長、1972年(昭47)7月現在までに延べ98名のナースが働いた。



中央材料室風景(1972)

婦長を含めて18人のスタッフで

8室の手術室を運営するのは大変だった。1人の休暇の余裕もない状態で、1966年(昭41)には病欠者が続出し、4人の看護婦が職場を去った。このような状態で同年ついに三交替制勤務が実施された。

1962年(昭37)、松下電器から Philip 製医用(マンモス)カラー TV が寄贈された。藤田技師は苦勞して調整し、医大祭や医学会総会に供覧、その生々しい映像をうつし出して会場を埋める人たちを唸らせた。ボイラー室や配室酸素供給など管理係の技師奥村は電話技師北村らと共に、停電のさいも人工心肺バイパスの器械が止まらぬように苦勞しつづけた。

(文責 藤田俊夫)

## 歯科学教室

開講の経緯と時期については、校友会雑誌74号〔1916年(大5)5月25日発行〕32ページに「本永教諭を迎ふ」という見出しで、「医育機関に口腔外科学講座設置の必要は方今医界の輿論となれり、吾校他専門学校に卒先してその実施を決行せり、しかも茲に本永教諭の如き少壯鋭気の学者を得たるは大に吾人の誇りとすところなり、教諭は大正2年京都大学に学を経へ、東大に於て石原博士の下に研究して今日に及ぶ、その造詣頗る深し、教諭を得たる吾校歯科部の前途実に洋々たりといふべし」と載っている。

次に教諭、教授など構成員の変遷と当歯科に関する重要事項を年代順に訳すると以下のようである。

1916年(大5)4月、本永七三郎、教諭(後、教授)に任ぜられ、歯科学講座を担当する。1916年(大5)6月、診療を開始する。1933年(昭8)4月、講師牛窪武男、助教授に任ぜられる。1935年(昭10)4月、本永七三郎教授、日本歯科口腔外科学会専務理事に推される。1938年(昭13)4月、教授本永七三郎、第10回日本医学会、第31分科会々長に推される。1938年(昭13)8月、新実淳、講師を囑託され、代って歯科部長心得を命ぜられる。1938年(昭13)12月、井尻萬太郎、講師(後、助教授)に任ぜられ、代って歯科部長を命ぜられる。1947年(昭22)6月、京都大学口腔外科助教授美濃口玄、講師を囑託され、代って歯科部長を命ぜられる。1948年(昭23)4月、講師竹田三郎、代って歯科部長代理(後、部長、助教授、教授)を命ぜられる。1951年(昭26)6月、開講35周年記念学会を開く。1955年(昭30)4月、助教授竹田三郎、第14回日本医学会、第31分科会副会長に推される。1956年(昭31)1月、講師小野進一郎、代って歯科部長代理(後、部長)を命ぜられる。1961年(昭36)4月、京都大学口腔外科講師小野克己、客員講師を委嘱される。1966年(昭41)6月、歯科創設50周年記念式典を行なう。1968年(昭43)2月、助手増田幾久雄、

歯科副部長を命ぜられる。1970年(昭45)4月、助手山本美朗、代って歯科副部長を命ぜられる。

教育(カリキュラム)の変遷についてのべると、開講当初より、1952年(昭27)の新制医科大学の発足まで、学則により歯科学は必須専門科目であったが、その後、随意(自由)科目となり今日に至っている。講義は歯科口腔外科学として、専門学校時代には、3年生の第2、3学期に1週1時間なされ、臨床講義は4年生に行なわれた。大学昇格後、講義は3回生に臨床講義と外来実習は4回生に行なわれていた。新制医科大学になって随意(自由)科目となったが、講義時間はなく、1962年(昭37)になって5回生の第2学期に約30時間行なわれることになった。

講義の綱目は次の通りである。

1. 歯、口腔および顎の生理解剖
2. 齲蝕および歯周症
3. 顎の炎症および腫瘍
4. 口腔の外傷および奇形
5. 口内炎および歯肉炎
6. 口腔のその他の疾患
7. 口腔の症候学
8. 歯の欠損の補綴および顎補綴
9. 口腔外科麻酔法および抜歯術
10. 口腔衛生

さて一般的に、医育機関における歯科学講座は、学校教育法に医科大学と歯科大学があり、医療法に医師法と歯科医師法があるので、それらの谷間にあり、不利な立場である。本学でも歯科学は随意(自由)科目であるが、医科大学においても歯をはじめ口腔の医学を軽視してよい筈はなく、速やかに必須専門科目となし、講座をおくべきと考える。近時顎顔面の外傷、腫瘍の処置や、兎唇口蓋裂の治療上、歯科学の理論と実際を応用することが多くなっているのでなおさらである。

現在全国の医学部、医科大学で歯科口腔外科の講座のあるところは約4分の1の14校で、本学のように診療科だけのところは16校である。

なお戦前の法律では、医師は一定の期間(1年以上)歯科を専攻すれば内務大臣の許可で歯科を標榜できたので、本学卒業生の約10名がこの資格を得た。

研究設備としては、顕微鏡、天秤、遠心器、孵卵器、マイクロームなど基礎的なもののほか、漸次、光電比色計、ワールブルグ検圧計、pHメーターなどが備えられた、最近口腔の近接撮影装置を購入した。

診療器械器具材料と診療内容についてのべると、当初はユニット、治療椅子がそれぞれ3台で、エンジンは足踏式で極めて原始的であったが、その後「モリタ」のF型ユニットなどが買いたされて、それぞれ7台となり、エンジンはモーター式となった。X線装置も購入された。1966年(昭41)より順次、近代的なものにと、タービン式のエンジンの付いた「モリタ」のV型ユニットに更新した。昨年新臨床研究棟に移ってから、さらに椅子を3台増やし、附属物をつけて現在10台で診療を行なっている。器具材料の改良につれて治療技術は進歩したが材料面で義歯材料の蒸和ゴムが合成樹脂に代り、印象材料の合膏やモデリングコンパウン

ドが、アルギン酸塩やラバーに代り、モーターエンジンがタービン式に代った。補綴物では縫成金冠が鑄造冠となり、金属焼付陶材冠ができるようになったことは大きな変遷である。

歯科の主要疾患である齲蝕と歯周症は今も昔も変わらず、また戦争中の砂糖不足による齲蝕の減少も、臨床面には影響はなかったようである。しかし近時増加してきたものに顎骨骨折と顎の腫瘍があるが、歯科の割当ベット数が極めて少ないので入院が困難で、入院患者数は年間10名程である。ただ1969年(昭44)の大学紛争の際は他科に空ベットがあったので、それ



歯科学教室 診察室 (1972)

を借り年間32名入院患者があった。なお歯科は紛争の影響を殆んど受けなかった。

診察場は当初旧病院玄関すぐ西の元皮梅科の跡に設けられ、その後北側に技工室が造られたが、1961年(昭36)10月より工事のため前内科跡に移り、今回新臨床研究棟に落ち着いた。医局は旧木造病院玄関の上、2階の中央やや東に

あったが、今回移転まで、工事中、19号病舎におかれていた。研究室の1室は旧医局のあった2階の西方や、旧2号病舎の両端、9号病舎の地下などを転々していた。他の1室は旧医局の少し東から南に突出したところがあり、部長室はこの突出したところの端にあった。部長室の窓外に椋の大木が1本あり、1934年(昭9)の室戸台風で傾いたが、元に戻されて緑をなした。今回の工事のため伐られたが、それまではハトやスズメのよい遊び場であった。

さて、ここで歯科に特徴的なことをのべると、まず前述のように今では診療料としてのだけの存在であるが、これはさしおいて、次に歯科在籍者のほとんどが歯科出身者で、本学出身者は極めて少い。しかし歯科も広意の医師の1分科と考える時、何もこだわることはない。まして歯科の1分科である口腔外科学は医科と共通の領域であるのだから。

過去の在籍者のほとんどは外部からの来室者であり、研修の後、また外部へ出ていったが、それらの中で城西歯科大学学長柳生嘉雄、愛知学院大学歯学部教授西塚忠義、大阪歯科大学教授多和敏一、日本歯科大学教授丹羽輝男、台湾中山医科大学前教授陳柑菓や、日本歯科医師会副会長をした上野勇、前田勝、同会監事をした中川市郎らがある。同窓会は歯科の診療が始められた1916年(大5)の6月5日の6、5をとり「緑伍会」と称していて、若々しい仲間の意味を兼ねている。現在会員数は物故者を含めて396名である。会誌も「緑伍」となづけ、1928年(昭3)より、戦中戦後一時中止したが、ほぼ毎年発行していて、教室の歴史に関

する記事，論文集，業績集や回想記などを載せている。なお当歯科と直接関係はないが，本学の卒業生で歯科界で活躍された人々は，大正の初め陸軍三等軍医正で「除歯痛法」という著書を出した岡島格，満洲医科大学歯科の教授をした佐山光章と京城帝国大学の教授で歯科の解剖学書を出した津崎孝道がある。

最後に研究概史であるが，初代部長本永七三郎は口腔底の解剖を究めたが，その後，当歯科では臨床的な小研究はできるが，大きな特に基礎的な研究はできにくかったので，他教室でなされたものが多い。牛窪武男の「口腔ヨリ分離セル連鎖状菌ノ研究」をはじめ微生物学に関するものが多く，竹田三郎，前田嘉正らのものが続いている。真崎義男は病理学教室で「循環障害ガ歯牙並ニ歯周組織ニ及ボス影響ニ就テノ実験的研究」を行なった。戦後，齲蝕予防剤フッ素に関する基礎的研究が鈴木能弘らにより行なわれた。在籍者で学位を得た者は80名，内58名が本学から得ている。現在もわれわれは若干研究を行なっているが，当歯科は興味ある臨床例が多く，未だ成書に明確に載っていないことで，今注意していることは，口腔領域への転移腫瘍は下顎に多いということと，顎関節強直症と股関節異常(主として脱臼)の合併をとときどき見るということである。

(文責 小野進一郎)

## 臨床検査部

大学附属病院の検査は，臨床各科がそれぞれ行なうシステムであった。これは日本の医育機関がドイツ医学の教育，医療システムを導入し，それにならって日本の医育機関を創立し，それを育てていったからで，京都府立医科大学もその例外ではなかった。主治医は自分で患者の尿・便，血液の検査を行ない，一部の細菌検査，病理組織検査など特殊なものにかぎり，基礎教室の助力を願っていた。

1939年(昭14)5月には従来細菌学教室にたよっていた細菌・血清(主としてワッセルマン反応)検査は，教室から独立して，細菌検査所として発足し，現在の23号屋上にて業務を行なうようになった。初代の所長は教授常岡良三で，技師2名，小使1名の人員構成であった。

1952年(昭27)には同位元素研究室，電顕室が新設され，基礎においては共同研究施設の考えが実現しているが，附属病院ではなおその気運はなかった。

1955年(昭30)頃から附属病院第2内科では心電図検査を行なっていたが，1957年(昭32)頃には各科からの心電図検査の依頼があまりにも多く，心電図係の内科無給医1人の手ではど

うにも処理できなくなってきた。同年4月、ときの病院長弓削経一、医事課長福田壹一らの努力によって、当時の17号(1階)の特等病室の1室を心電図室にあて中央心電図室として、事務から女子職員2名が転属となって各科の入院、外来の心電図検査を行なうようになった。同年6月にはさらに隣接の特等病室をあわせて2室とし、基礎代謝、呼吸機能、血清蛋白電気泳動、血清電解質などの検査をはじめ、さらに脳波、筋電図、心電図などの検査ができるようになった。同年7月には中央検査システムの最初の助手として、仁木俣瑳夫が発令された。当時の検査件数は心電図15件~20件、脳波3~5件、電気泳動10件程度であった。

1959年(昭34)は検査室にとって大きな転換期であった。放射線科、中央手術部などが設けられる第一期工事の4階は、中央検査科にあてられ、病理、血液、生化学、尿、便、一般検査の各室のほか、細菌・血清検査室の4階への移転、また附属の採血室、洗瓶室などが入るよう設計が進んだ。

ここで国内の他の病院の検査中央化の現状をみると、戦時中陸軍病院であった国立東京第一病院は戦後にいち早くGHQの指示によって検査の中央化を進めていた。当時は細菌検査に従事する技術員(戦時衛生兵であったもの)以外には検査技師は全く教育されておらず、苦勞が多かった。1953年(昭28)東大医学部の機関研究「診断の精密迅速化」が東大での検査中央化をうながす結果となり、1954年(昭29)第一期の建築完成と同時に臨床検査部(のちに中央検査部と改称)が開設された。文部省が正式に認めたのは1959年(昭34)4月であった。東大以外にも国立大学では検査中央化が進みつつあった。京都大学も約1年おくれて、これにつづいていた。

こうした事情のなかで進められた本学の検査中央化が、いかにはやかたったかを注目しなければならない。当時の学長弓削経一、病院長中村文雄、医事課長中川忠一らの努力によるところが大きかった。

1959年(昭34)4月には薬科大学の新しい卒業生や、臨床各科で研究補助員として働いていた人たちを集め、新しい検査室作りの準備が始められた。これらの技術員の教育と、生化学検査法の検討には、生化学教室の講師上田潔が兼任であったり、一般検査については北里宏、血液は杉島聖章が非常勤務であったり、賃金7,000円であった。創設当時助力し人々の労力と報いられることのすくなかった一端がこれをもってうかがえよう。1959年(昭34)9月11日、第一期工事の完成とともに、中央化検査システムは発足した。(当時臨床検査科とよび、後に臨床検査部と改称)。ここに病理検査室、生化学検査室、さらに従来の細菌検査所が移転・統合された細菌検査室が出来上り、採血室、洗瓶室も仕事をはじめた。新設当時の設備費は300万円で、各室とも必要最小限度の設備すら十分でなかった。開設と同時に部長として仁木が助教授に任命され、講師三宅清雄が病理学教室から専任講師として転任した。血液検

査、一般検査員は人員の関係から業務の開始がおくれ、12月1日となった。1959年(昭34)には技術員、洗瓶室職などあわせて18名であった。生化学検査室、上田潔講師兼任。細菌・血清検査室・谷野輝雄講師兼任。血液検査室・杉島聖章非常勤医員。一般検査室・北里宏非常勤医員がそれぞれ室主任となって検査室の運営にあたった。1960年(昭35)には同位元素検査

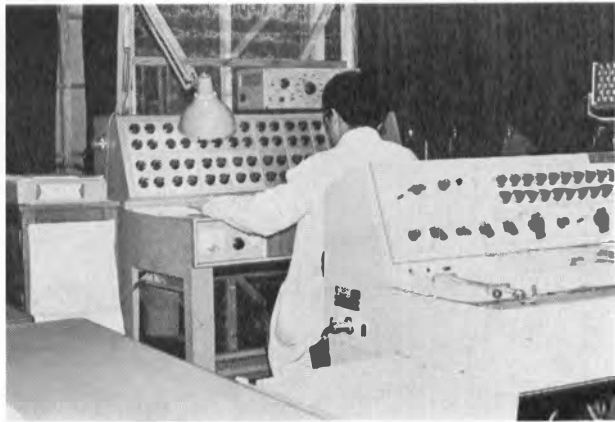
臨床検査件数表

	昭35	昭36	昭37	昭38	昭39	昭40	昭45
生化学検査	70,739	103,181	131,320	150,803	157,704	177,089	215,881
血液検査	62,326	80,099	90,109	101,274	111,876	120,197	143,297
一般検査	54,056	62,154	76,177	75,586	139,800	142,956	127,999
細菌検査	23,112	25,000	32,314	37,253	36,676	45,024	54,464
生理検査	7,753	12,164	12,987	15,963	16,579	15,117	18,851
病理検査	3,616	4,645	4,165	4,403	5,950	5,853	7,253
同位元素検査	556	549	533	733	1,665	2,576	4,846

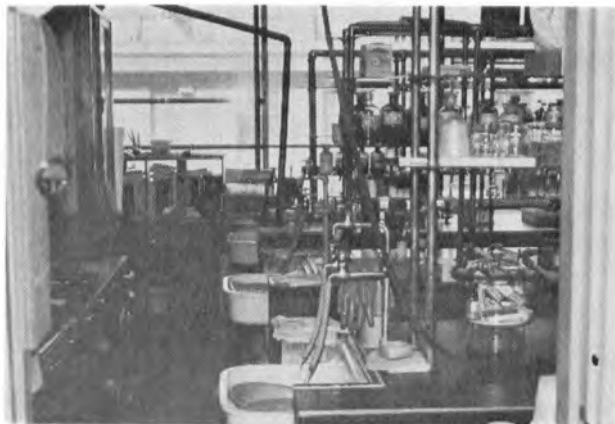
室が23号舎上に開かれた。また米国から帰国した関政文が加わった。

また従来3つの内科で持ち回りにしていた学生の検査実習が1960年(昭35)から臨床検査科の仕事となり、教育面でも仕事がふえた。1961年(昭36)には仁木以下教育職、専任技師は総員6名であり、1966年(昭41)から助教授1名、講師1名、助手1名、医師技師5名の定数となった。これは1972年(昭47)まで続くが、1972年(昭47)6月には臨床検査部が府の正式の組織として認められ、この時点で医師技師は助手にきりかえられた。

検査技師の総数をみると、昭34年当時、洗瓶室の職員も含め総数18名であった。昭34年には衛生検査技師法が施行され、このときよ



臨床検査部生理部門(1972)



臨床検査部生化学部門(1972)

り以前に2年以上の検査業務経験者は特例試験を受け、全員合格した。昭和36年には技術員20名、看護婦1名、洗瓶室4名となり、昭37年、38年、39年と1～2名の増員をみたが、以後増員なく、現在、技術員36名、採血室3名、洗瓶室4名となった。検査の検数をみると第1表のようになる。

この間、1964年(昭39)2月には日本臨床病理学会近畿支部例会を、1965年(昭40)11月には日本臨床病理学会総会をひきうけ盛大に行なうことが出来た。

また、検査の自動化も進み、自動血球計算装置(セロスコープその他)、生化学自動分析装置(オートアナライザー、日立400型6項目)など、備品も整備され、室面積も狭くなり、また各検査項目の検査の増加に対し、人員が増加しないため、新しい検査項目を採用することが出来ず、創設当初には他に比べて立派であった検査部も、現在ではすでに古くなりつつある。将来の発展が切望される。

(文責 仁木偉瑳夫)

## 中央研究室

### (同位元素研究室)

放射性同位元素が日本に輸入されることになったのが1950年(昭25)2月であるが、我が国では放射性物質の取扱いには慎重な注意を必要とするので、各所に同位元素研究会がつくられて基礎づくりが始まった。本学でも1951年(昭26)10月に研究会がつくられ、これを中心とした学内世論の要望により1952年(昭27)1月にはじめて同位元素研究会が基礎1号館4階の一隅に設置され、取扱規定や運営委員会の編成が行なわれ、本学における同位元素研究者の使用に便ずるとともに、その取扱いによる障害を未然に防ぐための万全の対策がとられた。研究室は学長の直轄下にあり、その下に管理代行者がおかれて研究室運営の実際に当り、若干の教授よりなる運営委員会がその諮問に応じた。研究室設立の当時は病理学教室の米沢助教教授が管理代行者にえられたが、研究室の中立性尊重の精神を重んずるために1954年(昭29)10月に京大物理学教室出身の理学士石崎可秀講師が交代、同講師の原子核研究所への転出の後1956年(昭31)6月より講師今村昭がその任に当たっている。

1957年(昭32)「放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律」が施行せられてからアイソトープの取扱規定が従前に比し、はなはだ嚴重なものとなったが、本学においても23号舎の4階の旧細菌検査室を改造して法律に適合したセミホット級のアイソトープ実験



室を設け臨床用同位元素室とし、同時に一室をシンチスキャナー室として、臨床検査部の同位元素検査業務をも開始した。

1967年(昭42)7月、基礎2号館が新設され、同位元素研究室は1号館から2号館に移転した。このとき医学、生物学研究の急激な進歩に処し、本学における研究成果の大発展をはかるため、同位元素研究室、電子顕微鏡室を母体として新たに中央研究室が設けられ、現在5部門11室よりなっている。同位元素室には管理室、測定室、オートラジオグラフ室、処理室、暗室があり、主任今村昭講師、副主任竹田仁助手が管理に当たっている。測定器は現在液体シンチレーションスペクトロメーター、オートγシンチレーションカウンター、アクチグラフなどが主であり、学内の全R.I.研究者が日夜利用しているが、研究室も次第に手狭となり、臨床研究者は新たに臨床研究棟に設けられた共用研究室のR.I.使用施設をも利用している。このように全学へのサービスを本務として出発した同位元素研究室ではあるが、単にそのみで研究室自体の学界への寄与がなくては其の発展性が失われるので、放射性物質をトレーサーに用いる細胞膜透過性機構の研究をテーマとして既に多くの成果をあげ、さらに発展に努力している。

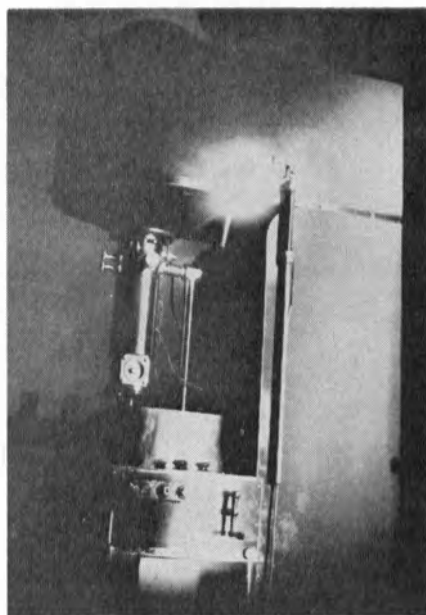
(文責 今村 昭)

### (電子顕微鏡研究室)

本学八十年史によれば、1952年(昭27)5月に、当時脚光を浴びて登場した電子顕微鏡が新たに微生物学教室に設備され、野田、山田、荒木、田中、吉村、鈴木の各教授および菅沼助教授が同研究室運営委員会委員を命ぜられ、助教授菅沼は管理代行者となった。

このように本学における電子顕微鏡的研究の発足は古く、学会においても初期から研究発表に参加している。その後、1962年(昭37)2月より研究室は、当時の第2生理学教室の実習室の一部に移転し、新しい大型電子顕微鏡が、一部はRockefeller財団の援助により購入された。同時に電子顕微鏡室の管理および利用に関する細則も制定され、中央研究室ができるまで続いた。そして主任、副主任がおかれるようになった。

現在の中央研究室は、1967年(昭42)7月基礎2



電子顕微鏡 (1952)

号館の新築と共に発足したものであるが、しかし、このような構想は、その数年以前から考えられていた。記録によれば、1964年(昭39)8月24日付で各教授あてに、将来本学で中央研究室を設置する場合の事務上の参考にするため、現在各教室における研究用機械で、共同利用のため中央研究室に供出した方がよい機械の調査依頼が出されている。しかし、実際にこれが動き出したのは、1965年(昭40)になってからで、同年9月30日の大学院委員会において、学長より基礎2号館の中に中央研究室を約150坪設置するのでその設備をどのようにするか、また研究室の運営方法などについて協議願いたい旨提案があった。その結果、文書をもって中央研究室へ供出希望の機械などを調査し、その上で基礎、臨床教室より委員を出して検討することとなった。そして同年10月28日の大学院委員会において、中央研究室設置の具体的な原案を作るため委員(教授)が各系列毎に選出された。その委員は、生理系吉村、病理系田中、内科系中村(恒)、外科系徳田、社会医学系小片であった。そしてこれら各委員による中央研究室設置協議会が学長を議長として前後4回開催され、その結果、現在のような中央研究室の設置が決定され、この中電子顕微鏡室は形態学部門の一部として1階南に22.94坪を占めることとなった。

現在の中央研究室規程は1967年(昭42)7月13日の大学院委員会においても小片研究科主任より提案され、協議の結果、1968年(昭43)5月23日付で発足したものである。なお、電子顕微鏡室運営規程は1969年(昭44)1月7日から現行のものに変更され、初代の主任は助教授竹岡、副主任は助教授町野であったが、副主任は助手森岡に交代し現在に至っている。

電子顕微鏡は現在大型2台、中型1台合計3台を設置し、研究者は基礎、臨床の約10教室から約30名が日夜利用している。学会においてもその成果は高く評価され、今後の発展が期待される。

また、1972年(昭47)12月には走査型電子顕微鏡も購入された。しかし、中央研究室電子顕微鏡室の面積が狭小のため、暫定的に医動物学教室の一室を借用して設置し、助教授松尾を走査型電子顕微鏡担当の副主任として、1972年(昭47)1月より各研究者の使用に供せられている。現在約7教室約15名の研究者がこれを利用している。(文責 菅沼 惇)

## 物理学教室

物理学教室は1955年(昭30)4月、藤喜好文を非常勤講師として開講した。藤喜は同年6月教授に任命され今日にいたっている。その他のスタッフは吉田稔穂助手(同年7月任命)およ

び菅沼良治助手(翌31年4月任命,のちに講師)の2名であった。なお1957年度(昭32)より武藤二郎講師(非常勤)を依頼し,2回生後期に原子核物理学の講義を行なっている(ただし,1958年度のみは武藤講師が海外出張のため,四手井綱彦講師に依頼)。

開講当時最も苦心したのは翌年から授業開始の物理学実習の準備であった。折からの財政事情により予算は豊かでなく,旧予科時代の実習用機器を補修,再編成するなど,いろいろやりくりしたが,なかなか思うにまかせなかった。このとき本学80周年記念事業募金の保留金より,11万円を特に物理実習整備のために受領したことは,まさに干天に慈雨の思いであり,ようやく一応の準備をととのえて授業開始に臨むことができた。その後数次にわたって学生実習整備費の配分をうけた結果,現在はなお十分とはいえぬまでも,開講当初に比べれば随分充実したといえよう。

カリキュラムとして,講義は1,2回生を通じて通年週2時間,実習は2回生において通年週3時間で,当初はこれら全部が必修であった。講義内容は一般物理学の概説の方針をとったが,学園紛争後1968年度(昭43)より2回生むけのいわゆる物理学Bが自由科目になったので,これを契機に従来の方針の改革を志し,1971年(昭46)より物理学A(必修)は項目を力学と電磁気学にしぼり,内容をやや深くして学問体系に触れうるように配慮し,物理学Bは近代ないし現代物理学の若干の部門に限定してやや詳しく解説し,物理学の趨勢に触れうるようにするという方針を試みた。これらは更に研究を重ねて成果をあげたいと願っている。

教室の性格はX線・電子線回折法を主とする固体物性の実験的研究に属する。過去の主な研究テーマをあげれば,順次蒸着した金属類膜の相互拡散,合金の形成過程,合金の結晶構造の電子構造論的研究などがある。また金属蒸着膜のX線干渉による膜厚の測定,それを用いての蒸着後の膜厚の経時変化の研究等がある。現在は非晶質ゲルマニウム膜の結晶化,それに及ぼす不純物金属の影響などの研究に力をそそいでいるが,結晶成長にも次第に興味に向いつつある。

なお現在のスタッフは,藤喜の他に小川芳男,沖史也の助手2名で,定員は開講当時と変りはない。

(文責 藤喜好文)

## 化学教室

医科大学に進学課程が設置されるように文部省の規定が改正されたのを機会に,本学でも1955年(昭30)4月1日から,以前の予科の建物を利用して進学課程が開設された。化学教室

もそのとき設けられ、教授として京大理学部から三谷一雄が赴任して来た。初年度は、助手1名が同時に発令され、1956年度(昭31)から助手が更に1名増員され、化学教室の定員は教授1名、助手2名となり、現在にいたっている。開設当初の化学教室は、予科が廃止されてから暫く使用されずに放置されていたため荒廃を極め、最初の2ヵ月間はガス、水道はもちろん、電灯さえつかなくなっただけであった。

化学教室開設にあたり、特別に研究費100万円が支出されたので、差しあたり必要な実験器具を購入して研究を開始した。研究題目は化学反応の機構の研究である。最初に研究対象としたものは、亜酸化窒素やギ酸が白金表面で分解するとき、反応分子および生成分子と白金表面とのエネルギーの交換の問題であった。その後、亜酸化窒素が高温の白金表面で分解するとき、白金表面から原子状酸素が放出されることをみだし、これに関連した問題、さらに、種々の接触反応の中間生成物としての原子、または遊離基の研究、固体の分解反応の機構の研究が行なわれた。最近ではマイクロ波放電で原子状酸素をつくり、種々の固体に対する作用の研究にはいつている。

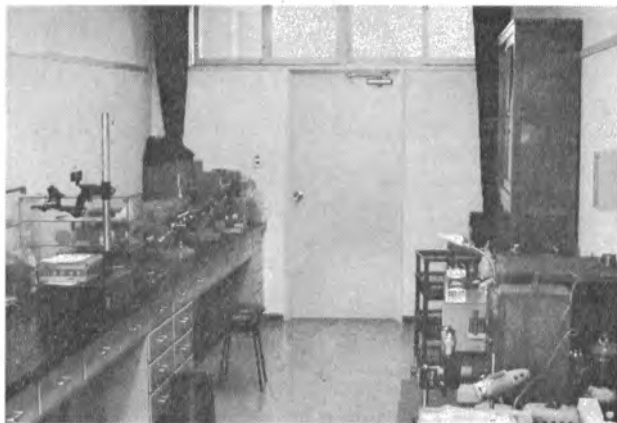
進学課程が開設された初年度1955年(昭30)は、新入生に対し、無機化学系の一般化学(週1回、2時間)を講義した。翌年度から、2回生に対し、有機化学(週1回、2時間、必修)の講義と化学実習(週1回、3時間、必修)が始まった。最初の8年間、有機化学は専門課程の生化学教室から、長谷川栄一(1956~1958年)および上田潔(1959~1963年)が来講した。1958年(昭33)からは、1回生には、一般化学にかわって物理化学の講義が行なわれ、1969年度(昭44)は、2回生の化学が自由科目となり、従来からの有機化学にかわって無機化学を講義し、希望者に対し、非公式に有機化学のゼミナールを行なった。1970年(昭45)になると、化学の講義時間は週に2時間増したために、化学A、B、Cにわかれ、化学A(1回生、必修)は物理化学、化学B(2回生、自由科目)無機化学、化学C(2回生、自由科目)は有機化学の講義を行なった。1971年度(昭46)からは、無機化学の講義をやめ、化学AもBも物理化学を講ずることにした。

化学実習は、最初は無機イオンの定性分析および滴定だけをやっていたが、その後、次第に重量分析、無機合成、物理化学実験などがつづくわえられ、1964年度(昭39)からは有機合成もやるようになって現在にいたっている。

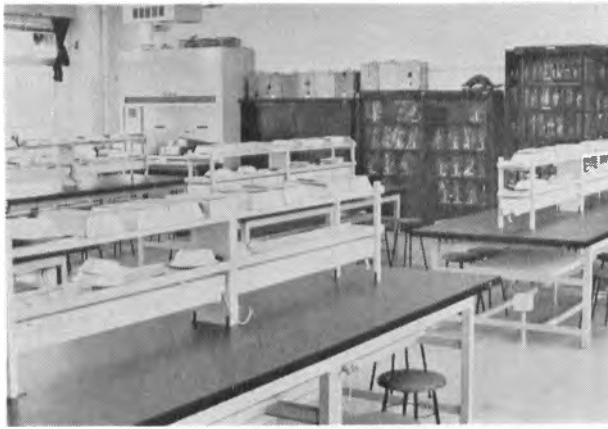
(文責 三谷一雄)

## 生物学教室

学校教育法の改正にもとづいて1955年(昭30)3月, 進学課程が元予科校舎に開設された。5月1日立教大学理学部仲尾善雄助教授が生物学担当助教授として着任, さらに9月16日教授に昇任した。専攻は遺伝学, 放射線生物学で主として蚕卵の遺伝形質,  $pe$ ,  $re$ を指標として放射線および化学薬品による遺伝子突然変異の誘発機構, 遺伝子の放射線感受性の研究に従事した。開設当時は研究設備はきわめて不十分であったが, X線発生装置(桂号, ワプラーベルビュー)2器を譲り受け精力的な研究が行なわれた。教室員としては助手田中紀元, 講師(学内)高本薫が実験形態学, 放射線生物学を専攻した。放射線の遺伝的影響という社会的関心が強かった当時でもあったので, 本学放射線医学教室および京都大学動物学教室と合同で定期的に抄読会が開かれていた。研究費も乏しかったが, 幸い仲尾, 高本が「放射線障害防御の細胞化学的研究」, 「細胞における放射線作用機構の生理生化学的研究」などで文部省科学研究費(総合研究)の援助を受けることができ, 苦しい経済的情勢のもとでも活発な研究を続けることができた。講義は主として仲尾, 実習は高本が担当した。教授仲尾は1958年(昭33)夏, 米国での学会出席を兼ねて英国 Edinburgh 大学に研究のため出張した。翌年7月31日仲尾は放射線医学総合研究所(生物部長)へ転出のため退職した。その後, 12月16日京都大学理学部動物学教室講師小野喜三郎が後任教授として就任した。小野の専攻は動物生理学, 系統分類学で, フサカ幼虫の色素胞の生理が研究課題であった。不備な設備, 不十分な人員のまま教室充実の第一歩を踏みだした小野は広い分野にわたる図書の充実と整備をはかり, これが, その後の教室発展の基礎となった。生物部学生の指導にも熱心で, 京大白浜瀬戸臨海実験所における臨海実習, 比叡山における野鳥の声を聞く会など, 参加学生も多かつたのしい思い出である。講義は小野が一般生理学, 比較生理学,



生物学教室 生物実習準備室 (1972)



生物学教室 実習室 (1972)

系統分類学, 進化を, 高本(1962年4月専任講師)が遺伝学, 発生学を講じた。助手田中は幾多の業績を残して1968年(昭43)暮れ放射線医学教室へ移り, 講師高本は電子顕微鏡による卵形成過程の研究に専念した。1968年末から大学紛争が次第に激化し, そのさなか1969年(昭44)3月小野は停年退職した。

その後, 大学は紛争解決のため9月の授業再開まで閉鎖された。9月開講を控え8月16日助手高木由臣(京都大学理学部大学院)が就任, 専攻はゾウリムシの遺伝である。さらに10月16日高本講師は教授に昇任, 卵形成の微細構造的, 細胞化学的研究が教室の主要な研究課題となった。講義は一般生理学, 細胞生物学, 遺伝学, 発生生物学, 発生学概論などである。1970年(昭45)4月助手道之前允直が甲南大学理学部(大学院)から着任, 卵形成の後期の微細構造の変化を研究している。

(文責 高本 薫)

## 数 学 教 室

1955年(昭30)4月進学課程の開設にともなって設置された。

教室担当者は最初, 久保忠雄1955年(昭30)4月~1961年(昭36)4月で, 現在, 大阪大学教授であり, 後任は桑垣煥1961年(昭36)8月現在である。

非常勤講師として以下の諸氏が授業を担当している。

奥川光太郎(現在, 京大工学部), 大西英一(現在, 奈良女子大学), 滝沢精二(京大教養部)

および河合良一郎(京大教養部)また, 現在の非常勤講師は笠原皓司(京大教養部)と成木勇夫(京大数理解析研)である。

つぎに教育(カリキュラム)の主な内容を述べると, 以下の通りである。

1 学年:

数学 A<sub>1</sub>: 微分法, 積分法とそれらの応用

数学 B<sub>1</sub> : 解析幾何学と線型代数学とそれらの応用

2 学年 :

数学 A<sub>2</sub> : 偏微分法, 重積分, 微分方程式, 平面曲線論, 級数論とそれらの応用

数学 B<sub>2</sub> : 確率論, 誤差論, 記述統計学, 推測統計学とそれらの応用

ただし, 大学紛争のあった1969年(昭44)9月から数学 B<sub>2</sub> は自由科目となった。

1972年(昭47)8月, 花園学舎構内の北側の新館3階に移転した。

教室の研究は教授1人で非常に不便であるが, 現在行列解析学にとり組んでいる。研究発表のため, 1967年(昭42)人文, 社会, 英語, 独語の4教室と協同で, 学術雑誌 *Studia Humana* を創刊した。現在までに No.1 から No.6 まで発行され, No.7 の印刷中である。

数学教室関係の論文リスト :

	<i>No. Pages</i>
1. 桑垣 煥 : 行列函数の積分定理	1 1—12
2. Kuwagaki, Akira : Sur l'intégrale double et le théorème de Stokes pour les fonctions matricielles	2 1—12
3. — : Sur les équations aux dérivées partielles de Cauchy-Riemann et de Laplace pour les fonctions matricielles	3 1—15
4. — : Sur les fonctions différentiables d'une matrice carrée et le théorème de l'intégrale	3 63—74
5. — : Sur la fonction exponentielle et la fonction logarithmique d'une matrice carrée	4 1—12
6. — : Sur quelques équations fonctionnelles à plusieurs variables du type de Pexider	4 13—21
7. — : Sur les résidus de fonctions d'une matrice carrée	5 1—17
8. — : Développements de Taylor et de Laurent pour les fonctions matricielles.	6 1—11
9. — : Sur la régularité de fonctions matricielles et celle de Fueter pour le quaternion	6 13—29
1. 河合良一郎 : reducible domain における正則函数のある構成法について	1 13—30
2. — : 多変数函数における“ある近似定理”について	4 23—38
1. Kasahara, Koji : Notes on Mixed Problem I	3 17—22
2. — : Notes on Mixed Problem II	5 19—29

桑垣は1972年(昭47)はじめ, 球による新しい立体パズルを考案, つぎの2誌に発表した。

1. テトラボールの正8面体, 現代数学(昭和47年7月号)
2. 新立体パズルポリボール, 数学セミナー(昭和47年7月号, 表紙と本文)

(文責 桑垣 煥)

## 英 語 教 室

進学課程設置に伴い、1955年(昭30)4月1日、京都学芸大学助教授服部英二〔1935年(昭10)京都帝国大学文学部卒、英文学専攻〕が教授に就任した(現職)。その専門分野はヴィクトリア朝小説の研究である。非常勤講師としては、京都大学教授宮西光雄と京都大学助教授林憲一郎が、それぞれ英語とフランス語の講義を担当した。英語の講義は1学年をA組とB組の2クラスに分けて実施した。英語とフランス語の初年度開講コースは次のとおりである。

英 語 I	通年2単位(必須)	服 部 教 授
英 語 II	“ “ ( “ )	“ “
英 語 III	“ “ ( “ )	宮 西 講 師
仏語初級	“ “ (随意)	林 講 師

なお研究室は、府立洛東高校(現在山科に移転)が前学年度中学生図書閲覧室にあてていた(本学旧予科教室本館一階東南端の)木造教室を利用することになった。これを2つに仕切って、東半分を英語研究室に(西半分をドイツ語研究室に)あてた。研究費は5万円であった。1972年(昭47)8月3日、花園学舎竣工。英語研究室は新学舎3階東端に移転した。進学課程設置当初は、全国にさきがけた6年制医大の発足という自覚と創業の意気込みにおいて、学生と教官の間には互に通じ合うものがあつた。

翌1956年(昭31)4月、2回生用英語IV・V・VIの3コースの開講にともない、宮西講師のほかに大阪市立大学教授岡本昌夫を英語担当非常勤講師として迎え、また経済学担当の新任(専任)講師中西健一が1回生の英語を兼担した。中西講師転出後は、1960年(昭35)4月より西洋史担当の(新任)助教授鯖田豊之が英語IIを兼担することになった。フランス語の講師林は1956年(昭31)8月アメリカに出張することになったので、同年9月1日より京都大学助教授後藤敏雄が交代した。なお1956年度(昭31)よりフランス語の初級(1回生用通年2単位)を2回生用と定め、中級(通年2単位)を2回生用単位表から削除することになった。講師岡本と交代して1957年(昭32)11月1日以降、京都大学助教授山村武雄が非常勤講師として2回生英語Vを担当また講師山村の英国留学中〔1960年(昭35)4月より1961年3月まで〕は、京都大学助教授増山学が英語Vを担当した。1960年(昭35)4月1日より英語VIを立命館大学教授所勇が非常勤講師として担当することになった。海外出張を終えた講師林は1960年(昭35)4月



講師後藤と交代し、それ以来引き続きフランス語の講義を担当している。

1963年(昭38)4月1日より翌3月31日まで英会話(進学課程随意科目)および医用英語(専門課程随意科目)担当のため、B. J. Mars halが客員講師となった。その後1967年(昭42)4月1日より現在に至るまで W. T. Furbush が非常勤講師として英語Ⅲ(英会話)を担当している。1965年(昭40)8月下旬より同年12月初旬まで、服部は府費(50万円)により教育事情視察のため海外に出張した。

1969年(昭44)2月10日教授会の席に突如一部の学生集団が乱入した。続く熾烈な大学紛争中に、英語カリキュラムは暫定的に次のとおり改められた。①今後はなるべく小教者教育(small group teaching)を旨とすること、②選択必修の考え方を取入れ、英語Ⅰ—Ⅵ、各2単位、合計12単位を設置する。このうち2年間に8単位またはそれ以上を必修とする(ただし専任教官の増員あるまで英語Ⅱは開講されない)。従来の設置単位は11で、その全部を必修とされていた。1972年(昭47)4月1日より京都女子大学教授岡田幸一が講師山村と交代して英語Ⅴを担当することになった。

かねて念願の人文系教室紀要 *Studia Humana* 創刊号が、幸いに教室研究費増額を機会に、1967年(昭42)12月に発行された。その後毎年欠号なく、現在6号まで既刊、近く出る7号は本学創立百周年記念号となる予定である。(文責 服部英二)

## ドイツ語教室

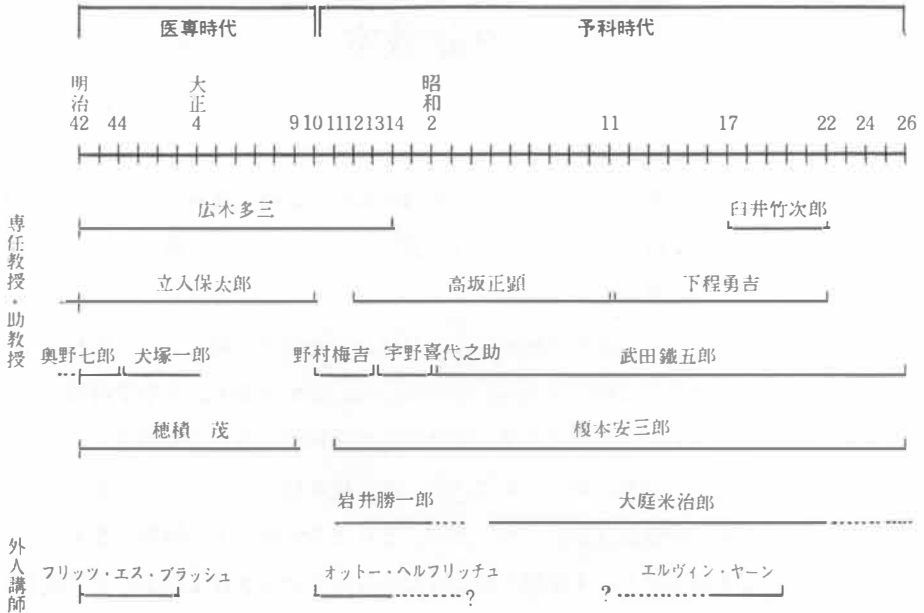
栗田口青蓮院に療病院が開かれ、ドイツ人医師 Junker が診療と教育を始めて以来、本邦の医界の例にもれず、医学研究は徹頭徹尾ドイツ語によって行なわれ、教科書もエランドウングーリヒ、ニマイルの内科書、ストローマイエル、キョーニヒの外科書、ボック、ヒルトルの解剖書、ハルトマン、ワグネルの病理学書などほとんどドイツ書が用いられたので、当初より本校のドイツ語教育には特に力が入られていた。明治初期来、医学予科校では欧学舎独逸学校のルードルフ・レーマンのドイツ語は必須の学科で、毎日の重要課題であり、医学校時代には入試にもドイツ語が課せられていた。医学校本科に入ってから1年生の毎週6時間以外は2～4年生の受講は随意であったが、これは予科校で十分修得して来たからで、医専になってからは次表のように4年間にわたってみっちりやられている。官立医専では当初英語が必須外国語であったのと比べると、本校のドイツ語教育の伝統は強い。

明治36年		1年	2年	3年	4年
	学期	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
	週授業時間	8 6 6	4 4 4	3 3 3	3 3 3
明治42年		前後	前後	前後	前後
		12 10	5 5	4 4	4 4

第一次大戦後ドイツ医学が一時頓坐した後もこれは変らなかった。

医専前期には授業は講師によって担当されていて詳しい記録は残ってないが、上田勝行(前京都医学予備校校長、療病院薬局長)、下河辺光行、高屋賀祐の名が見える。1909年(明42)文学士広木多三が教諭として着任してからは、たとえば1912年(明45)1月の校友会雑誌に各教室毎の年頭の挨拶が載った際、基礎臨床教室と並んで独逸語倫理学教室として広木、犬塚、穂積、ブラッシュ、桑木(最翼)の5名の教師の名が列挙されて出ているところから推すと、一応教室の体裁をとっていたようである。以来次表のごとく医専、予科時代を通じて常時3~4名の専任教諭もしくは教授がドイツ語を担当している。もっとも立入安太郎は薬学士で調剤実習兼任、広木、高坂、下程の各教授は倫理あるいは修身兼任であった。予科時代の授業時間は第1学年週12時間、第2学年週10時間、第3学年週8時間である。

1947年(昭22)新学制に切り変って、予科が廃止されることになり、1951年(昭26)までに白井、榎本、武田各教授それぞれ退職、京大、同志社、立命館に移り、1955年(昭30)進学課程



が設置されるまでドイツ語教室は中断する。30年京都学芸大学助教授原俊彦が教授に就任、新しくドイツ語教室が発足する。新制度下での授業は単位制となり、2カ年の進学課程で1回生8単位(2時間授業週4回)2回生6単位(2時間授業週3回)で進められたが、1969年(昭44)学園紛争以来、暫定的に1回生6単位、2回生4単位に軽減され、今日に及んでいる。医専予科時代と比べると年限が短くなっているとはいえ、専任教授一人のいたって淋しい教室で、手の足りないところは一時人文科学教室の吉田忠勝に助けてもらうほか、授業の過半を以下の非常勤講師に依存せねばならなかった。臼井竹次郎(元予科教授、京大教授、昭30～46)、若林光夫(前京大教授、現京産大教授〔昭31～〕)、吉田次郎(京大教授〔昭31～44〕)、辻本金治(同志社大教授〔昭31～40〕)、佐野利勝(京大教授〔昭41～〕)、梶野啓(奈良女大助教授〔昭46～〕)。外人講師としては K. Baldrian 氏(〔昭44～46〕、ドイツ、フライブルグ大学出身)、京都外大助教授 A. Binder 氏(スイス・バーゼル大学出身、京大人文研研究員〔昭46～〕)がいる。

長年の医専、予科時代の蔵書が残されていたのは幸いだったが、進学課程の発足来乏しい研究費で教室を整備するのは大変であった。苦しい中から教授原はゲーテ、ドイツ民謡、比較文法論の研究に務め、45年停年退職、名誉教授の称号を受け、現在は竜谷大学教授としてなお矍鑠たるもの。1971年(昭46)神戸大学助教授山本尤が教授として着任、専門はドイツ現代文学とくに表現主義、ゴットフリート・ベン論など。

附記：ドイツ語教室ではラテン語の授業も担当しているが、これは選択課目であってすべて非常勤講師に依頼し、これまで田中秀央(京女大教授〔昭30〕)、岩倉具実(同大教授〔昭31～44〕)、水野有庸(大谷大助教授〔昭45～〕)の諸氏が来講している。予科時代は3年生必修で三高講師otto・ヘルフリッチュ、本校予科教授宮田一などが担当した。

(文責 山本 尤)

## 人文科学教室

1955年(昭30)4月、進学課程設置に際して、人文科学教室が設けられ、その責任者として、助教授吉田忠勝(昭20、京大文学部卒)が就任した。当教室の学科目は、倫理学、哲学、心理学、国語国文学、芸術学の5つであり、学生は2年間で5科目中3科目以上選択必修しなければならない。初年度には、そのうち3科目が開講され、倫理学を吉田が担当し、心理学には非常勤講師として佐藤幸治(京都大学教授)、国語国文学には同じく田中裕(大阪大学助教授)を迎えた。翌1956年(昭31)度には、更に2科目が開講され、哲学は田中美智太郎(京都大

学教授), 芸術学は井島勉(京都大学教授)ならびに桑原武夫(京都大学教授)の各非常勤講師が, 担当した。この年, 心理学担当の佐藤講師の外遊のため, 半年間遠藤汪吉(同志社大学教授)の援助を仰ぎ, また国語国文学には阪倉篤義(京都大学助教授)を迎えて, 1962年(昭37)度までの間, 田中裕と阪倉篤義が, 大体交互に講義を担当した。1957年(昭32)度から8年間, 芸術学に河本敦夫(京都工芸繊維大学教授)を迎え, 1958年(昭33)度から12年半, 哲学に山元一郎(立命館大学教授)を迎えた。1962年(昭37)度には, 進学課程設置当初から人文・社会科学の非常勤講師招請に格別尽力した佐藤幸治が辞職し, かわって伊吹山太郎(京都大学教授)が, 以後4年間心理学を担当した。その翌年には, 本田義憲(奈良女子大学助教授, 現在教授)が, 現在に至るまで国語国文学の講義を担当し, 毎年春秋に万葉集に関係の深い大和方面へ多くの学生を誘って実地の指導が行なわれている。また, その年, 芸術学の河本講師の外遊のため, 半年間金田民夫(同志社大学教授)を迎え, 同講師はさらに1965年(昭40)度から6年間芸術学の講義を担当している。1966年(昭41)度から3年間, および1971年(昭46)度から現在に至る間, 心理学に蓮尾千万人(立命館大学教授)を迎え, また同講師の外遊に伴い, 1969年(昭44)度から2年間, 安宅孝治(京都産業大学教授)の来講を仰いだ。同44年度からは, カリキュラム改革の暫定処置の一環として, 従来の5科目の他に医学概論I(その後医学序論と改称)が開講され, 吉田が担当者となり, 専門課程から多数の教官の援助を得て, 進学課程の学生に医学について考えさせる機会を与えた(本年度は欠講)。1970年(昭45)2月, 吉田は教授に昇任。同年10月, 山元一郎病気のため, 相原信作(甲南大学教授)が哲学の講義を担当し, 本年度からは吉田が倫理学と共に哲学をも担当することとなった。また本年度の芸術学には, 中川勝正(同志社大学教授)を迎えている。

当教室の専任者は教授吉田1人であり, その主な研究テーマは, ドイツ哲学と実存主義である。(文責 吉田忠勝)

## 社会科学教室

1955年(昭30)創設。人文科学教室助教授吉田忠勝が教室管理。非常勤講師臼井二尚(社会学), 姫岡勤(人類学), 豊田堯(歴史学), 川口是(法学), 帷子二郎(人文地理学), 島恭彦(経済学)。

1956年(昭31)4月, 専任講師は中西健一(経済学)着任, 英語の授業をも兼担。社会学の非常勤講師が土屋貞蔵に交代。

1957年(昭32)3月, 中西講師大阪市立大学に転出。助教授吉田がふたたび教室管理。

1958年(昭33)4月, 島根大学助教授鯖田豊之が助教授(歴史学)として着任, 英語の授業をも兼担。経済学の非常勤講師が山崎武雄, 人類学が梅原末治に交代するも, 種々の事情で後者は出講せず, 人類学は欠講, 非常勤講師川口(法学)は森と改姓。

1959年(昭34)4月, 人類学の非常勤講師として石川宋吉が来任。

1961年(昭36)4月, 法学の非常勤講師が山下末人に交代。

1964年(昭39)7月, 助教授鯖田京都大学より文学博士の学位をうける。論文題目「封建支配の成立と村落共同体」。

1965年(昭40)4月, 経済学の非常勤講師が大橋隆憲に交代。

1967年(昭42)4月, 人類学および法学の非常勤講師がそれぞれ佐々木高明, 中井美雄に交代。

1968年(昭43)4月, 人文地理学の非常勤講師が水津一朗に交代。

1969年(昭44)9月, 学園紛争による暫定カリキュラム実施にともない, 助教授鯖田は英語兼担をはずされ, 新設の医学概論Ⅱを担当。

1970年(昭45)2月, 助教授鯖田は教授に昇格。4月, 社会学の非常勤講師が益田庄三に交代。経済学は欠講となる。

1971年(昭46)4月, 医学概論Ⅱを医史学と改称, 教授鯖田がそのまま担当。経済学の非常勤講師として浪江巖が来任。人類学は欠講となる。以後, 人事の変動なし。

教室とはいっても, 専任教育職は1名, 他はすべて非常勤講師の助力を仰がなければならない。増員しようにも, 教授鯖田が歴史学と医史学の双方を担当する現状では, 性質のちがう2つの学科目を担当できる人材がみつからないかぎり, 不可能である。ただ1958年(昭33)度以来, 1年も欠かさず他大学と共同の文部省科学研究費(総合研究)をうけ, 図書や設備

備品はかなり充実してきた。

(文責 鮎田豊之)

## 看護学院

甲種医学校時代の療病院に看護婦教習所にさきだって産婆教習所が設置されたのは1889年(明22)4月である。産婆という社会制度は、かなりふるくから日本の風土に定着していたせいであろうが、肝心の看護婦育成機関の設置のいきさつは明瞭ではない。不思議なことに設置をみた同年同月に教育零年のはずの産婆教習所の卒業生の名前が10名記されていることや、1893年(明26)に日本赤十字社京都支部の看護婦の養成を療病院が委託された記録があるのをみると、paramedical な教育のコースは、かなり古くから立派に療病院のなかで機能をはたしていたと推察される。看護婦教習所の第1回卒業は1898年(明31)4月、この時53名の看病婦講習生を送りだしている。1903年(明36)、医学校が医学専門学校となり療病院が附属機関としての立場を確立したとき、看病婦(看病人をふくむ)は135名、産婆講習生24名、看病婦講習生78名であった。1904年(明37)の医専時代の平面図(八十年史262ページ)によると当時の看病婦寄宿所は現在の臨床講堂東側の附近にあり、鴨川べり、現在の大学敷地の東南隅にあった精神病室の西北にたてられている。1908年(明41)8月、療病院内に新しく寄宿所の新築が行なわれているが、それも二階建てで階下は学用患者の病室である。当時の看病婦の規程は厳格を極めていて、私語、雑談にいたる行動をまで規定され、外泊など思いもよらない風であった。1920年(大9)には本学前にあるいまの文化芸術会館の地に二階建木造(折廻式連続棟)の寄宿舎が建てられ、やっと生活の場は病院の外に独立した。講習生もここに起居した。看病婦という名が看護婦という名に変えられた時点も理由も明瞭でない。1903年(明36)に附属産婆看護婦教習所規則の改正があるが、大正時代にいたるまで卒業生が受けた辞令には看病婦の肩書がぬけていない。その後、寄宿舎は現在の大学敷地北側の道をへだてた位置に木造で建てられて移転し、1965年(昭40)に地下1階、地上4階の看護婦寄宿舎(天心療)が1968年(昭43)に同じ敷地内に地下1階、地上5階の看護学院生徒のための寄宿舎がたてられた。府立医学校時代の看病婦および産婆の教習期間は、それぞれ2年、1年である。望みに応じて両者を兼修できることになっていた。

1907年(明40)にきめられた規則によると看護婦講習生は日給18~25銭が給せられ、外泊はむやみに許されず、卒業各1年間勤務する義務が附せられている。1913年(大2)2月に看護

婦教習所が、1916年(大5)6月に内務省告示、省令によって設定されているが、敗戦にともなって、1946年(昭21)3月31日、この教習所は廃止され、助産婦科、看護婦科の2科からなる厚生女学部が設置され、看護婦の向上を目ざして力強い歩みが全国的な歩調のもとにふみだされ、占領軍の強力な指導もあずかって、1949年(昭24)



看護学院 実習 (1972)

4月、大学附属甲種看護婦学院——1952年(昭27)4月附属看護婦学院、1964年(昭39)4月附属看護学院と改称——の設立をみ第6号病棟をあげて教育の場とした。1951年(昭26)4月乙種看護学院、1952(昭27)4月准看護婦学院と呼称して本院にうつされ、1957年(昭32)3月に廃止され、このうち1期生のみは別科課程のもとに再教育され看護婦となった。1971年(昭46)臨床研究棟への事務局の移転にともなって現在地に宿願の独立した学舎をえた。

学院長は歴代の病院長が兼任する慣行である(例外として学園紛争にともなって病院長が多忙をきわめたために1969年7月5日～1970年3月31日までは第2内科の塩津助教授が学院長代行事務取扱として就任)。事務長、教務主任各1、専任教員3、会監1、非常勤講師58名。講堂は3年の教育のために3、会議室1、更衣室1、事務室1である。ほかに病院内に看護実習室1、化学試験室1、調理室2があり、現在の在校生152名である。卒業生総数は

産婆教習所 (1889～1953年)	1,812名
看護婦教習所 (1898～1947年)	2,547名
厚生女学部 (1949～1951年)	158名
准看護婦学院 (1953～1957年)	91名
看護婦学院 (1952～1964年)	367名
看護学院 (1965～1972年)	316名

(文責 日高史子)

## 図 書 館

1890年(明23)11月、本校を母校として成立した京都医学会は、療病院内に書籍室を設置し、書籍、雑誌等を備え付け会員の縦覧に供した。<sup>(1)</sup>これが本校図書館の記録上の始まりである。

1898年(明31)12月、本校校友会は、規模を拡張して医学図書館を設立することを決定した。<sup>(2)</sup>医学図書館設立には幾多の費用を要し、僅少の会費では維持が困難であるので、生徒父兄、本学関係者に義捐金を仰ぎ、市内篤志家に図書の寄贈と貸与を請い、また、医事衛生関係の新聞、雑誌社には、新聞、雑誌の交換を申し入れた。

1899年(明32)3月、医学図書館仮規則<sup>(3)</sup>が定められ、5月、解剖学教室西隣室をあて「京都府医学学校校友会医学図書館」として開館するに至った。

1903年(明36)6月、図書館を元医学校療病院事務所跡へ移転した。

1905年(明38)7月、校内空地に二階建洋館を新築し、二階西半分を閲覧室兼図書室として使用した。

1925年(大14)4月、本学本館の新築にともない二階を新設の「中央図書館」とし、教授の中から数名の図書館調査委員が任命され、鋭意整備の画策を行なった。

1926年(大15)4月、中央図書館は、梅原教授監督のもとに、下河辺、赤星書記らの努力により整備を完了し、4月上旬から開館の運びとなった。従来、本学図書は、各教室の保管にゆだねられていたが、これらを中央図書館で集中管理することになった。中央図書館規則お



中央図書館 入口 (1972)

よび同規則執行手続規程<sup>(4)</sup>も制定され、6月、正式に初代中央図書館主任に教授梅原信正が委嘱された。<sup>(5)</sup>

8月、本学校友会によって創設された図書館は、本学の直営に移管され、独立して本学中央図書館となった。したがって、このときが本学図書館の正式の開設時といえる。開館時の中央図書館の蔵書数<sup>(6)</sup>

は、単行本 2,856 冊、雑誌につ



いては、記録がないので不明である。

1929年(昭4)5月、本館南西側に地下一階地上三階建の講義室が新築され、二階全体を中央図書館とし、閲覧室、書庫、事務室などに区分し、本館より移転した。これが本学図書館の位置として定まり今日に至っている。その後、部分的に多少の変更があり、現在は、



中央図書館 閲覧室 (1972)

地階および一階の一部を除きすべて図書館の管轄となり、今後、徐々に改善が行なわれる予定である。

#### (図書館特記事項)

1960年(昭35)8月、図書館改築計画がたてられ、China Medical Board と計画内容、資金援助について、1966年(昭41)3月ごろまで交渉が続けられたが、途中、本学の計画変更により資金援助がえられず、結局、この計画は挫折した。

1969年(昭44)6月18日、大学紛争のさ中、本学一部学生によって図書館建物が封鎖されるという事態が発生した。幸い同日中に封鎖は解除されたが、そのあおりで閲覧室の机、椅子が皆無の状態が2カ月間も続いた。

1972年(昭47)1月、本学図書館の長年の懸案であった「京都府立医科大学附属図書館運営協議会」<sup>(7)</sup>が間島館長の努力により発足するに至った。今後、図書館運営上重要な事項は、すべてこの協議会において審議され、計画立案を行なうことになり、本学図書館発展に重要な役割を果すものと期待される。初代委員には、間島館長(同会議長)、栗山、加藤、山本各教授、井端、森本、遠山、村上各講師が選ばれた。

#### (予科および分校図書室)

1936年(昭11)6月、予科構内西南隅に木造二階建を新築し、二階に閲覧室、書庫、事務室を設け、予科図書室として開室を行なった。予科教授の中の1名が図書主任となって、図書室の運営にあたった。<sup>(8)</sup>開室時は僅か485冊の蔵書数であったが、逐次整備され1972年(昭47)3月には、8,180冊を数えるに至った。

1947年(昭22)、予科廃止にともない、1951年(昭26)3月に予科所蔵図書を本学中央図書館に一時保管したが、分校開設と同時に分校図書室を旧予科図書室跡に再開することになり、中央図書館保管の旧予科蔵書を分校図書室および各教室へ移した。ここに分校図書室は、蔵



花園学舎図書室 閲覧室 (1972)

書数2,318冊で出発した。

1972年(昭47)8月、本学創立、100周年にあたる時、分校の改築が成り、分校図書室は、新館二階東端へ移転した。開架方式の閲覧室・書庫(127m<sup>2</sup>)、事務室(10m<sup>2</sup>)、自習室・閲覧室(64m<sup>2</sup>)からなり備品も一新し、特別に図書を受入れ、勉学の場にふさわしい雰囲気のもとに開室されようとして

いる。

(注記事項)

- (1) 京都医学会雑誌 第35号 明治23年
- (2)―(3) 京都校友会雑誌 第14号 明治32年
- (4) 京都府立医科大学雑誌 第102号 大正15年
- (5) 昭和28年4月、従来の「中央図書館主任」を「中央図書館長」と変更、昭和34年12月「中央図書館長」を「附属図書館長」と変更、同時に「中央図書館」を「附属図書館」と変更。
- (6) 昭和47年3月現在、単行本49,275冊、雑誌1,497種
- (7) 本学学報116号 昭和47年
- (8) 大正15年には予科生徒用図書は2冊、昭和10年には104冊

(文責 中道正治)

## 事 務 局

1872年(明5)2月1日、栗田口の青蓮院内に仮療病院を開設し、患者の治療のかたわら、医学生の教育を行なってからここに百年の星霜を経た。この百年は大学にとっても、また学友諸氏にとっても決して平穏なものではなく、学校そのものの存続問題、そのほかかず多くの試練と苦難の歴史であったことに思いをいたすとき、誠に意義ぶかく且つめでたいかぎりである。

この意義ぶかいときに事務部門における過去発展の足跡をたどり、先人がこれらの試練と苦難を如何にして耐え、大学のなかで歩んできたかを知ることは決して無意味なことではなからう。こうした意味において事務部門の百年の推移をみることにしたが、極めて資料に乏

しく、また紙面の関係で十分に意をつくせないのが残念である。

仮療病院開設当時、李家隆彦<sup>りのいへ</sup>をはじめ六角博道、酒井良顕などの諸氏が庶務、会計の事務を処理したが、翌1873年(明6)1月、京都府市政庶務課の職員が療病院の事務を兼ねることとなり、陣容の強化が行なわれた。その後、現在地への療病院の新築移転、甲種医学校、さらに医学専門学校への昇格



教務課 (1916)

など学校ならびに療病院の拡充発展に呼応し、1904年(明37)には京都府立医学専門学校職制ならびに同処務細則を、さらに京都府立医学専門学校附属療病院職務規程ならびに同処務細則および庶務部事務取扱規程などの内部規程を制定した。

これらのなかで事務部門においても内部組織の充実整理をはかり、さらに、よりよき前進を期するため教務および庶務の2課を置き、教務課長には教務主任をあてて一般教務事務を、庶務課長には幹事をあてて庶務、会計、用度などの事務を分掌させたほか療病院にあっては幹事をもって庶務部長とし、庶務、会計の2掛を置き掛長を任命し、療病院におけるそれぞれの事務を分掌させた。この間、学校庶務課と療病院庶務部との人事その他、事務執行上の詳細についてはさだかでないが、その大半が庶務部との兼務となっていたようである。

明治の末にいたり、学校および療病院の飛躍的な発展と整備拡充に即応し、事務部門においても組織の強化と充実を図るため療病院庶務部の庶務、会計の2掛を廃し、新たに庶務、会計、調度、病室、修理、炊事の6係とし、係長を任命し事務を分掌させるなど療病院発展のための組織固めを行なった。

大正初期以降大平洋戦争終了まで特に大きな組織上の改革は実施されなかったようであるが、その詳細はさだかでない。

歴代の幹事は「学校長の命を承け庶務、会計を掌る」の定めにしたがい、庶務課長あるいは療病院(医院)の庶務部長を兼ねるなど、全般的な管理運営に関して直接の責任者として努力をしてきたが、戦後はなんとしても敗戦という歴史上かつて経験したことのない大転換にともなう世の中の混迷と、占領軍による労働組合の育成、敗戦による国民経済の破壊、民主主義思想の高揚など、社会的な状況のほかに荒廃した大学や病院の建物その他研究、診療施設の復旧など多くの困難のともなうことを考慮し、1947年(昭22)に至り幹事の定数を3名と

した。その後1名を幹事長として大学事務全般の統轄と附属病院の庶務部長を兼ね、1名は教務課長として、さらに1名は大学出納員として会計事務を担当するなど、事務首脳部の陣容強化を図った。

1952年(昭27)5月、幹事長漆葉見竜が退職し、京都府総務部長伊吹貞治がその後を亨け、新制大学の事務局長として就任した。

ここにおいて従来の事務組織を大幅に改め、現在の事務局ならびに附属病院事務部の基礎をつくったものである。すなわち1953年(昭28)3月、京都府訓令第5号をもって大学事務局を設置し4月1日発足した。それによると大学事務局に庶務、会計、教務、病院の4課を置き庶務課には庶務、人事、警備の3係を、会計課には主計、調度、営繕の3係を、教務課には教務、学生の2係を、病院課には患者、収入、保険の3係を、また伏見分院および花園分院には事務係などを置き、それぞれ課長、係長を任命した。このほか附属図書館、同看護婦学院、同准看護婦学院および厚生女学部(助産科)においても必要に応じ事務主任(長)を任命するなど、大学ならびに附属施設の充実発展に呼应し、それぞれ必要な事務組織の強化を図った。

その後、1962年(昭37)8月、京都府訓令第8号をもって事務局病院課を医事、収納の2課に分離し、医事課には患者、医事相談、給食保清、伏見分院事務および花園分院事務の5係を、収納課は収入、保険の2係とし、医事課は附属病院の所屬に、収納課は事務局の所屬となったが、1967年(昭42)6月、京都府訓令第2号による附属病院事務部の設置とともにこれら医事、収納の2課はその組織下に置かれた。

それよりさき1954年(昭29)5月、京都府訓令第8号により事務局教務課を学生部学生課として教務、学生の2係とし、1955年(昭30)4月、花園分校に進学係を増置した。

1964年(昭39)4月、事務局に参事が配置されたが、前述の附属病院事務部の設置とともに事務部長が事務局参事を兼ねることとなった。その後も組織に若干の改正はあったが、1972年(昭47)6月、京都府訓令第10号により進学課程事務室を設置したほか、附属病院事務部においても医事課の患者係を廃止し、収納課の保険係を保険第1係と保険第2係に分離するなどの改正が行なわれた。

このように大学および附属病院などの拡充発展に足なみをそろえ、



学生課 (1972)

また社会のもろもろの要請にこたえつつ必要な事務組織の改革を実施し、医科大学としての本来の使命のほかに地域社会の医療機関すなわち、京都府住民の医療機関としての使命を両立させつつ現在に至っているが、この百年の間、これら事務部門、殊に事務職員が大学のなかで、あるいは病院のなかでどのように位置づけされ、理解され、認識されてきたか、今少しふりかえてみよう。

事務職員の大学や病院の中における位置は1872年(明5)仮療病院が創立された時代から正式の学校になるまでの間は、その病院の管理運営の立場よりそれ相応の人が、相応の待遇を得ていたように思われる。

それが医学校となり、医専、医大となるにつれて大学や病院の機構は明確にされたが、大学や病院に就職して他に転勤することなく、最後まで忠実に働いてきたのが実態のようである。病院収入が豊かで大学全体の管理運営に不足がなかった大平洋戦争以前は、教育職員(医師)のウェイトを大きくし、事務職員はそれに隷属的となったことは当然の姿であった。

大学は教員が学生を教育するところであり、教員と学生が中心であって、その他の者は単なる補助者であるという理論がでてきたのもこの頃からであろう。しかし戦後は事情が一変してきた。

新憲法の国民主義のもとですべての職員は(事務職員にとどまらない)全体の奉仕者として公共の利益のために勤務することが公務員制度の基本理念として確立され、蜷川知事の指導のもとに住民の暮らしを守る地方自治体という考え方が逐次滲透してきた。また府庁との人事交流は激しくなり、事務職員は気持ちの上では昔のいわゆる大学の職員というのではなく、府の職員として大学に勤務しているという意識が強いように思われる。

一方府の一般会計からの繰出金が増加するにつれて、設置者である京都府としては、大学の自治についてはいうまでもなく十二分に尊重はしているが、京都府という行政組織の一つとしてその運営について強い関心を払わざるを得なくなったのも当然であろう。

事務職員は大学や病院の裏方としてたゆまず働いているが、戦前の事務職員に比し行政的感覚と知識を多分にもった公務員に変わってきた。

1968年度(昭43)の一部病棟閉鎖の断行や、1969年度(昭44)の大学紛争の解決は、教育職員と事務職員が互いに協力してそれぞれの立場で努力した賜物であることは大方の記憶の新しいところである。大学や病院において教育職員も事務職員もみんな重要な歯車であって、この歯車をうまく噛み合わせていくことによって大学や病院の発展が進められていくべきであることを記して筆を擱く。

職 員 の 現 員

(1) 職員の 職種別 現

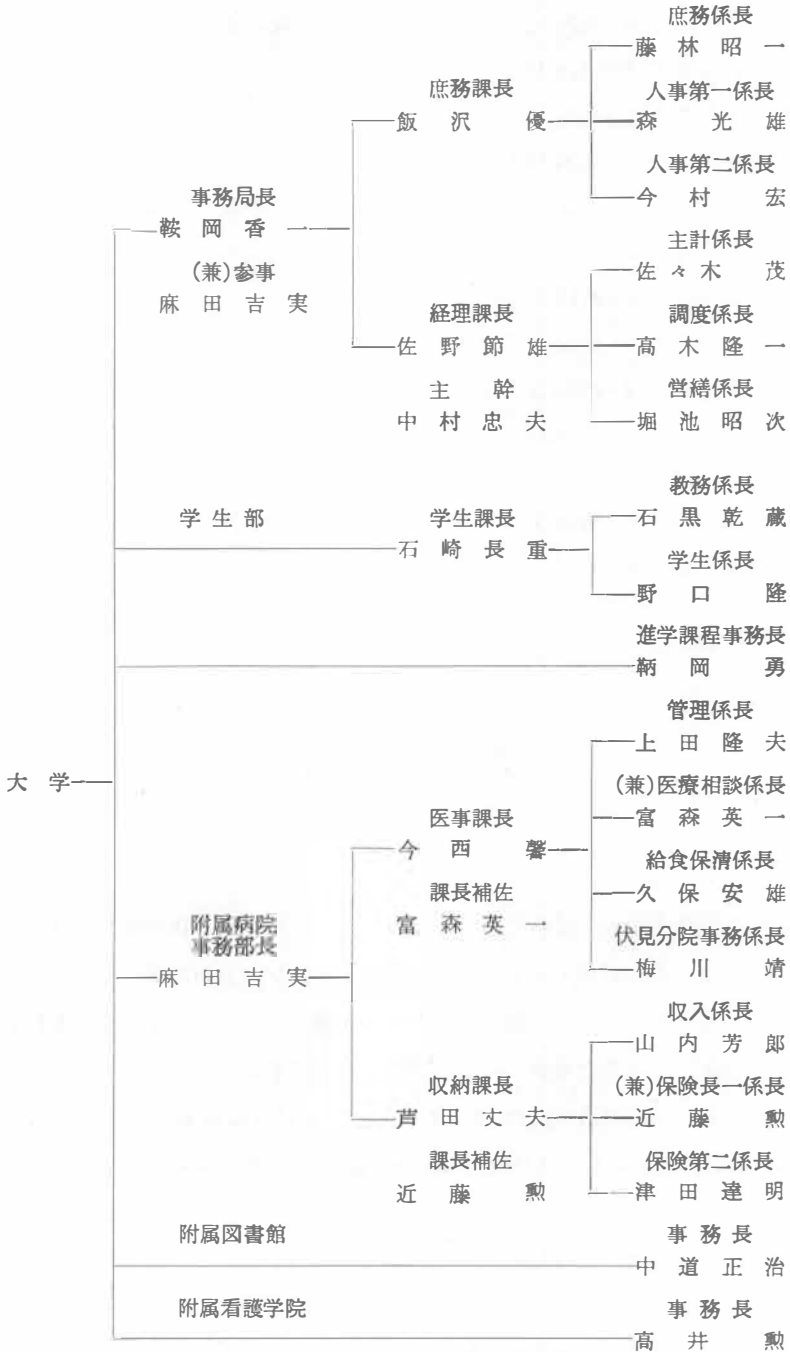
昭和 7年 7月 1日現在

職員数 職種別	職 員 数		備 考
	職 名	現 員	
教 育 職 員	学 長	1	
	教 授	33	
	助 教	23	
	講 師	28	
	助 手	149	
	小 計	234	
事 務 職 員	事 務 局 長	1	事 務 長 3
	附 属 病 院 事 務 部 長 ( 参 事)	1	
	課 長 補 長	5	
	課 長 補 長	2	
	係 主 査	12	
	主 査 事	6	
	小 計	90	
		120	
技 術 職 員	主 幹	1	一 般 業 務 6名 運 転 業 務 2名 電 話 交 換 業 務 9名 鍼 灸 業 務 13名 電 氣 整 備 業 務 9名 営 繕 工 作 業 務 7名 配 管 整 備 業 務 1名 技 能 業 務 5名 研 磨 業 務 2名
	係 長 査 師	1	
	主 査 師	1	
	技 師	5	
	技 師	5	
	小 計	5	
医 療 職 員	薬 剂 部 長 ・ 係 長 ・ 薬 剂 師 ( 技 師 )	29	看 護 学 院 教 員 5 名 を 含 む
	総 看 護 婦 長 ・ 看 護 婦 長 ・ 看 護 婦 ・ 准 看 護 婦 ( 師 ) 技 師	438	
	医 師 ( 技 師 )	1	
	X 線 技 師 ( 主 査 師 ) 技 師	12	
	検 査 員 ( 師 ) 技 師 補 助 員	27	
	技 工 ( 技 師 )	5	
	栄 養 師 ( 技 師 )	5	
	看 護 人 ( 技 師 )	14	
	心 理 判 定 員 ( 技 師 )	1	
	理 学 療 法 士 ( 技 師 )	1	
	小 計	533	
協 約 職 員	守 衛 業 務	19	
	家 政 業 務	9	
	庁 務 業 務	7	
	用 務 業 務	50	
	看 護 補 助 業 務	39	
	臨 床 検 査 補 助 業 務	8	
	小 計	132	
合 計		1,073	

( 進 学 課 程 非 常 勤 講 師 は 含 ま ず )

(2) 事務組織一覽表

昭和47年 7月 1日



## (3) 大学事務局長（幹事）

順位	氏名	在職期間	備考
1	相田義和	明14.12～明26.12	幹事
2	伊藤正信	明27.3～明28.12	〃
3	恩田寿夫	明29.2～明29.8	〃
4	大野政忠	明29.8～明36.10	〃
5	柿沼敏太郎	明36.11～大3.7	〃
6	中道貫一	大3.7～昭3.5	〃
7	中西喜一郎	昭3.8～昭17.9	〃
8	藤井彥次郎	昭18.1～昭22.12	〃
9	漆葉見龍	昭22.12～昭27.5	幹事長
10	伊吹貞治	昭27.5～昭29.10	事務局長
11	三輪光之照	昭29.10～昭39.3	〃
12	三島直介	昭39.4～昭45.8	〃
13	鞍岡香一	昭45.8～	〃

## 附属病院事務部長（庶務部長）

順位	氏名	在職期間	備考
1	柿沼敏太郎	明37.4～大3.7	庶務部長
2	中道貫一	大3.7～昭3.5	〃
3	中西喜一郎	昭3.8～昭17.9	〃
4	藤井彥次郎	昭18.1～昭22.12	〃
5	漆葉見龍	昭22.12～昭27.5	〃
6	麻田吉実	昭42.6～	事務部長

(文責 麻田吉実)

## 薬 劑 部

薬剤部百年の足跡を顧みるにあたって、遺憾なことには、第二次世界大戦終戦時、米軍の駐留に戸惑い、殆ど明治・大正期における薬剤部独自の資料が焼却され、今となってはその記録を知るよすがとてなく、薬剤部の歴史の記載についてもとより正確を期したつもりではあるが、筆者自身の意にも満たぬものが多いことである。

本学の前身である木屋町療病院は1872年(明5)9月15日に開業したが、外人医師 Dr. Junker von Langegg のもとに市中の取締医(通史参称)から2名ずつがえらばれて当直医として勤務につくようになったが、本邦においては1871年(明4)から司薬医官制度があるにはあったものの、薬剤師不足のため初期には医官の兼務が多く、本療病院でも前記の当直の医師達が薬局掛を兼務していたことが、つぎの記録で推測できる(通史参照)。

江馬権之介 当直医薬局係兼勤申付候事

壬申十月

京 都 府



薬局掛という専任の職種のみえるのは同年10月1日粟田口青蓮院内の仮療病院に移転開業に先立って府より発令された辞令であるが、その人々は横井俊介、田中元造、松岡周吉である。ただし同日付にて前記江馬権之助と新宮涼閣、真島利民の3名に当直医薬局掛兼務の辞令が発せられているが、恐らく新宮、江馬らは市内医家の取締りに名を連ね、当時既に江馬は68歳の高齢でもあるので、横井らを監督指導して調薬に当たらしめたのであろう。ちなみに本邦初の洋式病院といわれる長崎の養生所1868年(文久1)も、長崎医学校と改称した。1868年(明1)に「薬局監察、薬局掛申付」と記録が残されており、時あたかも同じ頃であった。1873年(明6)には横井、松岡の名が消え新宮涼湖と横浜十全病院教師セメンズのもとから来た木下燦及び前記田中元造となっている。翌年に里見時三がはいり、木下燦は去って、1876年(明9)に府の検査所に首席医員となり、後に駆黈院初代の院長に任命されている。1877年(明10)薬局係4名、翌年には5名の記録がある。1879年(明12)には里見時三の他、田中元造、原広勤、江阪秀三郎、矢内原謙一の名が記されている。かねてより梶井町(現在地)に新築中であった医学校及び療病院は6年の歳月を経て竣工し、1880年(明13)7月18日に移転したが、薬局の瓶棚、蒸発釜などの装置は当時、最新型、精巧なもので世間の耳目を集めた。この年、里見時三が薬局長となったが、記録に残るところでは、薬局長という職制の見られる最初である。里見は1884年(明17)9月、二等教諭となり、翌年4月理化学教諭上田勝行が薬局長となった。1888年(明21)12月退職後、京都医学予備校に戻り、京都における薬学教育の発展に尽した。当時は処方、製剤に一定基準がなく、また品質面においても検査法等の必要性から、1887年(明20)7月1日、日本薬局方が施行された。翌年3月薬品営業並びに薬品取扱規則、薬剤師試験規則を規定した法律第10号が公布され、これにより本薬局を調剤局、薬局長を調剤局長と名を改めた。1890年(明23)7月、初の全国公私立病院薬局長会議が東大で開催され薬局業務、情報交換への道を歩み始めた。上田の後任、喜多川義比は製薬、分析学を修め本薬局に入り1887年(明20)4月医学校教諭となり、調剤局長を兼務、辞任後、京都薬学校の育成に尽し、1910年(明43)駆黈院の後身、府立八坂病院薬局長となった。1895年(明28)薬学士古屋恒次郎(東大薬)が医学校教諭(化学)兼調剤局長に任命され、この間、京都薬学校講師も兼ねていたが、在職2年にして第一高等学校教授に転出した。翌年1月薬学士平山松次(東大薬)が医学校教諭兼調剤局長に任命され、京都薬学校講師を兼務したが、1900年(明33)6月に退職、ついで薬学士町田伸が化学教諭兼調剤局長となり、1909年(明42)9月その職を辞するまで薬学校講師を嘱託されていた。その間、1903年(明36)6月、京都府立医学専門学校に昇格、療病院は附属療病院と改称した。町田は医専教諭も兼ね、また私立熊本薬学校(現熊本薬学部)の創立に尽力した。1908年(明41)6月の勅令第142号により薬局は附属療病院とは独立した大学附属機関の一つときめられ、この官制は1948年(昭23)医療法施行まで続

いた。1909年(明42)10月、医専教諭(調剤実習、ドイツ語)兼調剤局長に就任した立入保太郎(東大薬)は、新進の薬学士で勤務のかたわら京都薬学校名誉校長、理事を依頼され、1918年(大7)ふたたび校長に推され病院勤務のまま義足の身をもって薬学校の専門学校昇格に努力した。彼は1923年(大12)6月京大医学部附属病院薬局長に就任後も京大薬学科講師も兼ね、その後、同志社工業専門学校薬学部長として後進の指導にあたった。大正初期の調剤技術や設備はすこぶる低調であったが、立入はまた調剤技術に学問的な理論の裏付けを求めドクトル ルドルフ ラップ著の「新調剤学」を翻訳し学会誌上に種々の実際薬学の研究を発表し、1917年(大6)4月調剤技術の交換と統一を目的として全国官公立病院薬剤部長協議会の開催に発起人の一人として名を連らね、1920年(大9)4月九大にて開かれた第1回病院薬剤部長協議会にも尽力した。またコロイド化学理論にも精通しており「コロイド化学大意」の著書がある。この間、療病院は1914年(大3)11月に起工以来10年を経て改築工事が終わり新装落成をみた。当時、調剤局員は10名とされている。また1921年(大10)10月、医大昇格が認可され、同12月、立入は予科教諭兼医専教諭に任ぜられている。1923年(大12)11月、薬学士森益蔵(東大薬)が調剤部長、医大予科教諭兼医専教諭に内閣文部省より発令、兼任となったが、少壮気鋭の士で後年、当時を回想し自分は大学を出たばかりで着任し気苦労が多かったが、学生時代の野球を通じ人間関係が円滑に運べたことを喜んでいると述懐している。森は性格豪



薬局待合室(1927)

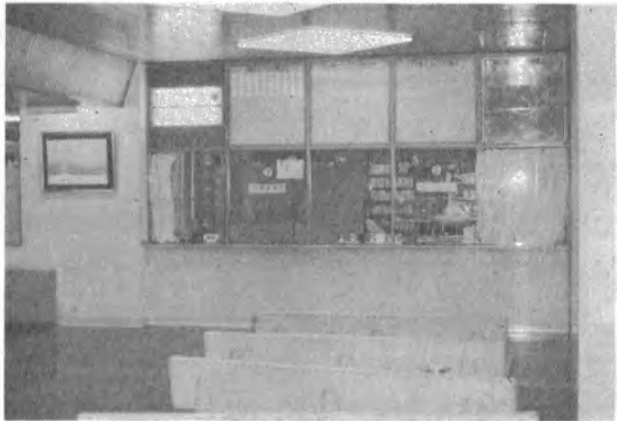
放磊落部下をよく掌握した。1924年(大13)10月、京都府立医科大学附属医院と改称、調剤部は薬局となり、調剤部長は薬局長と改められた。当時医薬品産業が未発達であったため病院薬局で医薬品製造を行ない、米糠<sup>こめぬか</sup>よりのVB<sub>1</sub>抽出が行なわれ、粉剤、液剤、注射剤としてフリンの名称で長く院内各科で繁用された。一方、質物の検査

を含めた薬品試験も盛んに行なわれ、二階に局長室、研究室がおかれゼネガ根よりのサポニンの定量などが行なわれ、また製剤部門が強化され、石川式攪拌機、砕粉機などが設置された。1931年(昭6)森は校友会理事長に就任、その発展に寄与し、また医大野球部長として学生達と親しみ、みずから三塁手を務めた。また薬局チームは学内における強力チームとして勇名を馳せた。1942年(昭17)1月勲六等瑞宝章を叙勲された森は同年9月17日退職。大日本製薬株式会社に転じ、社長、会長、顧問を歴任し多くの人々に慕われた。後をうけ梅田良

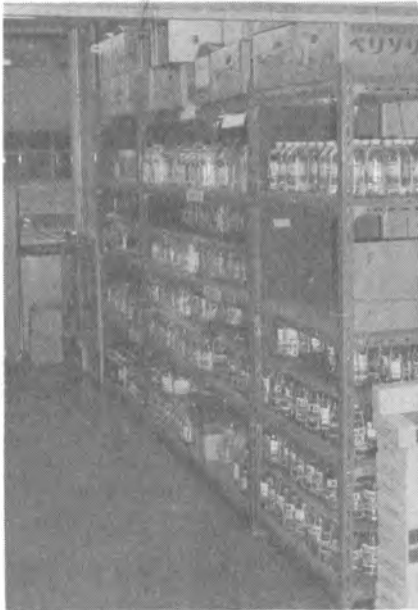
三(京薬)が薬局長に就任1944年(昭19)8月京都府立医大附属女子専門部教授を兼任したが、当時第二次世界大戦のため薬品は配給制度となり、その確保は困窮を極め他の資料においても軟膏容器にあてるために、素焼の骨壺まで購入される始末であった。この頃 Prontosil を出発点とする Sulfa 剤が出現し、海外では Penicillin の驚異的な抗菌力が発見され、抗生物質時代の黎明を迎えていたが、大戦に続く終戦期の混乱の最中にあった我国では研究や技術の進歩から取り残される状態となった。1948年(昭23)医療法及び同施行規則により病院薬局が規定され構造設備、所要人員の基準が定められ、1953年(昭28)係長制度が施行され薬務、調剤、製剤、検査の各係長が設けられた。1958年(昭33)10月1日社会保険診療報酬甲表採用病院となり、一処方当り薬剤投与品目の増大傾向を招き、薬局は繁忙時代にはいる。1961年(昭36)3月31日附属病院診療棟第二期工事竣工により従来の木造より新館鉄筋五階建の一階及び地階に移転。薬局の占める延面積は従来の840m<sup>2</sup>より767m<sup>2</sup>に縮小された。同年4月一日京都市、府、社会保険の実施により国民皆保険の形態が整い、患者数の増加が調剤処理の限界に達し、事実上検査係の機能を停止した。1963年～1965年(昭38～40)調剤業務の能率化をはかり分包機を購入したが、調剤内容の煩雑化(すなわち従来の散薬から錠付散剤への移行)と投与薬品種類の漸増と共に入院患者への投薬を一包中に散、錠を包み込む one dose one packaging を実施し、調剤業務は繁忙を極めた。1965年(昭40)3月31日京都府薬剤師会会長を兼任する梅田薬局長は退職し、4月1日高山新之助(京薬)が薬局長に就任したが、調剤業務量増大にともなう患者の待時間の問題も含め増員5名が認められたが、女子薬剤師の定着の悪いこもあって、薬局は新しい時代の人事管理の試練期にはいった。

1967年(昭42)6月薬局長を薬剤部長に改称し、同年9月附属病院花園分院(精神科)が、本院北側に新築移転し、精神科処方量の特殊性を考え26号病棟の一室に分室を移す。1969年(昭44)8月6日高山薬剤部長は大学紛争の際、診療棟への学生デモ排除の先頭にあつて、殴

打暴行をうけ、頭部外傷などにより人事不省に陥り、約1ヵ月入院治療をうけた。この事件以後、大学紛争は鎮静化の方向にむかった。紛争の間、検査・薬品情報(D.I)の整備をいそいだが、紛争解決とともに調剤の繁忙に人手を取られ、遅々として進まなかった。1971年(昭46)8月31日、高山新之助は京都第一赤薬剤部長に新任するた



薬局受付(1972)



薬剤保存室 (1972)

め退職したが、日赤の事情もあって京都薬大に移った。同年9月1日川島浩正薬剤部長(京薬)が就任した。

1972年(昭47)現在

部員 薬剤師29名(伏見分院も含む), 主事5名, 協約職員4名, 年間処方箋枚数, 件数は

枚数 入院 207,529 件数 281,576

外来 164,505 231,288

在庫薬品は約1,800種を数え, 常用薬品は約1,450種と漸増傾向を強めるため, 薬剤の品質管理と薬剤情報の整備, 薬剤の相互作用に関する文献学的課題および調剤業務の合理化等山積する問題の解決に迫られている。

(文責 川島浩正)

## 看 護 部

1872年(明5)11月に粟田口青蓮院内に仮療病院が設けられ, 患者の治療を行なうかたわら医療生を教育した時代から患者の世話をする人々が必要であり, 看護者の存在が考えられる。1889年(明22)4月, 医学校の附属として産婆教習所が設置され, 同時に産婆第1回の卒業生10名をみ, その後1898年(明31)4月, 附属看護婦教習所第1回53名の卒業生が出ている。

1903年(明36)3月, 専門学校令発布, その年の6月, 京都府立医学専門学校と改称され, 療病院がその附属病院となった。当時の看病人(看護婦)135名, 産婆生徒24名, 看病婦講習生78名であったと話されている。

1907年(明40)6月, 看病人採用規程(採用規準, 給料, 勤務誓約年限, 勤務時間, 停年など)が定められている。その要所を抜萃してみると,

第7条 看病人ヲ別ツテ看病人, 看病婦, 看病婦講習生及ビ見習生ノ四種トス

看護人及看病婦ハ2年以上看護ノ職ヲ執リタル証明アルモノ, 但シ看護人ハ其経歴ニ因リ適当ナルコトヲ認めルモノハ此ノ限ニアラス, 講習生及見習生ハ修業年限四ヶ年ノ高等小学校卒業生又ハ之レト同等以上学力アリト認めルモノ

第14条 看病人ノ日給ハ左ノ範圍ニ於テ給与

但シ看護人、看病婦ニシテ多年動続シ其成績良好ナルモノ日ニ限り特ニ給60銭以上ヲ給スルコトアルヘシ

1. 看護人一日給料金25銭乃至60銭
2. 看病婦一日給料金20銭乃至60銭
3. 講習生一日給料金18銭乃至25銭
4. 見習生一日給料金12銭乃至18銭

第16条 看病人ノ勤務誓約年限ハ左ニ記載スル処ニ拠ル

1. 看護人ハ滿2ケ年間
2. 看病婦ハ滿2ケ年間
3. 講習生ハ滿2ケ年間
4. 見習生ハ滿6ケ月間

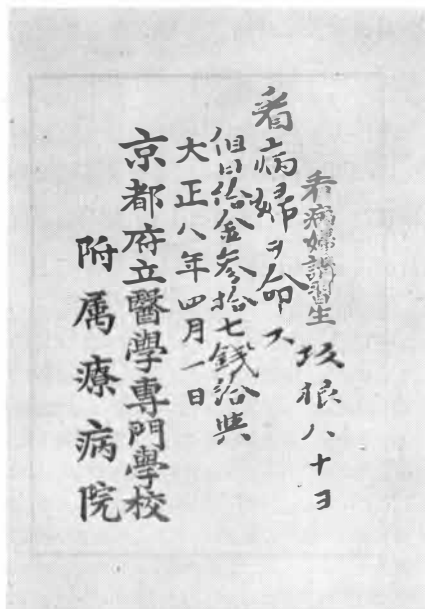
第22条 看病人1日ノ勤務時間ハ10時間乃至14時間トス 但シ講習時間ヲ包含ス

第23条 看病人 左ノ停年ニ達スルモノハ解免ス 但シ停年ニ達スルモ事務上必要ト認メタル場合ハ解免ヲ延期スルコトアルヘシ

1. 看護人ハ滿55年ヲ以テ停年トス
2. 看病婦ハ滿45年ヲ以テ停年トス

また、この時代に看病人規程(服務規程)があった。業務についての連絡、報告などはすべて庶務部で取りはかられていた。看病婦が看護婦と名をかえた理由も時期も明瞭でない。

第二次世界大戦中、看護婦も例外なく木綿からスフ入りのモンペ姿になっていたが、よく戦時下のきびしさにたえ、灯火管制のもと非番の者も真暗の寄宿舍から、手さぐりで病院にかけつけ臨時手術など、手術室に暗幕をはりめぐらし、冬などは暖房も完全でない中で、手術介助に当たった。第二次世界大戦の終わった年の12月末期、大学の民主化運動ははげしく、看護婦の間にも波及、看護婦長の反省要求を求め7～8名の看護婦長の退職をみるようになった。



看病婦辞令 (1919)

一方、第二次世界大戦終了後、わが国の医療関係者の資質について、きびしい批判があり、その資質の向上がはかれることになった。保健婦、助産婦、看護婦については、従来の制度が欧米先進国に比べて著しい立ちおくれを指摘され、さらに向上をはかる必要があるとされ、総司令部と厚生省の間において慎重に検討されて1948年(昭23)7月30日法律第203として保健婦、助産婦、看護婦法が制定されるにいたった。この法律において資質向上のためにとくに考慮がはらわれたのは、保健婦、助産婦、看護婦のいずれについても国家試験および国家登録の制度を採用していること、保健婦、助産婦、看護婦になるまでの教育期間を、看

看護婦については高等学校卒業後3カ年、保健婦および助産婦については看護教育3年の後、教育期間が半年以上になったことである。

このようにして、看護教育制度が変革され、また指導者、幹部、看護婦の再教育がなされている今日、今までの看護婦の業務をふりかえてみると、患者身辺の世話を家族に任せ、医師の助手を第一としてきた看護婦の本務は、ひたすらに患者の世話をすることであるという本来の職務であるとの改まった認識が高まってくるのは当然である。

一方、社会保険制度が進み、1957年(昭32)8月当附属病院も保険医療機関となり、1958年(昭33)10月1日から基準看護制(一般病棟1類)(結核病棟2類)(精神科病棟3類)を実施。この時一部の看護婦から当時の中村病院長に反対の申入れがあったが、専門職としての看護婦である以上、患者の看護は当然の義務であるとしりぞけられて、この制度の実施にふみぎったのである。1960年(昭35)10月1日から基準寝具実施。桑野美智子を1956年(昭31)7月1日総看護婦長に任命。その直後京都府立医科大学の組織の中に看護職員の所属する部門の存在が明らかでないことを指摘され、ようやくして1960年(昭35)6月看護部としての組織化をみるに至った。

1972年には、病院に勤務する看護職員数は定数490名である。大学全体の職員数が1972年(昭47)7月1日現在で1,073名(進学課程非常勤講師は含まず)のうち、その約半数を看護職員が占めている。

1963年(昭38)4月19日全日本国立医療養労働組合から人事院へ「国立病院および国立療養所に勤務する看護婦、准看護婦、助産婦の夜間勤務規則等に関する行政措置請求書」が提出された。内容は次のとおりである。

1. 看護婦、准看護婦および助産婦の月勤務日における夜間勤務(準夜勤、深夜勤)日数を6日以内とすること。
2. 看護婦、准看護婦および助産婦の夜間勤務者は看護単位40床以下につき1組最低2名以上とすること。
3. 看護婦、准看護婦および助産婦の産後1年間は夜間業務を禁止すること。
4. 国立病院および国立療養所勤務職員の休けい休息時間を職員個々に明示すること。

これに対し、1965年(昭40)5月24日、人事院総裁(佐藤達夫)から人事院判定が出た。判定書の最後の文章によれば、要するに申請者の要求はこれをそのままの形では認めることはできないが、厚生省所管施設に勤務する看護婦等の勤務条件については、上述の関係とおりこれを改善する必要があると認めるので関係機関においては、すみやかにこれについての調査検討を行ない、所要の措置を講ずべきものと認めるとある。

この頃から全国的に月8日2人夜勤制(2・8制)労働条件改善の声が一段と高く、当病院においても職員組合の要求の一つとして出されてきた。病院では最初5年計画で実施するという回答であったが3年計画となり、1971年(昭46)度中に完全に2・8制実施を職員組合に約束、1972年(昭47)4月をもって一応の解決をみることになった。

当病院における看護職員の労働条件については、まだまだ問題はあるとしても全国的にみれば非常に好条件下にある。にもかかわらず現在の看護部内にはらむ問題は、病棟の看護単位が少なく28床、多くて51床という病床数がまちまちでありながら、看護要員数が一看護単位16名(看護婦長1名含)であること、また外科系、内科系も同様であるということ、2・8

夜勤制という体制からの人員配置は、病床数や業務量の上から割り出した人員ではないところに、多くの矛盾が生じて来ていることである。最も深刻な問題は、患者の増加に伴って病院が増加するに比べて、看護婦数の増加はこれにともなわず、看護婦絶対数不足の病痕は深く当病院でも欠員の補充に頭を悩ます毎日である。

## 看護職員数

年度別	区分	総数	看護婦	准看護婦	技師 (看護人)	技師 (看護補助員)	その他	パート タイマー
1959年(昭34)	4.1 現在	306	203	74		29	0	
1960年(昭35)	"	343	217	92		34	0	
1961年(昭36)	"	373	220	118		32	保母 2	1
1962年(昭37)	"	384	224	124		33	保母 2	1
1963年(昭38)	"	383	226	120		35	保母 1	1
1964年(昭39)	"	372	212	116		41	歯衛士 1	2
1965年(昭40)	"	364	200	113		39	歯衛士 1 栄養士 1	10
1966年(昭41)	"	372	214	107		43	歯衛士 2 栄養士 1	5
1967年(昭42)	"	402	222	125	42年9月から 看護部に入る	44	歯衛士 2 栄養士 1	8
1968年(昭43)	"	447	235	147	15	40	歯衛士 2 栄養士 1	7
1969年(昭44)	"	479	264	153	15	40	歯衛士 1 栄養士 1	5
1970年(昭45)	"	461	263	137	15	40	歯衛士 1 栄養士 1	4
1971年(昭46)	"	479	294	126	12	41	歯衛士 1 栄養士 1	4
1972年(昭47)	"	499	315	126	12	40	歯衛士 1 栄養士 1	4

(文責 桑野美智子)



